THE CENTRAL REVIEW

中央公論

第廿五年　第六號

第二百五十五號


貴族御用
クラブ
齒磨(はみがき)
白粉(おしろい)
洗粉(あらひこ)
日本三大化粧として
天下萬衆の賞讃を受けつゝあり

THE CENTRAL REVIEW

中央公論

第廿五年　第六號

第二百五十五號

此廣告により御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

多感多涙の四傑作

文藝倶樂部

六月一日發行　第八號　正價廿五錢　郵稅二錢半

■口繪　精彩木版寫眞版原色版等粹の粹

◎小說 房子……廣津柳浪

◎小說 自殺……山田旭南譯

▽長廣舌！
▽活社會！
▽演藝界！
▽忙中閑！
▽新流行！

◎講談！
◎落語！
◎紹介！
◎時報！

◎小說 濱の女……薄田斬雲

◎小說 死物語……飯田旗軒

■百花園　例に依て紅紫綠亂彩光煥發

東京本町　博文館　（振替二四〇番）

信用なき店舗及卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す



多感多涙の四傑作

文藝倶樂部

六月一日發行　第八號　正價廿五錢　郵税二錢半

■口繪　精彩木版寫眞版原色版等粹の粹

◎小説　房子……廣津柳浪

◎小説　自殺……山田旭南譯

▽長廣舌！
▽活社會！
▽演藝界！
▽忙中閑！
▽新流行！

◎講談！
◎落語！
◎紹介！
◎時報！

◎小説　濱の女……薄田斬雲

◎小説　死物語……飯田旗軒

■百花園　例に依て紅紫繚亂彩光煥發

東京本町　博文館　（振替二四〇番）

信用なき店舗及卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

此廣告により御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

大發展 大飛躍 六月號 内容豐富趣味津々

言論禁壓 時代の實歷史 痴遊

當代名士の演説振

雄辯

青年と學問 新渡戸博士

生命の源 松村介石

定價一冊廿錢郵税一錢五厘六冊前金壹圓拾錢十二冊前金貳圓拾錢

議場彌次論 佐々木代議士

基督教と宗族制度 江原素六

禪學管見 近重博士

訓知理庵雄辯術示教 尺ドクトル

ローマ法の研究 青木博士

青年の覺悟 向軍治

言語には宰我子貢 笹川臨風

初學の演説家へ注意 松本君平

加波山事件志士 小久保代議士

諸名士の實驗より得たる雄辯術示教・諸名士の青年訓・青年辯士の縱横論議・義人田中正造・新人月旦・名士逸話其他材料如山

發行所 東京銀座壹丁目 振替口座東京二一一九 大日本圖書株式會社

信用なき店舗及卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

早稻田大學講師
五十嵐力新著

こゝろある新作文

脊皮高雅裝釘
紙數八百頁
全壹冊
正價
金壹圓七拾錢
小包十二錢

新刊廣告

本書は現時の作文實習に關して決前生後の具體的説明を與へむとしたもの、姉妹卷たる『新文章講話』と共に著者が多年の眞面目なる努力の結果で、又著者が文章研究に關する最終の著述である。著者が本書に於て期圖したる所は、◎材料の全く新なる事。……◎説明方法の全く新なる事。◎文章の分類を簡單にし、書翰文、記事文、論文の三大別中にあらゆる種類の文章を收むる事。◎實用的のものより趣致品位を主とするものに及ぼし、卑近單純なるものより高尚複雜なるものに及ぼす事。◎候文と口語文と、雅文體と言文一致體と、古格の文章と新式文章とを並べ掲げて、其の趣致、特色、句作りの呼吸を説明する事。……◎讀者の文章趣味を高むる事。……◎形式的なる、陳腐なる、わざとらしき文章を斥けて、情のうつッた誠の現はれた、穩健自然にして力あり生命ある文章を掲ぐる事。……◎實用方面を顧みると共に文學鑑賞の下地を作る事。

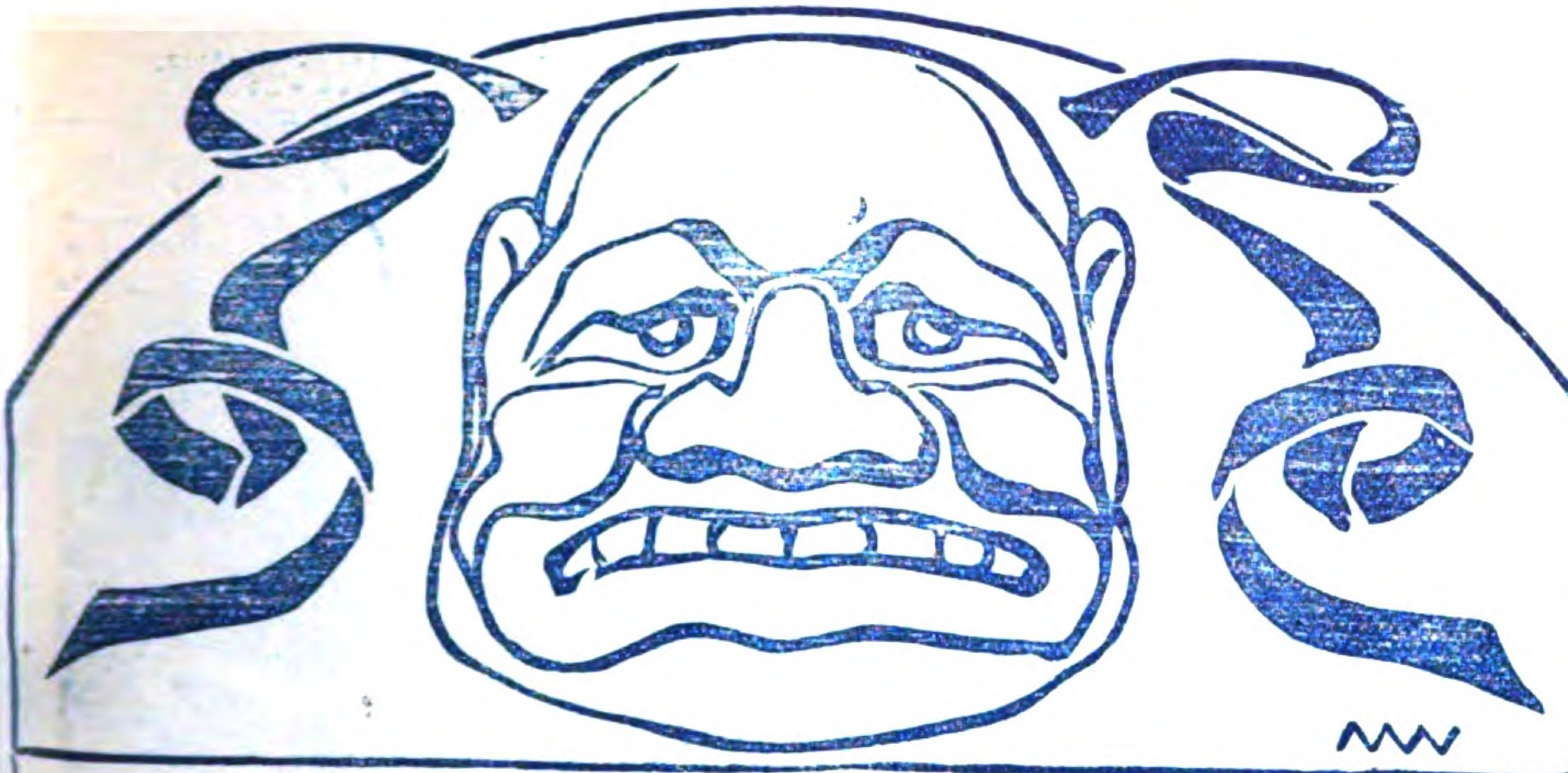
本書の主なる趣意は、一々の實例について各種の文章の本領、特色、正路、邪路を示し、如何にして古きを活かし、新らしきを磨き上ぐべきかを示し、如何に現時文章界の過渡時代に處すべきかを示さむと試みたる所にある。

◎五十嵐力著 再版 **新文章講話** 脊皮上製全一冊 七百四十頁 ◎ 正價壹圓七十錢 郵稅十二錢 ◎

『實習新作文』の對の卷にして、古今東西の文章論を總括し、日本文を例として、新しき説明を加へたもの、『實習新作文』に論理的根據を與ふべきものである。

發兌 東京牛込早稻田 **早稻田大學出版部**

發賣 東京日本橋區本町 **博文館**



中央公論第廿五年第六號目次



此廣告により御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

◉中村春雨著▲著者空前の傑作!!!

新社會劇 牧師の家

定價 金壹圓也 郵稅八錢

本書は、從來の歌舞伎劇幷に新派劇を排して新に起れる吾新社界劇團の其最初の試みに於て上場せられたる宗敎的問題劇の脚本にして、著者が多年の心血を注ぎたる苦心の作なり。宜なり、此作一度東京朝日新聞紙上に公にせられ續いて東京座に開演せらるゝや滿都の評壇爲めに動き毀譽褒貶重大なる反響を吾劇界幷に思想界に惹起したるは。若し夫れ本書の內容如何を知らんと欲すれば請ふ之れを著者の告白に聞け!!

著者の告白

之れ一面、余が三年有半の歐米滯在中、親しく目擊したる幾多の問題劇、思想劇の、余の藝術的情調の上に及ぼせる感化影響を語る第一聲である。と同時に他面、余が近代的思想の激しい動搖を體得して、新しき自己の發見に到達したる一種の告白錄である。故に余は日本に於ける最初の宗敎的問題劇(若しくは人生問題劇)として之を將に興らんとする日本の社界劇界の一のフート、ライトたらしめんとし、且又余の信仰の新しき告白としてはこれを今の混沌たる日本の宗敎界乃至思想界に對するーのサーチ、ライトたらしめんとするものである、兎に角作者の僞はらざる抱負丈を述べて置く。

東京市銀座通新橋際(振替二百番)新橋堂
東京神田表神保町四(同二〇七八九番)春秋社 發行

東京新橋新橋堂方 名著刊行會 發賣

巖谷小波山人譯

家庭劇 小公子

近刊豫告

可憐、無邪氣、高雅、優美、家庭劇として最上の定評あるものは、即ちこの家庭劇小公子なり。小說小公子は先きに譯書に依つて我邦に遍きも、脚本として紹介せらるゝは、蓋し此書を以て始めとす。而も譯者は斯道に獨特の妙技を有せるの人、その米國土產の隨一として、江湖に歡迎せられん事、正に小公子その人の如けん。

●黑岩周六著(新刊)

人尊主義

定價五拾五錢 郵稅六錢 郵券一割增

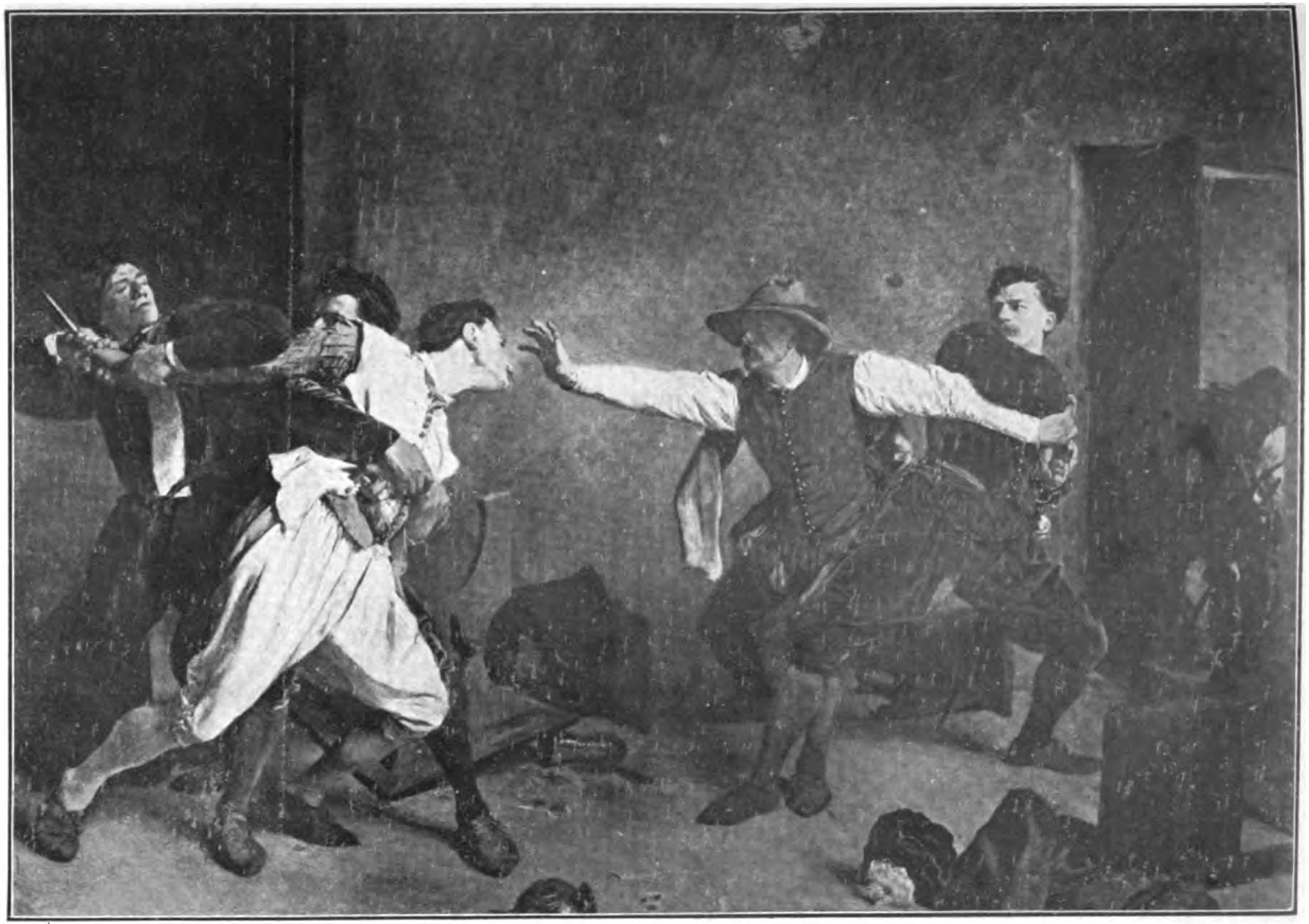
黑岩先生先きに病を得て病床にあり、橫臥しつゝ、萬年筆を呵して『人尊主義とは何ぞ』の一文を草せらる、本書の卷頭に揭ぐる論文は乃ちそれ、先生に獨特なる達意の文、犀利の筆鋒は詳に人尊主義を說いて餘蘊なし、加ふるに自餘の論文其數十有九或は文藝を談じ或は人生を論ずるもの亦悉く思想の源を人尊主義に發せざるは無し誠や人尊主義は先生の生命なり、主張なり、信仰なり先生の人尊主義を知らんと欲する者は須く本書を讀め

東京銀座通新橋際(振替二百)新橋堂書店
東京市日本橋區榑正町一番地(服部書店) 發行

東京新橋(新橋堂方) 名著刊行會 發賣

信用なき店舗及卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

La Rixe



By MEISSONIER

◉中村春雨著▲著者空前の傑作!!!

新社會劇 牧師の家

定價金壹圓也 郵税八錢

本書は、従來の歌舞伎劇并に新派劇を排して新に起れる吾新社界劇團の其最初の試みに於て上場せられたる宗教的問題劇の脚本にして、著者が多年の心血を注ぎたる苦心の作なり。宜なり、此作一度東京朝日新聞紙上に公にせられ續いて東京座に開演せらるゝや満都の評壇爲めに動き毀譽褒貶重大なる反響を吾劇界并に思想界に惹起したるは。若し夫れ本書の内容如何を知らんと欲すれば請ふ之れを著者の告白に聞け!!

著者の告白

之れ一面、余が三年有半の歐米滯在中、親しく目撃したる幾多の問題劇、思想劇の、余の藝術的情調の上に及ぼせる感化影響を語る第一聲である。と同時に他面、余が近代的思想の激しい動搖を體得して、新しき自己の發見に到達したる一種の告白錄である。故に余は日本に於ける最初の宗教的問題劇(若しくは人生問題劇)として之を將に興らんとする日本の社界劇界の一のフート、ライトたらしめんとし、且又余の信仰の新しき告白として はこれを今の混沌たる日本の宗教界乃至思想界に對する一のサーチ、ライトたらしめんとするものである、兎に角作者の僞はらざる抱負丈を述べて置く。

東京市銀座(振替二)新橋堂
通新橋際(百番)
東京神田表(同一〇七)
神保町四(八九番)春秋社 發行

東京新橋 新橋堂方 名著刊行會 發賣

巖谷小波山人譯

近刊豫告

家庭劇 小公子

可憐、無邪氣、高雅、優美、家庭劇として最上の定評あるものは、即ちこの家庭劇小公子なり。小説小公子は先きに譯書に依つて我邦に遍きも、脚本として紹介せらるゝは、蓋し此書を以て始めとす。而も譯者は斯道に獨特の妙技を有せるの人、その米國土産の隨一として、江湖に歡迎せられん事、正に小公子その人の如けん。

◉黑岩周六著(新刊)

人尊主義

定價五拾五錢 郵税六錢 郵券一割增

黑岩先生先きに病を得て病床にあり、横臥しつゝ萬年筆を呵して『人尊主義とは何ぞ』の一文を草せらる、本書の巻頭に掲ぐる論文は乃ちそれ、先生に獨特なる達意の文、犀利の筆鋒は詳に人尊主義を説いて餘蘊なし、加ふるに自餘の論文其數十有九或は文藝を談じ或は人生を論ずるもの亦悉く思想の源を人尊主義に發せざるは無し誠や人尊主義は先生の生命なり、主張なり、信仰なり先生の人尊主義を知らんと欲する者は須く本書を讀め

東京銀座(振替)新橋堂
通新橋際(二百)書店
東京市日本橋區(駿部)
檜正町一番地(書店) 發行

東京新橋(新橋堂方) 名著刊行會 發賣

La Rixe



By MEISSONIER

中央公論



第二十五年第六號
第二百五十五號

我が財政經濟の前途

（一）

如何に現内閣に快からざるものと雖も、其の財政々策の當を得たるを認めざる能はざるべし、有體にいへば吾人も現内閣の人氣取にのみ汲々として、苦味なく、辛味なく、凛乎男らしき所なきを厭ふと雖も、其の財政々策には隨喜せざらんと欲するも能はざるのみ、

西園寺内閣の人望を喪へる主因は、財政を膨脹せしめて幾んど引締る能はず、增税に次ぐに募債を以てするも尚ほ及ばずして、痛く人心を危惧せしめたるに在り、當時海外市場に於て我が五分利付公債は八十磅を破りて、七十磅臺にまで落込める程なりき、財政上外國に信用なく、延きて内國に人望を失ふに

至れる、實に已むを得ざるのみ、之に代れる桂內閣は、能く前車の覆轍に鑑みしもの也、吾人の聞く所によれば、桂侯は當時戰後經營の最大眼目は、戰時に費消したりし約二十億の內外債を償還するに在りと爲し、此がために幾種の方策を立て、之を容れらるるに非ざれば大命を拜しがたしと爲し、畏き御邊は勿論、元老よりも、政友會の總裁たる西園寺侯よりも、總て之を贊助して寸分も妨害せざるべしとの言質を得たりしといへり、其の眞僞は素より確むるを得ず、又確かむるの要なしと雖も、桂侯が內外債の整理償還に重きを置けるとは、此の一事を以て推知するに餘あるべし

(二)

故に桂內閣は其の初度(明治四十二年度)の計畫に於て、財政上の最大難問たる軍事費の大繰延を斷行して財政上に餘裕を生ぜしめ、一方に非募債主義を聲明すると共に、國債償還資金を增加し、以て國債に對する中外の信用を高むるに努め、尙ほ財政上の厄介物たる國有鐵道の經濟を擧げて特別會計に移し、第二回即ち四十三年度の財政計畫に於ては、財政上の餘裕を見繕ひて減稅的稅制整理を行ひ、一方には又官吏の增俸を斷行して以て財政の基礎の鞏固なることを擧證したり、乃ち議會との妥協によつて幾分稅制整理を緩和したるも、實際に一千萬圓以上の減稅を斷行して、然かも財政上綽々餘裕あることを明示したりき、獨逸は軍事費のため增稅を行ひ、竟に首相ビューロー侯の地位を犧牲に供せるあり、英國また財政難に苦み、延きて上下兩院の確執をも來して今に及び、佛米墺露の列國また皆財政に苦まざるは莫きに方りて、獨り日本のみ斯の如きは、列國の羨望せざらんとするも能はざる所なるべし、然かも況んや日露大戰役の後を承けて、未だ數年を經ざるに於てをや

桂內閣は財政上中外の信用を博すると共に、更らに五分利附內國債の借換を斷行すると兩度に及び、

毎回一億圓宛に對して共に二倍餘の申込ありき、此の間首相兼藏相たりし桂侯が、東京大阪間に於て意匠慘憺たりし苦衷は、何人も之を諒とせざるは莫かるべし

兩度の内債借換が、兎にも角にも成功を以て結了せらるゝや、桂内閣は直ちに佛都巴里に於て借換のため四分利公債を發行し、引續き倫敦に於ても然くして、共に豫想通りの成蹟を擧ぐるに至れり、思ふに是れ第一着の國債整理にして、苟くも好機到らば、更に第二着第三着をも逸せざる可し、吾人は桂内閣の能く始あり成竹あり、經路あり、卷舒ある財政々策を謳歌するに躊躇せざる也

（三）

世の外債借換を難ずる者の趣意は、第一其の發行價格低くして、手取額の少きを責むるに在り、第二の趣意は巴里倫敦に於て發行せるものゝ内より、約一億三千萬圓の現金を内地へ輸送し來るがため、左なきだに緩慢なる金融をして益々緩漫ならしめ、且つ通貨を膨脹して物價を騰貴せしむる虞ありといふに在り、頗ぶる人を傾聽せしむるに足るが如し

然れども思へ、我が四分利公債の倫敦市場に於ける取引價格は、本年二月頃に在ては實に九十二磅に過ぎざりしにあらずや、發行眞際に在ては、時に九十六磅半の價位にありしも、是は近く利拂ひを見越せし價値のみ、新發行の分は此の利拂ひを控除せざる可らざるのみならず、當時の取引價格よりは、約一磅を安くすること總ての例なるに於て、巴里に於ける九十五半、倫敦に於ける九十五は、未だ必らずしも安しとはす可らず、其の利廻りの四分二三厘なりといふに徵すれば、手取額九十乃至九十半か、多くも九十一を出でざる可き歟

假令戰時中とはいひ、五分利付は國債が尙ほ九十圓に發行し能はざりしとを思へ、又僅々二ヶ月以前

まて、我が四分利付公債の時價九十二磅なりしを思へ、兎も角九十五磅以上にて發行し、而して手取額九十磅以上なりしは、決して不利といふ可らざる也、否、不利と雖も今日の處到底是れ以上の好條件を取り得ざるを奈何ともする莫きのみ

（四）

外資を以て内債を償還するの非を唱ふる者に至ては、吾人殊に論辨を費すの必要なるを思はざるを得ず、外債條件の利不利は事實にして、多く辯說を容るゝ餘地なきも、外資輸入の可否に至ては、多く將來を推測するものにして、殊に論明を要すれば也

倫敦に於て發行したる一億〇七百三十六萬圓の内九千三百萬圓は償還資金として海外に積置かるべし、外債利子として我が年々支拂ふ所五六千萬圓を下らず、彼の戰時中最後に募集したりし外債は、之を倫敦に積置て、主として此の利拂に供し、以て正貨の外出を防止したりしも、更らに之を以て五分利付外債を償還するの必要あり、乃ち此の九千三百萬圓は主として之に充當せらるべし、又巴里に於て發行したる一億七千四百十五萬圓の内、約六千萬圓は歐洲市場に散在する我が五分利付内債償還に振向けらるべし、（歐米人が日本内地に於て買取りたるもの約六千萬圓と計算せらる）乃ち約一億三千萬圓は内地に輸送し來らるゝ計算也

此の一億三千萬圓は、五分利付内債の第三回償却資金に充てらるべし、内債借替に就て其の引受を約せる内地銀行のシンヂゲートは、第三回に於て乘換を欲する者の外總て現金を以て償還せんことを希望し、若し全部現金償還を欲する者のみにして、國庫の都合之に應ずるを得ざる場合には、シンヂゲート之を引受くる豫定なりしが、此の一億三千萬圓は即ち之に振向けらるゝ豫定なりといふ、然れども大抵は四

分利付公債に乘換ゆべく、現金償還を欲する者は、多くも其の半數に過ぎざるべきを以ても、約六七千萬圓は徒らに之を國庫に寢せ置かざる可らず、之を寢せ置かずして民間に放出すとするも、兎に角新たに一億三千萬圓の外資を市場に流通せしむる以上、金融緩慢に苦める我が市場に與ふるに益々惰氣を以てし、徒らに通貨膨脹に由て物價騰貴の惡影響を招致するに止まらんと論ずる者あり、是れ畢竟するに非外資輸入論者也、卽ち之を可否する議論の根柢は、勢ひ外資輸入の利害論に歸着せざる可らず

銀行家のいふ所によれば、金融は實に緩慢なりと雖も、實は遊金あるに非ず、現に僅々四千萬圓の納租期に及びて、早く既に日本銀行の貸出高の激增せることと之を證すといへり、新事業の興る可くして而して起らず、不景氣の聲依然として到る處に擧く所以のものは、必ずしも米價下落のために地主の損する故のみに因らず、必らずしも日本精製糖、日本醬油、北海炭鑛等の大會社の破綻百出せるに怯心を生ぜる故のみに因らず、實に主として資金乏しきに由る、實業家が屢々外資輸入の計畫を試みしは實に此がためならずや、然れども不幸にして實業家の計畫は實行せられざりき、去れば內閣が其の財政上に伴ふ信用を利用して、事實上外資輸入を行ふは、取も直さず實業家の計畫して而して行ふと能はざりし所を實行したるものならずや、苟くも外資輸入を非とせば則ち止む、然らずんば之を難ずる理由なきにあらずや、物價騰貴の如きは多くも僅かに一二分のみ、必らずしも多く介意するに足らじ、然り、物價は騰貴するよりも下落するを可とするも、騰貴の害は小也、外資輸入の利は大也、小害のために大利を捨つ可らざるのみ

（五）

吾人の見を以てすれば、普通利子が尙ほ六七分の高利に在るは國の深患也、株式會社の株主たる資本

主が、一割以上の配當にあらざれば甘んぜずといふが如き、殊に國の深患也

我が製作品は、既に世界の市場に出て、世界的競爭の渦中に在り、將來益々其の販路を擴張せんと欲せば、勢ひ彌よ海外に出てゝ而して世界の製作品と競爭せざる可らず、然るに記せよ、歐米先進國の製作品は、低廉なる資本に由り、低廉なる利益を視て製作せらるゝものなるを、七八分の高利や、一割以上の配當を强取せんとする資本家の羈絆を受けざるものなるを、我が製作品にして、眞に之と競爭せんと欲せば、必らず低利の資金と、低廉なる利益配當に甘んずる資本主を得ざる可らず、然らずんば到底自立するを得ざる也、到底販路を世界に弘めて發達する能はざる也

此の大勢上の見地よりして、吾人は政府が五分利付公債の借換を斷行せるを賛し、又外資輸入の實行に謳歌す、實際の利廻り四分五厘に上らざる低利の資金を引入るゝは、七八分以上の我が高利を打破するに足れば也、多くの資本主をして、漸く低利の配當に甘んずるに至らしむ可ければ也

今日の農家、殊に地主は五分乃至五分弱の利廻りを視るといひ、盛んに不平を唱ふるも、土地の如き堅實なる事業より四分以上の收利を獲んとするは甚だしき誤想也、彼の會社株主が動もすれば一割以上の配當を强求するも亦無法也、冒險的に野蠻未開の地に投資し、事宜に由ては投資の全部を水泡に歸する掛念ある場合には、冒險の賠償として一割以上、二割三割の利益配當を得ると有らんと雖も、堅固安全なる株式會社に在ては、通例五分の配當を標準とせざる可らず、然らずんば我が工業製作品は到底世界と競爭するに堪えず

我には幸ひに賃銀低廉なる職工あり、指業に巧みなる職工あり、然れども單に之のみにては世界の競爭場裏に馳騁するに足らず、多く工作品の原料を自國に有せざれば也、其他資金高利にして資本主また

程度に在らしめざる可らず、是れ啻だ我が工業自存の道たるに止まらず、實に立國上已む可らざる必要事也

外國資本を輸入し來りて高利の內國債を償還するは、事實外資の輸入に外ならずして、漸く資本を潤澤ならしめ、之に由て金利低下の趨勢を促がし、延きて事業興起の良影響を見んとするもの也、啻だに國庫の負擔を減ずるのみに止まらざる也

或は第三回の五分利內債借換に於て、現金償還を欲する者少く、國庫徒らに巨資を擁すとせん乎、然らば則ち來年度に於て、更らに三億圓の五分利付內債を償還する基金に充當して可也、減債資金の外、國庫に餘資なくして、單に五分利より四分利に乘替えしむると、六七千萬圓の餘財を所有し、乘替を望まずして現金償還を欲するものには、其の望みに應ずると、孰れか始末を良くし得るに非ずや、此の餘財あれば、國家も心強く借換を斷行し得べく、國民も亦安心して之に應ずるを得るに非ずや、換言すれば、外國より得し現金を國庫に所有するは、四十四年度に於ける三億の五分利付內債を始末するに伽强なる保證金を所持するに齊し、寧ろ國庫の幸福也

（六）

財政の基礎は鞏固也、現に中外に於ける信用は殆んど一分を增減し得ざる其の裏書也、隨つて吾人は一辭を贅するの愚を要せず

我が經濟界の前途に至ても、吾人は斷じて樂觀して可なるを確信す、一億三千餘の外資輸入は、我が經濟界を順調ならしむべくして、絕て不利の掛念なきと、實に前來論辯したりし如くなれば也、之に由

て來年度に行はるべき三億圓の五分利付內債始末の基礎も立てり、吾人思ふに株式市場は漸次景氣附かん、不景氣の聲は漸くにして去らん、而して事業興起の機會竟に來らん、時に多少の伸縮消長はあるも、大勢は必らず然るべし

（七）

但だ吾人の掛念に耐えざるは、桂內閣が財政上の信用を得たるに得意を催ふすの餘、例の人氣取政略よりして、浮かく財政の膨脹を來して、再び西園寺內閣の轍を蹈むに至らんこと是れ也、看よ、衆議院に絕對多數を有する政友會は、第廿六議會に於て、鐵道延長のため外債募集の建議を通過せしめしにあらずや、平生消極主義を標榜する國民黨すら、公々然として海軍擴張を主張しつゝあるにあらずや

議會に於ける桂首相の答辯を視るに、鐵道の延長は政府も同じく希望する所なるも、外債募集は今其の時機にあらず、而して時機の如何は茲に明言するを得ずといへり、現在は洵に鐵道のために募債する意思なかるべし、然れども明年は如何、明後年は如何、鐵道の經濟假令特別會計なるも、之がため募債せば、桂內閣が其の成立の時に聲明せる非募債主義は破る、而して是れ財政破綻の端緒たるや必せり

議員が海軍は果して現在の計畫にて滿足なるや、將來擴張の意圖なきやと問ふや、桂首相は答へらく、是れ當局者の平生最も苦心する所、例へば滿洲鐵道中立の提議の如き、換言すれば、東洋の一低氣壓也、然れども政府は從來平和主義を執り、戰後經營の實蹟を擧ぐる趣旨に依りて、軍備を現在の如く計畫せり、十年は勿論、五年後と雖も、一般形勢の變化によりて如何に變化すべきかは、今日神の外知る者なし、將來如何に已むを得ざる形勢を現ずるやは素より保證し能はざるも、兎も角現在の狀況に於て、現在の軍備を適當なりと思ふと

惟ふに海軍擴張は到底避く可らず、假に十年を期して十萬噸の擴張を爲すとせば、年々一千萬圓を要すべく、五年に十萬噸、若くは十年に二十萬噸とせば、毎年二千萬圓を要すべし、是れ實に財政上の一大難問たり、之を爲す鹽梅素より其の途あらん、但だ國債償還に影響を及ぼすが如きとは、斷じて之を避けざる可らず、然らずんば中外に於ける我が財政上の信用失墜せん、若し然らば我が經濟界また不祥の結果を見るを免かれざる也

日本婦人論

（一）

日本婦人は、今正さに二個の問題を其の纖柔なる双肩に荷へり、彼等自から之を知覺するや否やは吾人素より知るに由なきも、其の問題たる、彼等に取て甚だ輕からず

二個の問題とは他莫し、一は舊來の風習を守るべきや捨つべきや是にして、他は强姦の侮辱に對して婦人自から如何に措置すべき乎是れ也

（二）

天子の妃嬪の居る所を後宮といふ、後宮は俗に所謂奥也、將軍又は三公の夫人を行儀中又は御臺所といひ、諸侯大夫の室を奥方といひ、其の未亡人を後室といふ、是れ皆夫人が屋内に籠居するの謂にして、夫は外に在て働らき、妻は內に於て家事を處理すると、實に東洋殊に日本の風習なり、乃ち婦人にして

社會の表面に立ち廻り、所謂交際社會に翺翔するが如きとは、曾て見ざる所なりき、今や文物儀禮多く歐米に倣ふに當り、此の舊風を捨てゝ更らに歐米の新俗を移さんとするの議あり、婦人敎育の趨勢の如きも、多少其の色彩を佩ぶるに似たるが、一方には又賢母良妻主義と唱へて、全然舊來の風習を支持すべしと倣すものも絕無ならず

吾人の解する所によれば、歐米の婦人は好みて交際社會に翺翔し、常に男子と追隨して宴筵に列し、舞踏し、飮食し、歡談笑語し、來往存問し、演劇其の他多くの娛樂場にも出入して、所謂交際期節に在ては、幾んど晏座の暇も無し、去れば最も重要なるべき家事は擧げて之を婢僕に委し、家政の樞軸は其の女中頭に、育兒のとは保姆に委任せざるを得ずして、其のため名は主婦といふと雖も、家に在るも實際の權勢なく、婦人特有の虛榮心を滿足せしむるに足らず、玆に於てか其の美容麗姿を以て多くの男女間に權威を示さんと欲し、夫を勸めて益々交際社會に繁く出入せしむるのみならず、其の矜持する美容麗質をして、彌よ其の光輝を發揚せしむるがため、身邊を裝ふに金銀珠玉綾羅錦繡を以てし、輕車に自働車に、凡て流行としいへば、其の粹を集めざるなく、又其の先を制せざる莫く、斯くして歡樂に醉ふて以て其の虛榮心を滿足せしむるに汲々す、家政の如き育兒の如き、重要なりと雖も然かも質實なるもの如何で之を顧慮するを得んや、否、顧慮せんとするも實際の權力は女中頭に在り、保姆に在り、之を奈何ともする能はず、殊に况んや家內の事情には幾んど全く門外漢たる如きをや

斯の如き習風は、果して以て學ぶべきや否や、婦人の天職なるものは、果して交際社會に飛舞して、歡笑し娛樂するにありや、若し斯の如くんば是れ娼妓と撰ばざるのみ、吾人思ふに、婦人の天分は、男子を扶けて、更らに己等より良き人を仕立てゝ以て國家社會の向上に貢献するに在り、此がため男子

の外に在て活動するに對し、婦人は内に於て能く家政を修め、男子をして寸分も後顧の憂なからしめ、兼ねて子女を鞠育し修養して、傑人良婦を作るに努むるこそ、寧ろ偉大にして氣高なる婦人の天職ならざらんや、婦人をして交際社會に翱翔せしむる結果は、素より男子の放縱を制限するに多少の効なきに非ず、少くも男子をして婦人を憚からしめ、公然妾を蓄へ妓に戯るゝが如き陋風を抑ゆるを得べしと雖も、其の弊たるや亦多し、第一は婦人をして驕奢豪華を競はしむるがため、男子を生活難に陥れ、第二は醇良なる風俗を傷害す、現に歐米の交際社會に飛舞する婦人にして、醜聲の近く可らざるものあるは其の證也、單に男子の醜行に止まる尙ほ忍ぶべし、婦人をして之に讓らざる醜行を演ぜしむるに至つては、誰か之に忍ぶ可んや

　近時縉紳の夫人にして、俳優を買ふもの、屢々世評に上れるに看よ、彼等の幾んど總ては、所謂奥様として家に蟄し、好みて家政を修め子女を育するものにはあらずして、却つて新智識を鼻に掛け、新時代の新潮流に棹すと倣し、綺羅を飾り、珠玉を輝かして頻りに交際社會に出入する者のみならずや

　去れば議論の決定は明白也、飽まで我が舊俗古風を保守して、婦人は家居閉戸、家政を修め子女を養育して以て家庭の女王たるに止まるべし、斷じて所謂交際社會なる部面に出づ可らず、我が交際社會の獨り歐米に異なるを嘆ずるを休めよ、交際社會にして婦人なくば夜を明かし難しと謂ふ乎、然らば則ち彼等に供するに藝妓を以てせよ、藝妓なるものは、寧ろ彼等の渇仰する所なるに止まらず、又外來の賓客の擧げて歡迎する所のものならずや、所謂交際と稱する事業の如きは、此の輩に一任して可なるのみ、我が日本婦人には、家庭の女王として別に氣高偉大なる天職あり、一身を之に捧ぐるも幾んど足らざるを愛ふ、何の閑暇有てか藝妓たる役目をも兼ぬ可んや

假令古風の家居閉戸主義を保守すと雖も、全く時代と相隔つと甚だしければ陥ゐりて固陋と爲る、故に婦人は科學の智識を有すると共に、又世界の新傾向を看取し理解する智識あるを要す、學校教育を攝取するの必要なる、素より多言を要せざる也

吾人は望む、我が婦人が家庭の女王として無限の權威を有すると共に、又至大なる愛を湛え、能く家政を修め、子女を養育し、清新なる家風を立てゝ以て、四周を感化せんとを、之を女中頭や保姆に一任して家庭を羇旅と一般ならしめ、己れ獨り所謂交際社會に飛舞するが如きは、寧ろ婦人自から己れを卑む也、自殺也、自墮落也

（三）

近時の新聞紙を看るに、婦人の强姦せらるゝの沙汰頻繁たり、或は强盜のために强姦せらるゝあり、或は闇夜途に要せられて强姦せらるゝあり、然かも此の强姦のため貞操を汚されたる婦人にして、自から其汚點を掃拭する者の絕無なるは何ぞや、或は之あらん、吾人不敏にして未だ之を知るに及ばざる乎

强姦せられて而して官署に訴へ出でざるあり、謂へらく、以て自家の恥を蔽ふのみと、唯だ之を蔽ふを以て汚辱洗雪の手段と做す乎、吾人頗る惑ひなき能はず

古者强姦せられて死する婦人多かりき、婦人の頭にせる簪を以て、猶ほ男子の刀の如く、强姦又は他の凌辱を加へんとする者を防禦すべき唯一の武器とすること、是れ古來の傳說ならずや、去れば古の心ある婦人は、屢々簪を以て敵と戰ひたりき、力屈すれば則ち舌を嚙みて死し、死を以て强姦の凌辱を雪ぎたりき

所謂婦人の氣節として教訓せられしものは、死を以て强姦せんとするものを防ぎ、力盡て乃ち死する

を以て婦人の本分としたりき、今の婦人は學校教育及び學校以外の教育によりて、果して此の場合に處する如何の方法を學べる乎

强姦せんとするものを禦ぎ、竟に之を殺すは正當防衞にして、法律も之を承認す、然るに今の婦人にして、曾て玆に至らざるは何ぞや、始めより力の男子に及ばざるを察して自から屈從する乎、然かも屈從と共に死して以て其の貞操を護らざるは何ぞや

吾人は此の問題を提へて、先づ識者の前に提供す、學校にして之を敎へざるは果して何の故ぞ、父兄の能く之を砥礪せざるは果して何の心ぞ、斯の如き問題を以て婦人のため輕々看過すべきものと做して然る乎、吾人は嚴に之を問はんと欲す

氣節なき婦人は娼婦と擇ぶ所なし、氣節なき婦人にして家庭の女王たるが如き潛越の極也、賢母良妻として家を修むるに足らず、又子女を養育するに足らざる也、故に我が婦人をして眞に其の天職を全ふせしめんとせば、婦人自身先づ此の氣節あるを要す

ハレー彗星と新社會

藤井健治郎

一

ハレー彗星が我地球に接近してその尨大なる尾で、わが球面を全然包圍してしまつた時には、その有毒の瓦斯の爲に地球上に生息する一切の生類は悉く死滅して仕舞ひはせぬか、縱令やそれ迄に至らぬとも、大暴風などを惹起して、地球の氣象に顯著な變化を來すことは有るまいか、兎もあれ其瞬間には何等か異狀珍奇なる現象を現はさずには濟すまい、彼と想ひ此れと考へ煩つたのは、全地球面に生息する幾億の人間の、五月十八日夜に於ける想像であつたのである。明くれば愈よ其世界終焉の日とある天文學者によつて豫言せられた十九日となつた。何の變化もない、彗星が太陽面を通過し初むるといふ十一時二十二分となつた、又何の變化もない、太陽面を經過し終るといふ○時二十二分となつた、更に何等の異狀も呈せぬ。世界終焉の日の太陽は、極めて平穩に極めてうらゝかに西に沒してしまつた。而かも有らゆる生類は昨日の如くに熙々として生活し、氣象にも亦何等の變化を認めること出來ず、寧ろ近頃に珍らしい清朗なる天氣であつた。終焉の日が迫り來つたとて昨日まで泣いたり、叫んだり、神に祈を捧げたり、穴を堀つて其中に潜り込んだりして大騷ぎをした人々は、今日一日の此現象に對して餘

りの意外に茫然自失、まるで狐に魅されてもした想をしたことであらう。

夫れ斯の如し矣。凡そ何事か新しきものが、自然界にせよ、人事界にせよ、來るべしと信ぜられた時には人は、その際必ずや何等か異常なる變化を呈するてあろうと想像して、つまらぬ杞憂を懷くは一般の人情てある。弘化、嘉永の頃に、泰西諸國が陸續來つて開港貿易を求めた時に、我が邦內に於いては尊王攘夷、開國佐幕と、國論大に沸騰し人心爲に恟々として定まる所なかつたのである。そは要するに、一たび外國と交際を結ぶ時には、我等大和民族の凡ては碧眼兒の爲に奴隷にされて、襟を左にせなければならぬだらうとの杞憂に驅られたからである。又明治二十一、二年の頃、各締盟國との條約を改正して汚辱せられてあつた國家の體面を恢復し、併しその代りには內地雜居を許すといふ議の起つた折にも國論大に沸騰して、その可否に就いて論諍せられたのである。しかし、そういふ議論の沸騰したのも、その源に溯つて考察すれば、もし彼等西洋人に內地雜居を許したならば、我國は忽ち彼等外人の蹂躙の物とせらるゝであらうと取越苦勞を持つた爲めに外ならぬ。此の如く、從來未だ見ぬ所の若くは甚だ稀に見る所の現象の襲來に對して、杞憂を抱くのはなべての人情て、また是非もない次第てある。

今や我國情は次第々々に變遷しつゝあつて、人々皆其居に安んぜずに居る。生活上の舊信念は、既に其力を失つて居るにも拘らず、尚ほ且つ人心の一隅に彷徨つて其存續を計りつゝある。そして偏に新信念の襲來を防ぎ、且つ拒むの狀を呈しつゝある。斯くして我社會一般の調子が凡て浮腰になつて、少しも沈靜の態がない。此間或は疑懼の念に驅られて、自ら其生存を絕つものもある。或は自暴自棄に其日々々を、極めて無意義に送り居るものもある。或は既に浮腰になつた舊信念を、再び呼び戾し、強いて新信念に向つて一矢を酬ひんと試みて居るものもある。斯かる狀態は果して何時迄續くてあらうか、新舊の交代は、圓滿平和に

過して行くことが出來ぬものであらうか、或はその際、一嵐が必要であらうか。兎もあれ此推移の遲々たる現狀は、是れ或は人間の通有性なる取越苦勞に出て居るんてはなからうか、新信念の確立は、存外無事不穩に來り得べきこと、猶彼のハレー彗星の場合に於けるが如きものではなからうか。

二

能く之を寄席の落語家に聽く、田舍の親爺が、一錢五厘の端書は高いから、一錢二厘に負けろと郵便局で直切つて居つたのを見たと。吾人は落語家の此一小話を聞いて、私かに失笑を禁じ得ないのである。何故であるか、そは言ふ迄もなく、端書は一錢五厘、普通切手は三錢といふ事に、國家の規定でチャンと確定してしまい、到底任意に動かすことの出來ぬものだとの信念が、確實に我々の胸に植ゑ着けられて居るのに、一錢二厘に負けろと來るから可笑しいのである。しかし翻つて考察すると、此の如き事は我々も他の方面に於ては毎々之を爲して居るのである。例令へば烟草は今や政府の專賣であつて、而して朝日は八錢、大和が九錢、敷島が十錢富士が十二錢といふ價格はチャンと確定つて居るのである、それは、端書の一錢五厘と異つたとはない、けれども專賣の初めて行はれた當時には、各小賣店では、或は五分、或は一割の割引をしたもので、また買ふ方でも、割引するのが當然(あたりまへ)と思ひ、從て割引をする樣な店からばかり買ふやうにしたものである。田舍漢の一錢二厘の端書と何の違つたことがあるか。而かも人は後者を笑つて前者を怪しまないのである。然るに其後專賣局では、各小賣店に向つて割引の不都合を警告する、此に於て各小賣店では最早價額の割引は出來ぬ事になつたから、今度は十ケ、二十ケの多くを購買する得意には、それと同種の烟草を一包みお負けに添えることにした。と、專賣局では之をも亦止めた。斯くて今日では各小賣店では烟草一包に付いて小マッチ一個を景品とすることにした。景品を掛けて多く賣らうとする、景品を望んで人は又多く其店から買はうとする。考へて見れば、此はどうしても一錢

五厘の端書を一錢二厘に直切るのと決して大差はないのである。而かも人は後者を笑つて、前者を怪しまないのである。」

此の如く、煙草の方では或は價額を減ずる、或は景品を添へるといふ樣な事も敢て怪しとはせぬけれども、端書の方は笑ふ、何の爲めであるか。それは、煙草の方は政府の專賣となつてから日猶ほ淺く、從つて我々の心に一定の價額で賣買すべきものとの信念がまだ確實に植ゑ付けられないから、多少割引をする、景品を添へるといふ樣な事があつても、從來の慣れ來つた賣買法に比して、何等奇異の感も起らぬのである。然るに端書となると大に違う、郵便制度は我邦に於いては初めから國家の營むところで、從て國家の定めた價額は動かせぬとの習慣が初から着いて居るから、何人もそれに向つて直切るものはない。そこで一錢五厘の端書を一錢二厘にしろといふ田舍親爺を笑ふのである。が、今日では端書の一錢五厘と共に、朝日の八錢といふ事も、段々我々の胸に明確にされて來つゝあるのである。つまり我々は國家の定めた一定の價額に服從して、決してそれを二三にしない、そうして其事を正當の事と認めつゝあるのである。正當の事、不正當の事、即ち正、不正は、畢竟ある規定に合致したか否かに外ならぬのである。然るにその規定は如何うして出來た者かといへば、それは國家が、國家自身の力で勝手に決定めたものである。國家は一錢の端書を一錢五厘に値上をしたし、六錢の朝日を八錢にしたのである。規定の創造者は國家であつて、それに服從して正といはれ、服從せずして不正と謂はるゝは吾々である。斯の如き場合國家を權力と稱する。正、不正は權力あつて而して後始めて生ずる。

三

右は正、不正の觀念に就いての議論であるが、單にそれのみではない、其他有らゆる道德生活に渉つて考へて見ても、權力の存在が客觀道德の成立に取つて缺く可からざる一の要素といふ事は、全く否定し難い。

客觀道德とは何であるか、吾人が社會生活を爲すに當

つて、必ず遵守、服從せざるべからざる所の規範を指すのである、平たく言へば、吾人の行爲を拘束する所の、もろ〳〵の「可し」、「可からず」を謂ふのである。我々は國家に忠ならざるべからずとの規範を有して居る、そして國家の爲に或は自分の血を捧げ、或は金を捧げ、或は智力を捧ぐる人を忠良なる臣民と稱して居る。しかし、若し血を捧げねてもよし、金も智力も貢げないでも宜い、孰れでも宜いものとしたなら、好んで血や金や、智力を捧ぐる者、五千萬人中果して幾人あるであらうか。而かもその幾人の人々もその場合には必ずしも忠良の臣民とは謂はれぬのである。唯々國家てふ權力が、血と、金と、智力とを吾々臣民に要請して居るから、その要請に副へるは忠良、副はざるは不忠、不良となるのである。忠良の德にも國家の權力は必要である。又我々は夫婦相和し、能く子女を教育し、一家を治め行かねばならぬとの規範を有して居る。そして其規範を守る人をば善良なる夫、善良なる親と稱賛して居る。併是れも、夫婦は和しても宜し、和せずとも宜し、子女は教養しても宜し、せずとも宜しといふことであつたなら、夫婦の德を守り、親たるの義務を果たすもの天下果して幾何の人があるであらう。唯々社會が家族制度てふものを設けて、夫婦の和、親子の親を要請して居るから、そこに善良なる夫婦、善良なる親といふことがあるのである。社會は一つの權力である。夫婦、親子の德にもまた權力が必要である。我々は又衆人と交るのに博愛の精神を以てせざる可からずとの規範を持つて居る。けれどもそれも亦社會といふ權力がその規範の實行を吾々に要請して居ればこそ、吾々の規範となつて居るのである。その事なくば、吾々は必ずしも博愛を以て吾人の規範とはしないのである。世人よ試みにその他の道德生活について右の如くに點檢せられよ、客觀道德の背後に權力の潛在して居ることを看取すること、蓋し難事ではあるまい。權力は客觀道德の一要素たることを更に否定出來ぬ。

希臘の昔カルリクレス、トラシュマホスなどいふ學者が出て、道德の根柢は權力也といふ說を唱道した

のである。前者は、多數の弱者が、一致して少數の强者に對して、彼等の利益を保護する爲めに道德を作くつた者で、弱者が權力者であると唱へ、後者は其反對に强者が自己の利益を伸暢せんが爲めに道德を作くつたものである、故に權力者は强者であると說いたのである。けれども時の人は一括して是れ彼等詭辯學徒の一囈語に外ならぬと定めて一笑に附し去り、後代の批評家亦不用意にも、其處に多分の眞理の含蓄されて居ることを看却し居るらしい。近世ではホッブスが最も確實に、最も具體的に此趣意を論じて、彼の有名なる王命道德說を立して居るのであるが、矢張り多くの批評家は、此說に對しても、彼の所說の色々の缺點と共に、其長所をも看却し去らうとする傾を示して居る。併しながら眞理は如何なる障礙、如何なる迫害に遭つても決して湮滅し去るが如き弱いものではない。近頃になつて客觀道德の權力的根柢を論ずる學者が、又多分に輩出して居る。我國では加藤老博士の如き、歐羅巴ではハルラーの如き、グンポルヰッの如き、アントン・メンガーの如き其尤なるものである。特にメンガーの最近の著「新道德學」は、紙數百頁にも滿たぬ小冊子ではあるが、其論述的確、趣旨明徹、慥に讀書子の一讀を價する書物である。

四

メンガーは其劈頭に喝破して曰ふ、道德的なる人とは、社會上の權力關係に順應する人を言ふので、不道德なる人とは、それに順應せざる人の事を指すのであると。一讀洵にその味のある言たるに服するけれども、此の命題の文字通りの意味には、僕は俄に贊同することは出來ぬ。けれどもメンガーの趣意の有る點を汲み取つて考察すれば、此言の必ずしも捨つべきに非らざるを感得するのである。試に僕の說を述べやう。敢てメンガーに問はん、社會の權力關係に順應しさへすれば、順應したといふ只それ丈で、吾々は直にその行爲を道德的であるといふてあらうか。私有財産制度は、今日の國家權力が承認し、保證する最大事件の一である。其私有財產制度中に現れた國家の權力の意思に服從し

さへすれば、單にそれ丈て道德的行爲と言ひ得るてあらうか、其服從する心持、即ち動機なるものは少しも問ふ所なくしてよからうかと。吾々は此動機を看却して行爲の善惡を判定し得るとは、未だ曾て知らぬものである。然るにメンガーは、唯々單に順應、不順應といふことと丈けて、行爲の善惡を決定めやうとして居る者であることを、此命題中に示して居る。是れ僕がメンガーの此の命題の文字通りの說に贊成出來ぬといふ所以である。しかしながらメンガーの意、我々の客觀道德は社會の權力關係よりして生じ來つたものであるとするにあるならば、而して僕がその全篇を通讀して得た僕の判斷から察すれば、恐らくは然らんと思ふのてあるが、若し果して然りとするならば、僕は決してメンガーの言分に、眞理の多分の存在を拒むものてはない。

湯武の放伐は古來非常に議論のある事てある。湯武の行爲は果して道德的に是認すべきものか、馬を叩いて文王を諫めた伯夷叔齊の語は道德的に賞贊すべきものか。支那ては堯舜禹湯、文武周公と、並べて古聖と稱せられ、孔夫子亦彼等を崇めて先聖とし、自分は只先聖の道を述べたるのみて、自らは一毫も作らぬとさへ稱して居る。とはいへ、さる禪讓放伐を絕對に否認する我國家の目からすれば、湯王文武皆簒奪の臣といふ可きもので、伯夷叔齊の言分に飽く迄贊同を表せなければならぬ。併し支那ては有德の者が立つて斯民を治めるべきものとし、禪讓放伐は明に之を是認して居るので、易の繫辭傳の如き、或は孟子の如き、共に最も明に之を論じて居る。

斯樣に國情が違ふから、湯武の行爲に對する道德判斷も亦變らざるを得ぬ。國情の異なるとは、それは言ふ迄もなく國家の權力、若くは主權者の權力に對する觀念が違つて居るといふことをいふので、支那ては主權者の權力なるものは、必ずしも永久の生命を有するものてないとされて居る、時あつて榮枯あり、生滅あるを許されて居る。然るに我國ては主權者の權力は絕對無限て、そして、又永久の生命を有し居るものとの

信念を有して居る。即ち論じ詰むれば、國情の異なるとは此主權者の權力に對する觀念の相違といふに外ならぬ。此觀念の相違からして、支那では是認される湯武の行爲も、我國では全然否認される譯となる。知るべし客觀道德の權力關係に因由するもの甚だ多いことを。

昨年横濱開港五十年の祝賀のあつた時に、同時に井伊大老の銅像の除幕式が有つたが、それに就いて餘り盛大に遣つては悪いとの故障が起り、紛紜を醸したことは、世人の記憶に今猶ほ新な所である。そして近くは今春櫻田烈士の五十年祭が、極めて盛大に擧行された事も、最も吾々の耳目に新な所である。井伊大老に加へられた諸の毀譽貶褒、櫻田御門の水戸烈士に加へられた諸の毀譽褒貶、その孰れが是にして孰れが非なるかは、僕の今玆に批判を加へんと欲するものではない。さりながら、只之を權力關係の上から見ると、亦一個の趣味ある史實でないのではない。井伊大老の企てた開港事業、それに伴ふ日本の社會組織の變化、又その中に伏在して居る諸の權力關係なるものが、果して大老の考の如くに運んだ者とせば、大老は必ずや社會各方面の人々から、一齊に一個偉大な人格として尊崇されたに相違ない。去りながら、大老の爲した社會改革、權力關係の變化なるものが只一部に止まつて居たが爲に、之を賛するもの、之を貶するもの、互に相半ばしたといふ有樣を呈して居るのである。」

遠く羅馬の例に徴しやうか、彼のブルータスのシーザー暗殺の如き、一時羅馬人の熱誠な稱賛、嘆美を博したシーザーもブルータスの匕首一閃彼を吻ると、又掌を反すか如くに其批難の聲を浴びたのである。近く之を拿破翁に於て見やうか、彼が風雲を叱咤して、佛蘭西の健兒を率ゐ、歐洲の平原を彼の鐵蹄に蹂躙した時には、佛蘭西人の彼を渇仰讃嘆したことは果して如何であつたぞ、彼は約二百五十萬人の佛蘭西の壯丁を失ひ、幾億の佛蘭西の財帑を失つたのであるが、而かもそれにも拘らず、猶ほ且つ佛蘭西人は彼を渇仰嘆美の偶像としたてはないか。而かも一敗地に塗るに及ん

てば、忽ち冷眼に送り去つて過去の事は夢の如くに葬り了つたてはないか。シーザーの毀譽褒貶にせよ、那破翁の毀譽褒貶にせよ、要するに基く所權力關係にあるのである。意へらく、絶對の偉人、若し斯かるもの眞乎に世に有りとすれば、彼には客觀道德は無い、彼は唯々權力者である、彼は客觀道德を豫定するもので、それに服する者でない。只絶對ならぬ凡人のみ、權力關係の如何によつて、諸般の拘束に逢ひ、從つて一々の行爲を、或は善、或は惡と色々に評價されるのである。

五

吾人の此世に生を享くるや、唯一人て居ることは出來ぬ、必ずや一定の社會生活をせなければならぬ、一定の社會生活をするに於ては、今日の文明國では先づ國家の一員として生活せねばならぬ、家庭の一員として生活せねばならぬ、社會の一員として生活せねばならぬ、職業を持たねばならぬ、又其職業の如何によつては或る黨派に屬せねばならぬ事もある。此の如きは我々が必然に入込まざる可からざる社會生活の形式であつて、それ等の凡てが一定の權力を以て我々に臨んて居る。即ち我々は凡て此等の權力に服從して道德生活を遂げて行くのである。國家の一員としては忠良の臣民てなければならぬ。家庭の一員としては善良なる夫婦親子てなければならぬ。社會の一員としては正直にして寛容なる市民てあらねばならぬ。職業を有する人としては其職業に由來する慣習を守らねばならぬ。黨派の人としては其黨派の爲に黨規を守らねばならぬ。此の如きが吾々の道德生活の凡てである。故に吾々は、國家、家族、社會、職業組合、黨派等の權力を認めねばならぬのである。

尙ほ歐米の社會には、右の外に、宗教若くは教會なる一種の有力な權力がある。素より我國にも教會なるもののないてはない、して又其教會に屬する信徒は矢張り其教會に屬する教條を信せなければならぬのてあることは同じてある。併し我邦ては社會一般の人民が悉く其孰れかに是非とも屬せなければならぬといふの

狀態ではない、然るに歐米に於ては左樣でない、其內心の信仰の如何有るにせよ、彼等の殆んど凡ては何れかの敎會に屬して居る、屬して居ぬものは却つて僅少てある、そしてそれが歐米の社會には深い關係を有つて居る。國家、家族、社會、職業、黨派、敎會、此等が所謂吾人の道德的生活の權力的要素である。併しながら此等要素間相互の關係は、古往今來一定不變に決定つて居るものではない、彼等の間に、互に消長あり、優劣あり、榮枯がある。客觀道德是に於いて變じ、吾人の責務亦變化するのである。歐羅巴の文明史上に於ける、國家權力と、敎會權力との互の爭、乃至其消長の如きは實に顯著なる史實である。中世紀に在つては國家權力は萎微振はずして、殆んど凡ての權力の所有者は敎會であつた。此時に當つての道德生活なるものは、凡て敎會の權力に服從する。凡て敎會の命令に服從するといふ有樣、一國の帝王と雖も猶ほ且つ其掣肘を受けざるを得なかつたのである。然るに近世になつては、左しもに偉大な勢威を振つた敎會の權力も漸次衰微の運に向ひ、今では社會の權力の頂なる所有者は國家といふ有樣になつて居る。それ故今日では專ら國家の掣肘に甘んじ、其命令に服從し行くことが、彼等の道德的生活である。

權力は此の如 相推移し行く。そのまた推移せざる以前、若しくは既に推移せる後に於いては、ある行爲に對する判斷はさまでに懸隔はない。武門政治の時代に於いて武士の作法に外れたことを批難せられ、統一國家の時代に於いて、國民、市民たるの心得に違へば、また明に彈劾せられるのである。併し其推移する過渡期に生れたものは同一の行爲をなして舊權力の方から見られては惡とされ、新權力の方から見られては善とされるやうのことがある。お玉杓子の時は誰が見てもお玉杓子、蛙になつてからは、また誰が見ても蛙てあるが、足が出てゝそして尾がまた取れない時には、お玉杓子でもない、亦蛙でもない。夫のルーターの如きはそれてある。新敎徒よりは、基督の命ある福音の宣傳者として大に尊崇せられ、舊敎徒よりは、異端、

邪說を橫說する惡魔なりとまで非難された。權力の過渡期、推移期に立てる人の、時人から受ける毀譽褒貶は、大概斯樣のものである。一部の人は大に之を稱贊するが、他の一部の人は大に之を非難する。此を以てソークラテースは其門弟子には聖人と迄崇められたけれど、舊權力に固着した人々からは、雅典の國敎を害し、風俗を紊る處の賊子だとさへ罵られた。其他或は國家の制度を變更し、或は社會の改良を計り、以て權力の變遷を促した人物は、必ず毀譽褒貶相半はし居ること、古今東西比々として皆それである。勝海舟の江戶城明け渡しの如きは、史家の好んで論ずる所であるが、之を是とするもの、之を非とするもの、皆その見地の異なるによるのである。其是とするものは、權力關係が武士の階級から、統一國家に正に推移しつゝあることを隱約の間に看取し、能く新興の氣運に乘じて、機宜の措置をしたといふ點に於て、其聰明なる政治的技倆を賞贊するのであるし、その之を非とする者は、權力關係推移の大勢を知らず、一向ら舊權力に固着する人か、若しくは殊更に階級道德の見地から論せんとする人々であつて、所謂脊我慢で、一矢酬ゆべかりしにとて非難して居る。海舟の江戶城明け渡しは、恐らく永く史家の興味ある論爭の問題であらう。兎もあれ、權力は常に互に相爭鬪し、相推移するものである。此道理を悟つたならば、我々の爲す幾多の論爭は、所詮無意義のものであつて、只見地の上より來るもので、何時まで待つたとて、其間に眞理を發見することは出來ぬと信ずる。

「屋形樣に對し奉り、聊未來逆意あるべからず」「戰場に於いて聊か未練を爲すべからず」「武勇專ら嗜むべし」是れ信玄家法中に見えたるの法規で、以て戰國時代に於ける武士道德の代表的敎訓と見ることが出來る。武門政治の時代には、武士といふ階級の間には、その階級道德が甚だ盛んであつた。しかしながら彼等には統一的國家の觀念がない、又實際に於いて統一的國家なるものが、殆んど萎靡振はなかつたので、振つて居つたのは、諸侯であり、藩幕であつた。從て彼等

には統一的國家の客觀道德がない。「武家」といふ階級、「日本」といふ國家、その勢力の消長、盛衰の岐かるゝ所は、是れ舊日本と新日本との分かるゝ所以であつて、又舊道德と新道德の分別の起れる所以である。

夫れ斯の如く、社會上の權力は相互に進退、盛衰し、さうして、吾人を拘束する所の客觀道德なる者は、その權力關係に由來する者なる所以を悟らば、昨の是は必ずしも今日の是にあらず、今の非、亦必ずしも明日の非にあらざるの理、亦疑ふべきこととてはない。

六

先代萩の政岡が、「死ぬるが忠義といふことは、何時の世からの習はしぞ」と嘆き、「武士の胤に生れたは、果報か因果かいぢらしや」と悲んだ其中に、隱約の間に所謂武士の階級道德なるものゝ正に變化すべきものといふ事の豫言がある。武士とさへ生れずば、主人の爲めとて、ムザ〳〵毒菓子を喫べて、死なねばならぬといふ事もなかつたらうに、只武士と生れたばつかりに、此悲慘なる最後を遂げねばならぬのか、斯樣な事が果して人生のあるべき有樣であるであらうか。寧ろ武士たる階級を捨てゝ、只の素町人、土百姓で居たなら、斯樣な苦みもなかつたであらう、いや其方が寧ろ價値ある生活といふものであるかも知れぬ。政岡の心中には、早や武士といふ階級と素町人、土百姓のそれとの生活價値の比較が始まつて居る。兩者の比較が模糊隱微の間に生じて來て居る、言ひ換えれば、武士の階級權力、君主の權力なるものに對する服從心が、既に聊かの弛みを生じて來て居るのである。

先代萩の政岡の、忠誠無二の烈婦であることは疑ないが、而かも彼の嘆き悲む其中に、既に當時一般の階級道德、武士道德の推移を豫言して居る。若し階級道德なるものが、政岡の心の隅から隅まで、遺憾なく、全情を支配して居たならば、彼の樣に嘆き叫ぶ餘地の有る譯はない、否只全情を以て、我子千松の死を褒め稱ふべきである。ソークラテースが毒杯を仰ぎて死ぬる時に、果して些の悔恨、些の惧懼が有つたであらうか、冷靜淡如從容として死を見る眞に歸るが如きでは

なかつたか。全良心を以て一生懸命で、眞劍でする行爲には、悔恨がない、煩悶がない。大石良雄等四十七人の人々が、死を賜はつて刀を自分の腹に刺込だ當時の心事も、亦當に此の如きものがあつたてはなからうか。全情の支配する處、寸毫の空虚がない、何等の弛解がない、また何等の虚僞がない。

然らば其全情、若くは全良心の確信、若くは發働なるものは、何處から來るかといふに、それは其時代を支配する權力關係とピタリッと吻合して其間水も洩さず、少しも弛みもなければ、くつろぎもないといふ所から來るのである。ピタリッと吻合しない所に、無理がある、虚僞がある。無理が感ぜらるゝ、虚僞が感ぜらるゝ、その感は、やがて心に弛みを與へる、全情を以て行動することと出來ぬことになる。政岡は實に此の無理を感じ、虚僞を感じたのてある。義理と、人情との衝突茲に起るのてある、自然不自然の爭鬪茲に感ぜらるゝのてある、吾々の良心の起原の如何なるものかは、今此處に論及する暇もないが、兎に角良心の内容は、凡て社會に行はれ居る諸の羈絆から成るものであるとの事だけは、今茲に安全に斷言出來る事實である。吾々の良心の内容は、最早や封建時代に居つた所の我々の祖先の良心のそれてはない、又恐らく我々の良心の内容は、將來の社會に生活すべき我々の子孫の良心のそれでもあるまい、我々の良心の内容は、歐米人のそれとも違う、亞弗利加乃至南洋地方の野蠻民族のそれとも固より違う、良心の内容は時代により、場所に連れて、變化するものである。それは其時、其場所に流行する道德的規範が異なるからである。又それは其時其場所に現存し居る權力關係の異なるからである。若し吾々の良心にして、其全力を以て、其全信仰を以て、若くは其全情を以て、行ふことが出來ず、其處に何等かの可笑し味、缺陷、恥かし味、「思はく」、などといふものを感じ來つた時には、最早や其場合の良心なるものは、至醇なものてはなく、其處に僞が生じて居る、僞の在る所、其處、直に客觀道德の變化を豫言し得る。權力關係の推移、體約、變徴の間に察知し得べ

しとは、此の事のある爲めてある。

七

歐羅巴の諸國では、近世の初以來益々國家權の發達を來し、產業の隆盛を促して今日に及んだのであるが、それが今や再び權力關係が推移せんとしつゝある。此際に當つて新道德を絕叫するものゝあるのも、良に以なしとせぬ。僕の知る限りでは、晚近歐羅巴で新道德を絕叫したものに、二學派がある。一はニーチエの「貴人道德」で、他は社會主義者の「平民道德」である。ニーチエの貴人道德とは、個人に絕對の權威を認め、又優勝劣敗の進化の道理を遠慮なく露骨に表出せやうとする道德である。從つて慈善、博愛、憐愍などゝ稱して弱者を扶助することは、是れ明に優勝劣敗の進化の理法を妨げるもので、道德上の罪惡之より大なることはない、力量才幹あるものは、此等の弱者に頓着せず、否弱者を自分の爪先に掛けて之を蹂躙し、そして其上に自分を立てるこそ眞の道德といふべきものである、博愛、憐愍などいふが如きは、此れ羅馬の權力下に、征服された劣敗者なる猶太民族の泣言て、斯樣なものは道德でも何でもない、速に此等の思想を一變せなくては、眞の道德の進步も、社會の改善も望むことは出來ぬ。要するに「一切の價値の變造」をせなければ、眞の道德生活を仕遂ぐることは出來ぬと、これが貴人道德の趣意てある。

之に反して、平民道德を主張する社會主義者の說は斯うてある。今日は自由競爭の世だといふが、何處に自由があるか、所謂資本家なるものは一定の資本を有し、一定のハンデキャップを有して居る、之に對して、只勞働力のみあつて資本の無い勞働者は、到底彼等と眞の自由な競爭が出來ぬ。人はいふ今日は職業の選擇に自由があると、けれど何處に自由があるか、拔山蓋世の非凡の才力あるものでも、其才幹を運用し得る丈の十分の資本を持たぬ限りは、其職業に有り就けぬてはないか、今日は資本なるものを離れては、決して職業の選擇に自由などは有りはせぬ。又人はいふ、今日は富の分配に於て公平であると、けれども何處に公平

があるか、一定の賃銀の下に其勞働力を賣つて仕舞つたものは、其賣つて仕舞つた力の價を得るばかりて、即ち勞働者は只一定の賃銀といふものを受けるまてて、それより生ずる利益は凡て資本家に壟斷される、其壟斷された富は聽て又剩餘價値となつて再び資本となり、益々威力を加へて壟斷の勢は逞うされる、それ故利益の平分などゝは只口にのみある語て、實際に存在するものてない。此の如く以上の諸種の事情からして、富めるものは益々富み、貧しきものは益貧しく、一方ては飢寒を凌ぐべく麵包や着物は向つて叫びつゝあるに拘らず、他面ては非常な贅澤な眞似をして居るのてある。斯の如くして社會は今日ては所謂資本家の階級と、勞働者の階級との二つに分れ、さうして社會は此二階級の爭鬪に苦みつゝあるのてある。此狀勢を察するに、今日の所謂資本組織の社會は、將に漸次退讓すべきの運命を有して居る。我々は寧ろ來る可き社會を成るべく早く來らしめ、そして新しき社會を構成して、社會の各人をして、眞の平等、眞の自由、眞の競爭の味を味はしめねばならぬ。これが我等の平民道德を主張する所以てある、とこれが平民道德の主張の大體てある。しかし此の平民道德を唱道する社會主義者の間にも、その國家權力に關する見解に就いては二派の別がある。一は國家權力それ自身が漸次に衰退し行くものと見る派て、一は國家權力は飽くまて存續する者、又すべき者て、その國家權力によつて所謂一切の社會問題を解決すべきものと見る派てある。前者はマルクスに出た說て、自然無政府主義に陷り、後者はラッサルに發した見て、所謂國家社會主義なる名に於いて知られて居る。是は「平民道德」派の顯著なる二分派てある。

貴人道德か、將た平民道德か、來るべき歐米の社會は、抑も何れを要求するてあらうか。又今日の權力關係推移の事情は、その何れを要求しつゝあるのてあらうか。歐米ては今や此等の問題について多少硏究されつゝある。貴人道德、平民道德、一見し來れば是れ思想の兩極を形成するが如くにも見えるけれど、仔細に

兩者を點檢すると、其間自然に一定の脈絡貫通する處あるを看取することが出來る。併し其研究は立論の順序上、今少し後に述べる事としやう。

八

翻て我が國狀を觀んか、藤村操は「人生不可解」を叫んで、華嚴の瀑頭に水泡と消えてしまつた、或る人は之を薄志弱行の徒と罵り、或る人は之を時代精神の犧牲だとて同情する。罵るもの是か、同情するもの非か、それを今茲で判斷しやうとはせぬ。併し、兎に角社會の一部に之を賛するもの、之を褒するものがあるといふは、總て日本の社會の道德が推移しつゝある左券なりとだけは、安全に言ひ得ると信ずる。彼は所謂「嚴頭の感」なるものに於て、殆んど有らゆる權力を否定し、自己の立脚地に甚だ不安を感じて、終に其生活に堪へず、意を決して華嚴の瀑布に投じたのは事實である。マザリークの言ふた如くに、權力の無い生活は安定の無い生活である、中心の無い生活である、精神生活に於ても、吾人の諸情、諸智何れも皆平等の力を有して、少しも其間に他に優る權力、劣れる權力といふものが無い時には、凡ての動機が思ひ〳〵に競ひ起つて簒奪を試みやうとするものである、此に於て到底安靜なる精神生活を遂げ行くことは出來ぬのである。恰も國家生活に於て、若し確乎たる權力の存在なき時には、各人思ひ〳〵に紛起して、天下禍亂に苦むと同じ現象である。藤村氏の生活に慊らなかつた因は、蓋し此方に在つたのであらうか。して見れば藤村氏の心中にも既に我社會道德の推移があり、多少其抱持せる道德に異動の有つた事を看取するに難くない。

近くは酒匂常明氏が、自己の不明を羞ぢて一發のピストルの下に彼の最後を急いだ。此酒匂氏の死に對しても、世間の毀譽褒貶は一つてない。一部の人は氏の行爲を以て士人の典型となし、其措置の壯烈、其の心事の純潔、果斷を激賞したのである。然るに亦一部の人は、漫に死を以て、自己の責任を解除した卑怯の振舞だと謗つたのである。賛するもの、貶するもの、各見る所を異にし、立つ場所を異にして居るのである。

があるか、一定の賃銀の下に其勞働力を賣つて仕舞つたものは、其賣つて仕舞つた力の價を得るばかりで、即ち勞働者は只一定の賃銀といふものを受けるまでて、それより生ずる利益は凡て資本家に壟斷される、其壟斷された富は軈て又剩餘價値となつて再び資本となり、益々威力を加へて壟斷の勢は逞うされる、それ故利益の平分などゝは只口にのみある語で、實際に存在するものでない。此の如く以上の諸種の事情からして、富めるものは益々富み、貧しきものは益々貧しく、一方では飢寒を凌ぐべく麵包や着物に向つて叫びつゝあるに拘らず、他面では非常な贅澤な眞似をして居るのである。斯の如くして社會は今日では所謂資本家の階級と、勞働者の階級との二つに分れ、さうして社會は此二階級の爭鬪に苦みつゝあるのである。此狀勢を察するに、今日の所謂資本組織の社會は、將に漸次退讓すべきの運命を有して居る。我々は寧ろ來る可き社會を成るべく早く來らしめ、そして新しき社會を構成して、社會の各人をして、眞の平等、眞の自由、眞の競爭の味を味はしめねばならぬ。これが我等の平民道德を主張する所以である、とこれが平民道德の主張の大體である。しかし此の平民道德を唱道する社會主義者の間にも、その國家權力に關する見解に就いては二派の別がある。一は國家權力それ自身が漸次に衰退し行くものと見る派で、一は國家權力は飽くまで存續する者、又すべき者で、その國家權力によつて所謂一切の社會問題を解決すべきものと見る派である。前者はマルクスに出た說で、自然無政府主義に陷り、後者はラッサルに發した見で、所謂國家社會主義なる名に於いて知られて居る。是は「平民道德」派の顯著なる二分派である。

貴人道德か、將た平民道德か、來るべき歐米の社會は、抑も何れを要求するであらうか。又今日の權力關係推移の事情は、その何れを要求しつゝあるのであらうか。歐米では今や此等の問題について多少研究されつゝある。貴人道德、平民道德、一見し來れば是れ思想の兩極を形成するが如くにも見えるけれど、仔細に

兩者を點檢すると、其間自然に一定の脈絡貫通する處あるを看取することと出來る。併し其研究は立論の順序上、今少し後に述べる事としやう。

八

翻て我が國狀を觀んか、藤村操は「人生不可解」を叫んで、華嚴の瀑頭に水泡と消えてしまつた、或る人は之を薄志弱行の徒と罵り、或る人は之を時代精神の犧牲だとて同情する。罵るもの是か、同情するもの非か、それを今茲で判斷しやうとはせぬ。併し、兎に角社會の一部に之を賛するもの、之を褒するものがあるといふは、總て日本の社會の道德が推移しつゝある左劵なりとだけは、安全に言ひ得ると信ずる。彼は所謂「嚴頭の感」なるものに於て、殆んど有らゆる權力を否定し、自己の立脚地に甚だ不安を感じて、終に其生活に堪へず、意を決して華嚴の瀑布に投じたのは事實である。マザリークの言ふた如くに、權力の無い生活は安定の無い生活である、中心の無い生活である、精神生活に於ても、吾人の諸情、諸智何れも皆平等の力を有して、少しも其間に他に優る權力、劣れる權力といふものが無い時には、凡ての動機が思ひ〳〵に競ひ起つて簒奪を試みやうとするものである、此に於て到底安靜なる精神生活を遂げ行くことは出來ぬのである。恰も國家生活に於て、若し確乎たる權力の存在なき時には、各人思ひ〳〵に紛起して、天下禍亂に苦むと同じ現象である。藤村氏の生活に慊らなかつた因は、蓋し此方に在つたのであらうか。して見れば藤村氏の心中にも既に我社會道德の推移があり、多少其抱持せる道德に異動の有つた事を看取するに難くない。

近くは酒匂常明氏が、自己の不明を羞ぢて一發のピストルの下に彼の最後を急いだ。此酒匂氏の死に對しても、世間の毀譽褒貶は一つでない。一部の人は氏の行爲を以て士人の典型となし、其措置の壯烈、其の心事の純潔、果斷を激賞したのである。然るに亦一部の人は、漫に死を以て、自己の責任を解除した卑怯の振舞だと謗つたのである。賛するもの、貶するもの、各見る所を異にし、立つ場所を異にして居るのであるか

ら、彼等は如何程其舌を爛らし、其筆を禿しても、何處迄論じて見ても、恐らく其一致を見出すことは出來まい。されば立脚地の異なる兩種の判斷に向つて、一刀兩斷、一説は是て、他説は非てあるとの判斷も亦到底下すことは出來ぬ。けれども此一事を以ても、既に明かに我ソーシアル、トーン、即ち社會調子なるものが動搖しつゝあることの看取が出來る。

社會調子の動搖は、軈て又吾々の良心が全情を以て其内容を僞なく實行し得ないことを現はして居る。酒匂氏の遺書を讀むに、彼の汚穢なる紛紜の集積所たりし日本精糖會社中に居り乍ら、極めて純潔な擧動をして居た事は明白てある、彼の死を決したのは、只自己の不明の爲に、幾百幾千の株主に向つて、非常な迷惑を掛けたのを謝するに在る樣てある、而かも其死を決したのは、可なりの長時間、深思熟慮を重ねた結果なので、少しも其間に所謂取亂した形蹟は毫も見えぬのてある。されば酒匂氏自身の眞情に立入つたならば、恐らく氏は氏の全情を以て、何等の僞なく、其階級道德の爲に犧牲となつたらしく思はれる。けれども酒匂氏の擧動に對する世間の批評の贊否の聲著しく懸隔して居るのは、明に今日の日本の社會の調子が動搖して居るのを示して居る、さうしてその動搖は客觀道德その者の推移を示して居るものてある、客觀道德の推移は軈て又其社會の間に於ける權力關係の變動あるを示しつゝあるものてある。

試に問はう、今日我日本の社會に於て自己の良心内容を少しも僞なく、全情を以て實行し得るもの果して幾人あるかと。國家に關するもの、家庭に關するもの社會に關するもの、職業乃至階級に關するもの、凡ての方面に於いて、僞りなく良心を實行し得る者幾人あるかと。日露戰爭の時に當つて、女詩人大塚楠緒子氏は、「お百度」なる歌を歌つたことあるを記憶する、その意味は一足踏みて夫を思ひ、二足踏みて國を思ひ、三足再び夫を思ふ、女心に咎ありやと、斯ゝる意味の歌なりしやに記憶する。又殆んど同じ意味を、而かも同じく女詩人たる與謝野晶子氏が、弟の軍の門出を送

るとて歌つて、死なて再び歸りませといふやうの意を露骨に表出したのてある。夫の國家大難の時に當り、妻は夫を、親は子を共に勵まして、勇んて戰場に出て立たしむる時に當つて、而かも二人が二人乍ら揃つて女詩人たる彼等が斯樣な事を歌ふとは、實に驚くべき時世と見る可きてある。當時一部社會主義の人々が、公々然非戰論を主張した如きことはあつたけれども、其方は寧ろ處置し易い、何となれば彼等は議論を以て說服することが出來るからてある。けれども斯の如く公然には唱へずして、默々の中にのみ自己の僞なき感情を告白する此種の歌は、國家權力の側より見る時には、實に慄然として恐れざるを得ぬ次第てある。宜なり其當時に於て、此歌の風敎に關する價値に就いて論爭の多かつたこと。之を今私は論評するのてはない、併し此二女詩人の歌は、單に此二女詩人の胸に宿る糸に過ぎぬのてあるか。天下若干の人が以心傳心此歌に對して共鳴を感じたものはあるまいか。

又之を家庭に見るに、平生個體靈魂の存在を少しも信じ居らぬ人が、尙ほ此後幾年目かには、祖先の祭を營み、そして所謂「在天の靈に告ぐる」といふことをする。若し在天の靈なるものゝ實存するならば、必ず個體靈魂存在の信仰がなければならぬ筈てある、然るに此信仰はない、それて猶ほ此在天の靈を祭る、良心は屹度潛に蔭て默笑して居るに相違ない。甚しきは自分て自分の祖先の何年忌といふ事も知らず、只菩提寺の住職から、貴家ては今年何某居士、若くは大姉の何年忌だと敎へられる儘に、初めて祖先の祭をするものさへある。てもいざ祭の時となると、如何にも鹿爪らしく、極めて、眞面目に所謂在天の靈を祭るのてある。良心なるもの、如何にして之を默笑せずに居られやうぞ。又一夫一婦は人倫の大義なりなぞと稱して居ながら、一面に於て自分の血統を絕やすは先祖に對して相濟まぬとの口實の下に、或は蓄妾などの、擧に出るものもある。先祖の爲めとか、又は先祖に對して相濟まぬなどいふことは、果して良心の默笑を買はずにいへることか如何か。

之を社會方面に見んか、表面には社會の人は互に相助け、相頼つて、以て平和に安全なる生活を遂げ行かねばならぬと言ひ居りながら、他面に於ては生存競存上已むを得ぬとの口實の下に、嘘をいふ、友を賣る、人を欺く、有らゆる奸惡を爲して居る。されば社會の人々は互に相救濟せざる可からずなどいふことは、如何にしても良心の冷笑を背後に搖かずには居られない。此等は單に一例に外ならぬ。が斯く考察して見ると、吾々は吾々の日常生活に於て、果して至情を以て凡ての行爲をして居るかと顧るに、甚だ以て恥かしい次第である。僞の多いものだと自覺せざるを得ぬのである。此恥かしい、若くは僞あるとに、やがて不自然を意味し、無理を意味し、明に吾々の道德意識の不確固を證するものである。素より不完全なる社會の事である、不完全なる人間のことである、何時の世如何なる時とても、些の恥かしみ、些の僞のないなどゝいふ事は、少くとも吾等凡人にないことである。小恥、小僞は凡人の常として當然あらう。されば小恥、小僞あつても、それて直ちに客觀道德の推移、異動を意味するもの、表示する者であるとはいへぬが、併し大恥大僞は稀にあるものである、其大恥大僞のあるは、明に道德意識の變遷、異動の徵候と見るべきである。道德意識の變遷は、軈て社會調子の動搖を意味し、社會調子の動搖は、權力關係の中心點の動搖を示すものと見なければならぬ。

九

來る可くして遂に來らず。そは來らざるもの丶運である。來る可きあつて、而かも之を來さしめざるあらば、そは來さしめざるもの丶責任である。夏の日、今や一天掻き曇りて、白雨將に大に至らんとするの前には、肌心地何となく蒸暑く、非常に人心をして倦怠を生ぜしむるもので、身心共に甚だ快ならざるものである。社會の事亦然りて、凡て來る可き運命を、特更人力を以て阻礙するは、却つて人心を鬱屈せしめ、沈滯せしめ、萎靡せしめ、陰險ならしめ、姑息ならしむるものて、甚だ妙ならざるものである。世の先覺者、或

は經世家なるものは、當に來る可き運命を幾微、隱約の中に捉へて、其至る可き處に至らしむる處に、其先覺者たり、經世家たるの價値が存するのである。客月中旬、我が潜航水雷艇第六號は廣島沖で沈沒した、艇長佐久間大尉以下全艇員悉くその艇に殉したのである艇長佐久間大尉、彼は近來稀に見る所の偉人である。僕は近頃此の位の人を見ぬ。彼の軍神と稱せられた廣瀨中佐と共に、最近日本海軍に於ける雙璧と賛すべきてある。彼の佐久間艇長の遺書なる者は、言々句々、金玉の響あり、實に千古の大名文である。之を讀んで泣かざるものは、日本の國民でないと思ふ。大尉は死に至るまで、否々、刻一刻に、秒一秒に、彼は死に近づきつゝあるを知てるにも拘はらず、彼の心緒寸毫亂れず、端然自若、明確なる自覺を以て、彼の海軍々人たる最後の本務を果たしたのである。彼の胸中には、唯々彼の日本海軍々人たるの自覺あるのみ、海軍々人の本務の何たるかの自覺あるのみ、本務は最後まで盡くすべきものとの自覺あるのみ、他念なし。僕の大尉に敬服し、驚歎し、終に渇仰するまでに至つたもの、實に此の明確、熱烈なる自覺にあるのである。五千萬衆、僕と、感を同じうせざる者、恐らくあるまい。此の感のある所、我が國家權力の、世界の他の萬邦に比して、優越なる所であらう。既に述べたやうに、歐米などには、無政府黨なるものがあつて、國家權力の存立を願はぬが如きものがあるが、我が國家の中にはないのである。」或は極めて少數の、殆んど五千萬の人口より見ると齒牙に掛くるにも足らぬばかりの社會主義者の、其又一部分中には、或は國家權力の存在を希はぬものがあるやも知れぬが、それは殆んど勘定するに及ばぬ。我が國家權力既に牢乎である、動かず、動かすべからず。但だ國家權力を運用する人、漫りに之を運用して、個人の價値を認めず、個人の尊厳を敬せず、唯だ盲從を強ひ、屈服を求め、個人を以て、國家權力の唯だの機械となし、奴隷とすることは、甚だ感服の出來ぬのである。個人を自由解放して、その自由なる自覺の上に、全人格の自覺の上に國家權力を認めしめ

よ。彼の二女詩人の歌の意も、詮じ詰むれば、此の自覺せる國家權力の承認を求めたものではなからうか。歐米の社會主義者、若くは無政府黨の黨員にせよ、或は我國の極々少數の社會主義者にせよ、其國家の存立を願はぬといふ眞意を按ずるに、只彼のエンゲルスの所謂、權力を有するものをのみ片手落に庇護する所の國家に對して其存立を願はぬので、正義の上に立てられ居る國家の存立は、存外希ふて居るのではないか。只徒に國家の名に於て、實際國家の爲にならぬ諸の制度、諸の習慣等を、飽く迄維持し保存せんとするは、是れ當さに來るべき者を來らしめざるものである。」

次に家族制度の方面を考へ見るに、僕は一昨年の夏本誌に於て、「家族制度に對する疑問と題し、我國の家族制度は、將來果して幾干の間に存續すべきものかと顧み、僕の疑問を提出して置いたが、それに對して今日迄未だ明瞭なる答を得て居らぬ。それ故此家族制度の存續は、果して此儘て行くべきか、今も僕には當時と同じく疑問となつて居る。其際述べた所の要點を摘んで言へば斯うである。所謂家族制度と、所謂個人制度との差別は、何處に求むべきであるか、假に日本は家族制度である、歐米は個人制度であると定めて見ても、決して歐米の社會とて個人を基礎とはして居るのではない、矢張り日本と同じく家族を以て社會の單位として居るのである。然らば所謂家族制度と個人制度との差別は何處にあるかといふに、僕の考では、所謂家族制度なるものは、「家」なるものが一個の實在である。遠い歷史の初より、遠い歷史の終迄續くべき運命を有するものである。そして其時々の當主又は戶主は其「家」なるものゝエーヂエント、即ち代理者たるに過ぎない、番頭である。其「家」を祖先に受け繼いで、子孫に遺して行くものである、といふ考を以て家を處理し行くをいふもので、所謂個人制度といふものは、矢張り「家」は有るには有るけれど、その當主が軈て「家」其者の主人公である、當主があつて「家」がある、當主が無くば「家」は無い、即ち主人なるものが「家」なるものと同一の者となつて居る、といふ考で、其家を處理

して行くのを指すのである。所謂個人制度と、所謂家族制度なるものとの差は、只其思想上に在るので其他の點では左迄多く違うものではないと思ふ。兩者の區別を右樣に見て、扨て右の如き家族制度は、事實何れ程の價値あり、又今後何れ程の期間續くべきものか考へ、それに對して疑問を提出して置いたのである。これは僕一個の抱く疑問であるけれども、此疑問にして氷解されぬ限りは、僕に取つては家族制度なるものが、從來の意味に於て果して社會の一つの權力要素とし、道德の維持者たりといふことは疑問たるを免れぬ。又之を社會方面に見るに、今日已に鹽を專賣にし、煙草を專賣にし、鐵道を國有にして居る。今一歩進まば、土地國有といふことも必ずしも空論ならぬ時期が到來するも知れぬ。のみならず、國家は所得税を課して居る、而かも累進税をも用ひて居る、又國家は今日相續税をも課して居る、その他國家は、民法、商法を制定して、個人の私生涯の事件にも干與して居る。若し之が明治十二三年、若くは十四五年の頃の所謂「自由民權」の盛んな頃であつたなら、恐らく非常の反對を受けたてあらうかも知れぬ。而かも今日に於ては、其累進税の率とか、或は其徵收法とか、些末の手續等に就いては多少の非難もあらうけれど、其主義に就いて非難する者とては僕は知らぬ。考へて見れば國家が漫りに人の勤勞に對して課税し、人の勤勞の結果に對して課税するなどは、一方より見れば不當の極て、甚しきは奪略にも似て居るといひやうては謂はれるが、しかし**正義は決して抽象されたる唯の正義といふ樣なものはない**、凡て事實に即して、初めて有り得るものなのである。吾々の良心は、今日國家が累進的所得税を課し、相續税を課するを以て、不正なりとは認めはせぬ。

されど一歩進んで一切のカピタルを國有にするといふが如きことも、或は痴人の夢てない時期があるも知れぬ。即ち今日の所謂富者貧者を、共に同一の出發點から出發せしめて、彼等の足の強さを試驗するといふことも、必ずしも想像されぬことてはない。

吾々の道德上の理想は、所謂親和的共同團體の道德である。親和的共同團體とは、一團體內の各個人が凡て一個の自覺せる人格として認めらるゝ團體を指すのである。そして自覺せる人格とは、凡て各不可侵の尊嚴を有し、自己の僞なき良心、僞なき自覺を以て自由闊達の行動を爲し得る社會をいふのである。そして自分が不可侵の尊嚴を有し居ると同時に、他人も亦其不可侵の尊嚴を有し居るものとして、相互に敬愛し合ふ團體を指すのである。斯樣な團體に於て初めて自由の競爭が出來、又自由の發展も出來樣と思ふ。前にニーチエの「貴人道德」、社會主義者の「平民道德」の兩說を述べたが、彼等は前に言つた如く、一見すれば思想の兩極の如く見ゆるが、深く其由來を考へ、深く其意味を味つて見ると、彼等は殆んど同じ點に着眼して立論して居るのだ。

所謂社會主義者が社會主義を唱導するに至つた動機を考察して見ると、今日の資本制度の經濟社會に於ては、只資本家のみが利益を壟斷して、勞働者には何等の利益をも與へぬ、けれども勞働者も、カピタリストと同じく人間でなければならぬ。彼等は唯私有財產制度の行はるゝ世に、運命果敢なくして貧家に生れ、富者に壓迫されて居るのである。斯くして所謂奪略する階級の人間と、奪略さるゝ階級の人間とが生じたのだ、此奪略さるゝ階級の人間をば、奪略する階級の人間と同じ所に再び持ち來さなくては、何等社會の改良は行はれぬといふ。これが彼等の主張である。それ故彼等の執る所の方便は社會主義だけれど、期する所は矢張り社會道德の改善である。左ればこそ、此社會主義が、歐羅巴の世界に於て、從來個人主義なりとて、ひどく排斥された所のカントの倫理學と提携して居る所以である。所謂社會主義も、一皮剝いて見れば個人主義である。此點に於て、夫の「貴人道德」の思想を鼓吹したニーチエの思想と接觸し得るのである。

加之此「貴人道德」も「平民道德」も、共に等しく進化論上に立脚し居るものである。これが兩種の道德の互に一致して居る點である。凡て人間を赤裸々にして、

而かも同位置に立てゝ競爭をさせ、所謂貴人は貴人、小人は小人と分れさすことは、是れ社會主義者も認めて居る所である。されば「貴人道德」といふも「平民道德」といふも、只語の異なるのみにして、其意は相通じ居るものである。其意とは何ぞや、親和的共同團體の道德それである。

我々の論ずる所は人類の滅亡でもない、人類の繁榮でもない、只世の先覺者、經世家なるものが、依稀隱約の間に、來る可き權力關係の運命を察知し、來るべきは成るべく早く來らしめなければならぬとの事を言はうと欲するものである。ハレー彗星の如くに、來る前には非常な杞憂を抱いて居つても、併し實際に來て見ると存外無事平穩に通過するも知れぬ。只來らんとする運命を阻礙して、人心を欝結させることは宜くない、が來る可き運命が來ても、それが直に黄金世界といふ事ではない、又其社會が幾らか持續された後には、再び又新しい社會が來るであらう。我々人間の爲し得ることは唯それのみである。其行末が死滅に終るか、將た繁榮に進むか、それは我々の關する所ではない。（ハレー彗星の太陽面經過の後一日）

妥協政治論

池邊吉太郎

妥協といふ事は寧ろ國際上で大流行である。協約協約といつて澤山協約が出來るが、アイツは皆妥協の結果だらうと思ふ。中には世紀を亘つて爭つて〳〵爭ひ拔いて、どうにも斯うにも解決が付かなくなつた、さればといつて其爲めに國命を賭して其解決を求める程にもない、或時期には國命を賭せねばならぬ場合もあつ

たかも知れぬが、其れを經過すればそれ程にもない、さればといつて矢張り依然解決がつかぬといふやうな問題を幾個所も持つた國と國が、或一個所の利益を他國に讓つて、或一個所の利益を自國に取る、いはゞ利益の交換によつて妥協する。そして其結果其國と國とが仲が善くなつた、其爲めに世界の平和に對する脅迫物若くは障害物が除かれた。こういふ妥協はまァ結構な事といはねばならんだらう。特に平和を必要とする國にとつては有難い事に相違ないだらう。

これは近頃國際間で專らいはれて居る仲裁々判制度以外に、國際紛擾の一つの解決法であつて、妥協の出來る限り妥協するといふ流行は結構な事に相違ない。けれども此妥協の出來る範圍といふものは自ら限られて居る。其國の權威若くは名譽面目に關することは幾ら妥協せんとするも出來ないことは勿論である。又爭ふ方面が一部局である時は、どうあつても一部局丈けて妥協をせねばならぬ譯だが、一部局丈けて利益を交換するとことはなか〱六つかしい事て、從て妥協が容易ぢやないといふ事になる。要するに國際間の妥協は概して結構な事に相違ないが、これには制限があるといふ事を忘れてはいけない。

處て、政黨と政黨との妥協。コイツは外の國ではどんなものでありますか。假りに英吉利を見ても、豫算問題から引續いて上院の改革問題、これまで多少妥協するらしく電報にも見えて居るし、又政治家などの間にも妥協しやうとの考を持つた人もあつたかも知れない。然しどうも旨く行ける鹽梅でない。それで、ローズベリーの上院改革案が、保守黨の上院の領袖ランスダウンの贊成を得て之を可決し、また今のロイド、ジヨーヂ一派の改革案の出ない前に通過して、攻勢的防禦をした。自由黨即ち改革派は之を爭つて居るが妥協は六つかしからうと思ふ。

第一政黨の爭といふものは性質として妥協を容さぬものかも知れぬ。英吉利の政黨などを見ればさういふ感じを起させる。政黨の一番發達したものは、いふまでもなくアングロサクソンであるが、英吉利の政黨を

見ても亞米利加の政黨を見てもさういふ感じを起させる。一體政黨の目的といふものは一つよりない。一方が目的を達すれば、一方が反對に立つ。詰る所或政黨が政權を取つて自己の政見を行ふのが其目的で、妥協する餘地がない。妥協すれば聯立內閣を作るより外ないが、聯立內閣の弱いものなることは誰も充分分つてゐる。だから妥協して聯立內閣を作らうなどゝいふ考は英吉利人にはない。亞米利加人には猶更らないだらう。亞米利加で妥協をして大統領を一期置きに出すことにして、今度はレパブリカンから出す、此次はデモクラットから出すといふ事にでもしたらどんなものだらう。亞米利加人は到底承知しまい。又さうなれば先づ亞米利加の共和政治の末路かも知れない。妥協などいふ事は亞米利加の政治家の頭の片隅にもなからうと思ふ。

　處が日本では政黨の目的といふものはまだ一定して居ない。一定して居ても其一定した目的に到達し得る自信力を持たない。それは事情も形勢も自信力を持たさぬといふ理由もあらう。そこで政權を取らぬ代りに何か外のものを取る。或は又外の物質を取らぬにしても何か外の權利―黨派にとつて都合のよい利益になる或權利を持て來て貰ふ。さういふことで政黨が甘んずるといふ傾向がある。それで妥協が極めて成立ち易い。初めから主義政綱を掲げて選擧を爭つて、其主義政見を實地に行ふ、實地に行ふには政權を取らねばならぬといふ英吉利風の考は日本の政黨に極めて薄い。或は英吉利と日本とは歷史も違ひ憲法も違ふから、到底英吉利の如く行はれないといふ事もあらう。然し已に政黨が出來て居る以上は或點まで政黨の目的がある筈だ。然るに日本の政黨は今いふ通り、本目的の外にいろ〳〵な副目的を立て、其副目的を副業として得て、其を以て滿足せんとするのが比々として皆然りといふ勢を呈して居る。それから又政權を全て得なくても、半分でも三分の一でもよいといふ風がある。大隈伯も板垣伯もさうであつたし、藩閥政府でも政黨に半分與へて政府を取つた事もある。

それて私は妥協といふ事を必ずしも絶對的に非とする譯に行くまいと思ふ。只注目せなくてはならぬ事は其交換の品物の性質如何てある。行政權といふものは必らず統一しなくてはならぬに、これがバサ／＼に分れて了ふといふやうな事が時として交換の結果あらはるゝ事がある。時としては又府縣市町村などの自治體の監督權が滅茶／＼になるやうな結果があらはるゝこともある。或は又時としては選擧區の風儀が大變惡るくなる、選擧區のみならず中央から地方に亘つて總ての議會の風儀が滅茶／＼になる結果があらはるゝ事がある。與れたもの、取つたものゝ性質如何によつて妥協の善惡も極るので、今擧げたやうなものに對しては妥協といふものは許すことが出來ない。本來は和衷協同も亦妥協てあらう。妥協其ものは非難すべきものではないてせう。然し和衷協同は全く無條件の妥協てある。美しい妥協てある。若し有條件の妥協になれば、今日の如く許すことの出來ぬものが往々出て來る。

そこて日本の議院政治の上ての妥協は私は之までの事實によつて論ずれば十中の六七までは非難せねばならぬ事が多くはなかつたかと思ふ。さう思つたからまア非とした事が多かつた。殊に地方で選擧區が腐敗して、金が澤山かゝるから代議士を一度置きに出さうなどゝいふ事は困つたものだ。

要するに政治上に於て、政黨の眞劍勝負には妥協は困るものかも知れない。何も内政上て政黨が眞劍勝負をするといふ事は世の亂れるといふことを意味するものではない。所謂其爭や君子也てなくてはならぬ。又其性質のものてあるべきてある。けれどもなか／＼理想通りに行かんてあらう。徳川家康が關ヶ原の合戰て、味方につくものには何國を與ふるものなりといふお墨附をやつたのも妥協の一種に相違ない、妥協といふものは何時の世ても行はるゝものでせう。只無條件て――少くとも國家にとつて有害ならざる條件て――和衷協同的の妥協が出來るならば結構だらうと思ふ。

國勢調査の實施期

男爵　阪谷芳郎

歐米の種々の制度を段々に日本に移し入れ、更に日本人の智識によつてそれを改良發達せしめ、依つて以て今日の我帝國の基礎を固くしつゝあるのだが、其中唯一つ、猶ほ我國に移し入れぬものがある、それは他ては無い國勢調査て、原語てはセンサスと稱するものてある、

此國勢調査が、國家を建設して其發達を學術的に攻究し行く上に必要てあることは、啻に歐米の學者の夙に之を唱道したのみてなく、現に歐米ては滿年五若くは十年に、即ち千九百五年とか千九百十年とかいふ西暦紀元の五若くは十の附く年に於て之を實行して居る、大國たると小國たるとを問はず皆之を實行して居る、つまり此國家の形勢は毎年毎月注意すべきものてはあるが、之を五年若くは十年といふ期限を刻み、扨て國家の現狀を既往に照覈し研究するのは、國運の進歩しつゝありや將た退歩しつゝありやを知るに至つて便利てある、それ故歐米各國ては皆此國勢調査に極めて重きを置く、けれども此調査には非常な手數と少なからぬ費用とを要する、何故かといへば、我國て之を實施するとなると五千萬の人民一人々々に就き、一定の時期に於て身分、年齡から始めて種々の經濟上の事情、即ち其職業、不動産等のことを調査するのだから容易なことてはない。仲々の大事業てある、がそれにも拘らず國家の行政上所詮缺く可からざるものとして、猶且つ歐米諸國ては其實行を怠らぬ、のみならず國勢調査萬國會議なるものがあつて、各國相謀つて方法を一途にして萬國的に現勢を知得するの途を採つて居る。

日本ても歴史を按ずれば、王朝時代ても武家時代て

も人別調べなるものがあつたらしいけれど、不完全なもので到底今日言ふセンサスなどゝ比較すべきものではない、御維新後は戸籍局が内務省に置かれ、一先づ戸籍の事は整頓したけれども、それも今日いふセンサスとは大に意味を異にして居る、

センサスを日本人として眞先駈けて研究した人は、今日尚ほ老體を以て健在し居らるゝ法學博士杉亨二君である、此人は實に一個の學者として、又或時は政府の統計局の役人として終始一貫統計事業に身を委ねて居られる、此杉君の初めて志をそれに向けられたのは明治二年、即ち廢藩置縣の前であつて、是非共日本に此センサスを行はなければならぬといふ必要を、早くも當時に於て觀破されたが、動機は此事の論じてある和蘭の學者のシエッセリングの著書、それを一部得られて大に愛讀されてからである、此に於て氏は是非共センサスを日本に行ふべく、自分は之を以て敢て我國家に盡さんと深くも思ひ定め、斯くて終生の目的を玆に確立されたのである。杉君の英吉利、和蘭兩國の書に通じて我國に多大の貢献あること、又幼時非常の苦學をし、夜間は巷に出てゝ按摩をし、晝は机に伴つて勉强されたといふが如き、青年の好模範たられしことは特に擧げて言ふ迄もないこと、其明治の初年人才最も輩出したる時代に在つて、尚ほ高く一頭地を拔かれた非凡の學者として特に推稱すべき價値ある人と思ふ。

杉君は靜岡藩に仕へ、曾て其藩の爲に小規模ながらも駿州沼津に於てセンサスを試みられた事があるが之が我國に於て政治上に試みられた嚆矢である。それから明治四年七月愈よ廢藩置縣となると間もなく、氏は徵されて大政官に入られたが、當時大政官には政表課なるものが設けられた、之が後には改名されて統計院となり、鳥尾得庵居士が最初の院長となられたのであるが、此政表課に杉君は在任され、明治十二年十二月に、豫ての志あるセンサスを山梨縣甲斐の一ヶ國に實施された、甲州は誰も知る如き擂鉢狀の國で、從つて人口の出入極めて少い處である、センサスを試めすには最も誂ひ向きの處である、さればこそ氏は此甲州を好

標本として選定し、他日日本全體に於てセンサスを實施するの曉に之を基礎とせんものと思ひ定められたので、遂に官命によつて甲斐國人口調査なるものをし了せられた。

爾來センサスなる問題は、杉君並に杉君の指導し居らるゝ統計に關する學術會でも常に唱へられたのだけれど、四十三年の今日に至るまで此大事業を實行する氣運には際會せなかつた、統計學者には實に長年月間の問題となつて來て居たのだけれど、遂に實行を見るを得ずして今日まで來たのである。東京統計協會なるものがある、其起りは明治十四年頃であらう、最初の會長は渡邊洪基君であつた、私は此會に久しく會員となつて居り、渡邊君の會長時代から終始此センサス問題の會議にも與り多少注目して居た、其後數年前から花房子爵の後を受けて會長にもなり、斯くて現在にも及んで居る、一つは其關係からと、更に一つは、私は久しく大藏省に居つた經驗からて、統計の不完全を感じて來て居る、特に日清日露の兩役後に於ては歳費が嵩み、租税が殖え、國民の負擔は愈が上に增大して居る、此に於て貴族院でも衆議院でも、民力が如何なる事情の下にあるか、將來國運の發展すべきか、現下如何なる方向を取りつゝあるか、此等の問題が始終起つて居るけれども、如何せん國勢調査なるものがないものだから、互に甲是乙非を重ぬるばかりでつまりは水掛論である、其最後の鐵案を下すべき統計上の標準なるものが互に分つて居らぬそれ故、一方では斯う迄租税を增設しては民力の發展に害があるといひ、一方は又之に對して今日の民力では此位の負擔に堪へぬことはないといふけれども、唯互に左樣いふばかりで、之を論證すべき材料となると孰れにもない。私は此事情を親しく見て來て知つて居るので、之ではならぬ、如何ほど手數が掛るにせよ、又費用が掛るにせよ、國勢調査は是非實施せなくてはいけぬと考へて來た。手數や費用の掛ゝることは何處とても同じ事、隨分莫大のものではあるが、而かもそれを顧みず、歐米諸國に於て皆之を實施して居るのは、要するに亦皆私の過去

の經驗に於て認めたと同一の事情を認めたに起因するものと信ずる。

明治三十五年に統計協會の重なるものが集合して相談し、其結果を提げて更に當時開會中の衆議院の重なる議員にも相談を試みた、事は當時の新聞にも載つて居る、又當時有力なる新聞記者を招いて其要旨を語つた事もあつた、兎に角右樣の遊說が功を奏して衆議院から國勢調査實施の法律案を提出することに定まつた。當時の衆議院議員に廣島縣選出の內藤守三といふ人があつた、氏は統計學者の吳文聰、陸軍の統計主任の横山雅男などいふ人々と友人である所から、それ等の人々から氏に事情を陳述した所が氏も之に贊成し、政友會は元より更に其他の方面にも相談して吳れ、遂に內藤氏の名を以て右の議案が議會に提出される事となり、色々の議論の後に目出度衆、貴兩院共通過を見るに至り、愈よ明治三十五年法律第九十九條に於て規定された、それは三個條である。第一個條には十ケ年每に調査するといふ事があり、其他の條に於ては、明治卅八年即ち西暦千九百年に日本でも諸外國と連合して第一回の調査をし、それより五年目に、即ち明治四十三年、西暦の千九百五年に引續いて今一度調査をする、それから後は十ヶ年每にし樣といふ主義であつた。此案が其議會を通過したのであつた。然るに時運は惡く之を許さぬ、明治卅七八年には日露戰爭が起り特に期待して來た三十八年といへば最も戰爭半ばの時、國家多事の場合であるから左る大事業は迚も出來ぬ、いや假に出來たとした所で人口が大移動をして居るから駄目である、國勢調査は人口の最も沈靜して居る時にせなければならぬ、それ故三十八年には餘儀なく再び法律が出て三十八年の實施を延期し、追つて其期限は勅令を以て定めることゝなつた、折角三十八年と定まつたものが惜い事には斯る事情の下に又延期となつたのである、が其法律は依然として存在して居る。

そこで今日の問題は其實施すべき時期に就いてゞあるが、此次に五年若くは十年に當るのは、明治四十八

年である、即ち千九百十五年になる、此千九百十五年が一番近く我國に於て國勢調査を實施すべき時期である、それ故先頃から、即ち昨年の暮から今年の春にかけて統計協會では更に大議論を闘はし、兎に角其結果として明治四十八年に國勢調査を實施して貰ひたいとの建議を當局に向つて試みる事にした、恰も同時に、偶然にも、政府からも國勢調査準備委員會費なるものが僅ではあるけれど豫算に編入されて議會に提出された、そして四十三度年の費用として兩院を通過し御裁可になつて居る、されば近く國勢調査準備委員會なるものが出來樣と思ふし、其委員の任命も遠からぬ中に官報で發表にならうと思ふ、斯うなると最早や國勢調査の問題は進んで實際問題となつて居る。

　四十八年に於て實施するが是れ果して時機を得るものか、國勢調査には容易ならぬ手數と費用とを要する從つて國民の須臾も忽にすべからざる問題である、就中日頃政治、經濟を以て任ずる人々の最も細心に研究し考慮すべきことゝ思ふ。兎もあれ、此國勢調査なるものは如何に國家の經濟上に大切なものであるか、斯樣なものを今日まで因循して實施せなかつたのは甚だ殘念に思ふ。重ねてもいふ、歐米より凡て重要なるものを我國に採り入れながら、獨り之のみを採り殘して居るのは如何にも遺憾である、私は私立乍らも最も有力なる、最も長年月の歷史を有する、而して杉亨二博士の如き有名の統計學者を會員中に包含する學會の學長即ち東京統計協會の會長として、更に其法律の制定にも關係したものであるから、滿腔の熱誠を以て偏に來るべき四十八年に此實行を見るべき氣運を促したいものと思つて居る。(筆記校閲濟)

東西風俗習慣上の差異並びに其起原

醫學博士　二木謙三

近頃日本では段々西洋の文明を輸入すると共に、其事柄の日本に適するや否やを問はず、悉く之を模倣追從せんとするの傾向を持て居るが如く見える。然しながら何處らの點まで西洋の文明を日本に持て來て宜しいか、又何處らの點は日本に適せずとして之を斥くべきかといふ事については大いに研究を要すべきことゝ思ふ。我々は決して頑固なる保守的の民族たるを喜ばぬ、然れども又無鐵砲なる急進的の國民たるをも欲しない、取るにしても捨つるにしても、研究の上に基した所の確固たる一定の方針を以てせんことを主張するものである。

抑々東洋と西洋とは其起原に於て風俗習慣上の差異を來たして居る。即ち日本を初め東洋に於ける多くの國は稼穡の民であつて農を以て國を成して居る。歐洲は之に反して遊牧の民であつて、羊を飼て之を生業として居た。農をなすものは早く土着的の習慣を得、遊牧のものは初めより水草を逐うて轉居的の習慣を得て居る。農夫が初め不毛の地を耕するに、一年目は勞多くして益少く、二年三年と勞は減じて收獲は多くなる。それが爲め人は同じ地に居住して、同じ仕事を繰り返すことによつて多くの利益を見出す。從て親と子と親族一同相團欒して一地方に耕すといふ事が便利になる。之に反して遊牧の習慣に於ては一つの羊の群を以て一つの谷に住む、草盡きれば他の谷に移らざるを得ぬ。即ち土着的の習慣は其職業に適しない。又親と子と同じ谷に住むといふ事は早く其谷の草を荒らすといふ事になる。て、親は東、子は西と別れる方が便利である。之が抑々東西風俗習慣上の差異を來たしたる根

本的の理由であらうと思ふ。

例へば衣食住の如きものも、夫れ〳〵其資料並びに用方の差異を見出す。衣類は日本は植物性で、綿花或は麻等の纎維を用ひ、西洋に於ては動物性で、毛皮或は羅紗等を用ひて居る。着物の形に於ても日本では家居に適する所の袖と裾の寛やかなものを用ひ、西洋は之に反して山野を跋渉し、多くの勞働をなすに適する所の筒袖、ズボン等を用ひて居る。食物に於ても日本は五穀、野菜、魚類等を用ひ、西洋に於ては獸肉牛乳等を用ひて居る。住居に於ても日本は家族的生活に適する所の構造になつて居て、襖、障子等容易く一室と他室との交通を許すやうになつて居る。然るに西洋に於ては室は悉く壁を以て隔てられ、其各室の出口は皆廊下に開いて居る。即ち分離的生活の形を示して居る。彼の西洋の寢室の制、これは今は屋根なしの寢臺を使つて居るが、之を古き博物館等に於て觀る時は、昔の寢臺は皆一つ〳〵屋根を以て蔽はれて居る。之を露地に置くも以て風雨を防ぐに足る作り方である。即ち遊牧の時代に於て初めは羊と群をなして眠つた。後には雨露を防ぐべく適當なる寢臺が出來て轉居の際には簡單に取外して之を運び、又他處に移て組立てゝ用ひた者である。それが今日になつても寢臺に休むことの習慣をなしたのである。日本の家屋は西洋の寢臺の大なるものである。それであるから西洋人は靴の儘廊下を上り室に入り、只寢臺に上る時のみ靴を脫ぐ、我國に於ては家に上る時に已に靴を脫ぐ等の習慣に於ても亦注意すべき所がある。又西洋の大いなる家屋の廊下或は階子段等は殆んど一般の交通道路と相類似して居る。又多くの家族は一つの建物の中の各の室に別々に住んで居る等の有樣が、家族的よりも個人的生活に近きことを示して居る。

父子兄弟の有樣に於ても東洋は家族同居して一つの職業に勤めて居る。其れであるから親と子と相爭はざらんが爲めに孝悌の敎が開けた。西洋では殆んど孝悌の必要を認めない。生れて乳を飮む間は親が之を養ふ、それでさへ、もう母の乳を用ひずして動物の乳で養ふ

習慣がある。已に長じて丁年に達すれば親と子は分業且つ別居する傾向も此遊牧の自然の狀態より成り來つたものである。兄弟も獨りは西、獨りは東に別れて、別るゝことは格別の苦痛と感じない習慣を持て居る。然ながら西洋に於ても今日は遊牧の仕事を罷めて國を形造つたこと已に久しいから、漸次に家族的習慣は養はれて來、殊に英國などに於ては著しく發達して、父子兄弟の情誼等に於て大いに日本を感心して居るといふ向きもある。

又夫婦の狀態に於ても日本に於ては早く群居の制が成立つた爲めに、例へば權兵衞の息子と八兵衞の娘とは似合つた夫婦であるといふ事を父老が早く已に知つて居る。それであるからして若い者の合議を求むる必要なく之を許嫁せしめた。そして女は一度嫁すれば決して離婚といふ事は許さなかつた。一度離婚すれば其不快なる感情は本人の間のみならず永く兩族間の不和をも見るやうになる。さりとて他の村に轉居することも出來ず、詰り離婚の苦痛は死の苦痛と同樣であつた。

然るに西洋に於ては、妙齡の男女一つの谷に逢合する。互に婚嫁を許さんと欲しても其素性を知ることが出來ぬ、爲めに男女交際といふことが行はれて、長い間互の性質を見合つてそれから決心をする。其爲めに踊等(ダンス)の風俗も出來たのである。それから親が世話をするのでないからして自分共が注意して選ばないと一生の不幸を見る。夫れ故に所謂自由結婚の制度が成り立つたのである。從て時としては離婚は日本に比すれば容易い狀態にあつた。何となれば離婚の後は獨りは東、獨りは西と別るゝが爲めに一生中再び會合する等の不快が無かつた爲めである。然しながら西洋に於ても今日にては上流社會になると、殊に華族或は貴族等になると、矢張り自由結婚は許さない。兩族間の長老者が協議をして婚嫁を許すことと日本の今日の風俗と少しも異なつた事がない。之は家族的生活の漸次に西洋にも發達して來た證據である。又上流の間には男女交際等は下流の歐洲人に見るが如き雜駁的なものではない。日本に於ても今日は昔の村落生活とは事が違つて來た。東京

に於ては九州の人も東北の人も一所に混住して居る。是に於てか父老は悉く或娘や息子の性質を知つて居るとは限らない。然しながら媒酌人なるものがあつて双方の血統、財產、身分等を斟酌して之が媒介をするといふよき習慣が行はれて居る。男女の分業に於ても日本は早く家居の制が行はれた爲めに、男は外で働き、女は內の仕事をするやうになつた。西洋に於ては昔は其必要がなかつた。男も女も共に同じ牧畜の仕事をして放浪して步く丈けだ。家もなければ拭き掃除する世話もない。今日になつても男女同權だの、或は女子高等敎育だのといふ一種奇妙なる所の傾向を有して居るのである。我邦に於ては男女は分業の差である。男は頭腦を使ひ、女は生殖をする。男は外で手足を動かし、女は內で手足を動かす丈けの事である。寔に天然の美風であると謂はねばならぬ。

公德と私德との問題も、日本は家族、村落、一縣一國と、總て皆家族の大きくなつたものである。親に事ひ君に從ふ、といふ此私德が存在しなかつたならば日本の國の成立は見ることを得ぬ。之に反して西洋に於ては個人生活が主もてあるが、然し一つの谷に數人落合ふた時には、お互に他の迷惑にならぬやうにせぬと爭が起る。そこで公德の必要を感じて來た。時間を格守する等の事も、日本では相會する所のものは共に一村內に住んでゐた。何時でも呼べば應ふる所の近さに住み、殆んど時間の約束の必要もなかつた。處が西洋に於ては獨りの人と他の人とは山を隔てゝ異れる谷に住む。各々相會する每に場所と時間を正確に極めざる時は相談が出來ない。此等の點は今日の日本では矢張り彼の長所を取る方がよからうと思ふ。

學問發達の方面に於ても日本は內部に向て進んだ。即ち忠孝といふが如き精神的の進步をなし、西洋に於ては如何にして此山を開鑿すべきか、如何にして此川に架橋すべきか等の交通的物質的の方面に進んだ。蒸氣機關が早く發明せられるといふ如き方面に進んだ。之は兩者に於て各々特色あることであるから、今日は日本は西洋に學び、西洋は日本に學ぶといふ趣がある。

然しながら日本が若し我を捨てゝ他を學ぶといふならば愚の極といはねばならぬ。我を守て他を取るべきである。教育並びに宗教との關係に於ても全く之と異ならぬ。

職業に於ても日本は一村落悉く農業であつた。それであるから人の姓名に於て職業を姓とするもの少くして、其住む所の場所を以て姓とするものが多い。例へば大山といひ東郷といひ大木といひ小川といふ。總て土地或は其土地に特色となつて居る山川木石等に因んて取つて居る。處が西洋に於ては各々特異の職業を以て相合し相散じて居た。從て人の名前は職業から來て居る。例へばフイッシャーといへば漁人といふ意味でグルーバーといへば穴堀りといふ意味即ち石炭坑夫のことである。コッホといへば料理人のことでプフナーといへば本屋といふ事である。皆職業について人より呼び下されたるものが名となつて居る。從て西洋では職業が神聖であつて其他上下貴賤の差なしといふ平民的平等的觀念が發達した。日本に於ては多勢一所に早く集つた爲めに、各村では村長がある、又大きな所の群集には更に大きな所の酋長があつた。之を大綜括する所の大いなる族長が一國に君臨せられた。總てのものは其命令に服從して生命を賭して之に事へんとした。此等の長所短所は夫れ〳〵東西によつて自然的根本的差異があるのである。是に於てか西洋の文明を輸入するといふ事に於ても、よく我を知り彼を知るといふ點に基礎を置いて、己れを守て且つ他の長を加ふるといふ方面に進まなければならぬことゝ信ずる。(完)

ラケットの人

黑頭巾



其一

◉花の盛は風多し。青葉若葉の時節、綠蔭以て取圍まれたる好コートを占領し得て、快心の友と共に一日を暮らさんことは、則ち吾輩一年の樂事とするところならずんばあらず。

◉若し、夫れ這般の妙境に立たん乎、地に涵す樹影は水中の藻の如く、打ち揮ふラケットの音に生々の響あり。

◉吾輩は回想し、遙想して此に至る毎に、則ち白芽を憶ひ、玉堂を憶ひ、オロラ平を憶ひ、秋醉吉水を憶ふ。

◉是等の諸人は、皆、吾輩に、テニスを敎へたる親友にして、ラケットに依て、以て握手の情を深くしたる者也。

◉ラケットの情味洋々として盡くること無し。吾輩四

十に近くして此の清福を得ぬ。必ずしも其の晩れを恨みず、竊かに天幸の猶ほ吾身に屬するものあるを感謝す。

其二

●吾輩、生來極めて無器用にして、謠も出來ず、歌も出來ず、碁も將棊も上手にはならず。禪にも入る氣無し。一枝の管城も既に其の重さに堪えず、僅かにラケットを揮つて靑年者に伍し、以て天地生々の氣を飽くまで管領せんとは爲るなり。

●テニスは野外の技也。自然の光に浴すること尤も心地善し。勝負を觀るだにも面白し。况して、自ら之を試むるに於て、吾輩等下手なれども、下手相應の樂、筆舌に盡す可らず。

●何等の藝術も、皆獨特の趣味あり。然りと雖も、老少打交ること(一)勝負の理合の複雜なること(二)自然に親み、淸新の空氣を呼吸すること(三)手輕に出來て危險の患無き事、(四)而して戰鬪的なる事(五)等の諸條件を滿足するものは、テニスの外、容易に求む可らざる也。

●江湖の紳士、須らく其のホワイシャツを脫して腕を現はし、靴下を脫して足袋を穿ち、ラケットを揮つてコートに立つこと一日、一時間せよ。

●炎暑に滴る、玉の汗は、處世の勞を一洗して、而して「靑年學生の意氣」沸々として胸襟に漲るべし。

●吾輩の無器用にして、猶ほ斯道に入る。敢て、世の才人に、此の赤裸々の運動術を推薦せずんばあらざる也。

其三

●白茅は斷脚記の著者也。彼の人格文章、一卷の書に發揮せらる。

●彼は、隼人の新人物也。彼は、つねに雄健豪宕の四字を口にす。其人、稍瘠せて風骨爽やかに、コートに奔馳せし態度の如何にも健やかなりしよ。

●吾輩嘗て、觀瀾博士と共に暑中の十日間を吉野河畔に送りしとき、白茅大阪より來り訪ひ、毎日午後相携へて、中學の校庭にマッチを試みしこと、今に至つて記憶に新た也。

●中學の和田、小林兩君も亦た好伴侶たり。小林君は畫の敎師也。吾輩がラケットを揮りかざしたる寫生圖を送り來る。色黑の丈夫そうに見ゆるに、手拭の元祿豆絞なるも何やらゆかしき。

●仰げば金剛山の翠光、縹緲として顏を照らす。日暮、手拭を首に卷き、ラケットを携へて三々五々・旅館に

歸り來れば、吉野川の急灘、水風を送つて潺々として耳を洗ふ。

●當時のラケット伴侶は如上兩君の外、學生に柿内、小松兄弟三君あり。葛城生、葛城山の禪堂を下つて來訪ね、日々、コートに來つて、哲學を考へつゝ、吾等の爲に球を拾ふ。

●一日、早くテニスを畢つて、有志諸君の招に依り、吉野川に舟遊を試む。舟子水中に飛込み、鮎を手擱みにし來たれば、鱗光潑溂、金剛山色に映ず。

●榮山寺を尋ねて曽公櫻、道風書の古鐘を觀、スタンプを求め、月と共に歸舟に上る。一里半の間、巖瀬を下るに、波は月を碎きて、閃々として、一波々々悉く月あり。左手に金剛山夢の如く淡し。急灘一過、小舟欲盪、飛沫頭を越え、凉々として、水晶簾を散らすが如く、岸上、老樹コンモリとして大月斜に懸り、油繪の名手を以て畫ける夢幻劇を見る心地せり。

●一夜、旅窓前庭、月高く、蟲聲繁し。歌聲清晥、水畔より來る。時を經て聲益澄む。白茅と葛城と凉臺に出で、數曲の唱歌相應じて唱ふ。滿樓の美人悉く來り和し、謹厚、觀瀾博士の如きも遂に其の群に投ず。

●金剛山下の提携を第一着とし、吾輩白茅と相伴ふて、京阪のコートに馳驅すること數々也。彼、斷脚記の著者となり、舊夢尋ぬるに由無からんとす。吾輩思ふて此に到る毎に、愴然として悲し。

●其後、吾輩また五條に至り舊盟を尋ぬ。辱知の諸友、吳洋、石上君を始とし、爲めにテニス會を開きて、半日の淸會を爲す。

●山色水光昔ながらにして、再び當時の旅室に宿するに、窓前の萩うね〱として、早や露を浮べ、依々情趣、神魂を動かす。

●吾輩、今此記を草するに、當時、吉野川原に採り來れる一塊石を以て文鎭とし、其の極めて清潔にして波の渦巻く如き紋理に對して、金剛山下に映ぜしラケットの影を思ひ浮べつゝあり。

其四

●大路良平は、帝大テニスの、父たるのみならず、能く多數の秀才を養成したるは、蓋しテニス史に特筆せらるべき一人なるべし。

●早の関澤、三神、伊藤、井上、慶の和田、の如き、商の波多野、渡邊の如き、一流の名手を以て目すべきもの、彼の提撕を受けたること多し。

●唯だ師の一派、則ちオルラ平と些の因緣あること無

し。茗溪一門は、飯河を仰いで祖師とす。

●帝大の系統、オルラ平の流を汲まざるものあること無し。就中、彼の前衞、福永、コートを壓する豪壯の態度、其のスマッシングの崇嚴なる、一時斯界の視聽を集む。彼が門下の一傑物也。

●彼の球は强くして、フォーアを得意とす。其の伎は、第一流者といふと雖も、稽古場の大關にして、マッチ馴れせず。唯だ其の斯界に元勳たるの功勞を積める今日猶アレ程の强球を發するを多とせざる可らず。

●帝大の一門、伎粗豪にして、氣ばかり强く、粘り氣尤も少く、勝味に進むと雖も脆し。實戰に臨むで竹刀を揮ふの氣持あり。恐らくは亂打より來れる弊ならん。

●オロラ平の多趣味なる、思慮周密なる、又た斯界稀覯の好統率者ならずんばあらず。

其五

●秋醉、吉水、共に靑葉城下より出身す。吾輩、其の伎に與みせず、其人に與みす。

●此二人者は、テニスマンとして餘りに文學の趣味勝ち、想像ばかりしてラケット輕し。若し批評家とせば、必らず趣味ある報告を發表するならん。

●吉水は新夫人とラケットとを携へて、足尾に去り、オロラ平と秋醉とは病牀に仆り。ハリー彗星出現の今日このごろ、吾黨四人良夜を共にして健康の祝杯を擧ぐるを得ず。靑葉の露、ひそかに吾がラケットを濕ほすらん。

其六

●憶起す。一昨春、吾黨相率ゐて、京都に入り、オロラ平と上加茂に參拜し、大出と師範のコートに逢ひ、轉じて奈良に遊び、古都森光閑寂としてテニスの甚だ振はざるを嘆ず。

●オロラ平は上鴨に到りて得たる二葉葵と奈良にて得たる神鹿の玩具とを、ラケットに釣り、東海道五十三次をば、一條鐵路、夢中にも翼々として護りて東京に歸りたり。

●吾輩はオロラ平を送つて、秋醉と共に、大阪にて一快遊を試み、ラケットに溌る汗の尙ほ冷やかならざるに突如として白茅の遭難を聞き、病院に到り、彼の牀邊に一夜を明かす。翌朝、秋醉も亦た白茅を見舞ひ來る。此の兩人は、ラケットに因て繋がれたる未見の友也。

其七

●此行、兩京大學のマッチを見、東山の紅綠の緩やかに動く心地しつ。三高と六高との對抗は、三高の野次の殺伐を極むるに愛憎をつかしたり。

●三高の彌次は、高に登りて銅鑼を叩き、罵聲を放ち、喧囂の雜響を送つて、大將勝田の奮鬪を援けたり。

●岡山の選手は、怖るべき雜響に、度膽を拔かれたるやに見ゆ、先鋒の後衛有本が、機に臨み變に應じ、一緩一急、高低悉く節調に合して、勝ち誇つたる勝田をして顏色無からしめたるは、當日の白眉を推すべき也。

●有本は野球の投手にして、兼ねてラケットを揮ふ。吾輩の見たるところを以てすれば、關西第一流たりしや疑無し。惜む可し、彼、間も無く早折せり。

●京都を發するの夜、雨蕭々、藕村送り來る。早の針重、飯田。七條に會し、吉水大津より來り、共に京都觀戰の評論に氣燄を吐きて東歸す。箱根山を踰ゑ來れば、戊申の大雪、海道を沒して、電線の田間に倒るゝを見る。

其八

●飯河以前のテニスは飯河に統一し、飯河以後のテニスは氏家に大成す。飯河以前のテニスは、吾輩不幸にして之を見ず、知らず。

●『飯河一流の撫斬り』の一語は、久しく斯界を戰慄せしめき。飯河は浮田を前衛とし、唯だ一組を以て、敵の全軍に當るの意氣を有し、且つ屡之を事實に現はしたり。

●彼が、早稻田に孤軍以て大奮戰を試むるや、流石の早軍將棊倒しに斃る。然れども、鋒を交ふるの初め、早軍必らず一回を勝つ。勢援隊以謂らく、此組こそ勝つならん。如此にして、いづれの組も、先づゲーム一點を占め得て、却て見事に屠り去らる。

●垂鎭關澤出てゝ先づ一點を占む。自から謂ふ、吾こそ仕留むべし。既にして續けざまに三敗し、凱歌師軍に揚る。蓋し、飯河は、其の第一回ゲームを犧牲にして敵手を研究したる也。

●飯河が最後の紀念戰は、大塚臺に於ける「三田軍撫て斬り」也。而して最後に彼に向ひたるは、慶の中堅中野也。

●中野をして尙ほ慶に在らしめば、三田の鼎は重かるべき也。前衛有岡が浮田の背後に打込みて、早やキマりたりと思ひきや、飯河が追付きて打つたるバックの快球は、正に、敵の前後衛の間を流星の如くに縫ふて、

し。若溪一門は、飯河を仰いて祖師とす。

●帝大の系統、オルラ平の流を汲まざるものあること無し。就中、彼の前衛、福永、コートを壓する豪壯の態度、其のスマッシングの崇嚴なる、一時斯界の視聽を集む。彼が門下の一傑物也。

●彼の球は強くして、フォーアを得意とす。其の伎は、第一流者といふと雖も、稽古場の大關にして、マッチ馴れせず。唯だ其の斯界に元勳たるの功勞を積める今日猶アレ程の強球を發するを多とせざる可らず。

●帝大の一門、伎粗豪にして、氣ばかり強く、粘り氣尤も少く、勝味に進むと雖も脆し。實戰に臨むで竹刀を揮ふの氣持あり。恐らくは亂打より來れる弊ならん。

●オロラ平の多趣味なる、思慮周密なる、又た斯界稀覯の好統率者ならずんばあらず。

其五

●秋醉、吉水、共に青葉城下より出身す。吾輩、其の伎に與みせず、其人に與みす。

●此二人者は、テニスマンとして餘りに文學の趣味勝ち、想像ばかりしてラケット重し。若し批評家とせば、必らず趣味ある報告を發表するならん。

●吉水は新夫人とラケットとを携へて、足尾に去り、オロラ平と秋醉とは病牀に在り。ハリー彗星出現の今日このごろ、吾黨四人良夜を共にして健康の祝杯を擧ぐるを得ず。青葉の露、ひそかに吾がラケットを濕ほすらん。

其六

●憶起す。一昨春、吾黨相率ゐて、京都に入り、オロラ平と上加茂に參拜し、大出と師範のコートに逢ひ、轉じて奈良に遊び、古都春光閑寂としてテニスの甚だ振はざるを嘆ず。

●オロラ平は上鴨に到りて得たる二葉葵と奈良にて得たる神鹿の玩具とを、ラケットに釣り、東海道五十三次をば、一條鐵路、夢中にも翼々として護りて東京に歸りたり。

●吾輩はオロラ平を送つて、秋醉と共に、大阪にて一快遊を試み、ラケットに殘る汗の尙ほ冷やかならざるに突如として白茅の遭難を聞き、病院に到り、彼の牀邊に一夜を明かす。翌朝、秋醉も亦た白茅を見舞ひ來る。此の兩人は、ラケットに因て繫がれたる未見の友也。

其七

●此行、兩京大學のマッチを見、東山の紅綠の緩やかに動く心地しつ。三高と六高との對抗は、三高の野次の殺伐を極むるに愛憎をつかしたり。
●三高の彌次は、高に登りて銅鑼を叩き、罵聲を放ち、喧囂の雜響を送つて、大將勝田の奮鬪を援けたり。
●岡山の選手は、怖るべき雜響に、度膽を拔かれたるやに見ゆ、先鋒の後衛有本が、機に臨み變に應じ、一緩一急、高低悉く節調に合して、勝ち誇つたる勝田をして顏色無からしめたるは、當日の白眉を推すべき也。
●有本は野球の投手にして、兼ねてラケットを揮ふ。吾輩の見たるところを以てすれば、關西第一流たりしや疑無し。惜む可し、彼、間も無く早折せり。
●京都を發するの夜、雨蕭々、鶴村送り來る。早の針重、飯田。七條に會し、吉水大津より來り、共に京都觀戰の評論に氣焔を吐きて東歸す。箱根山を踰ゑ來れば、戊申の大雪、海道を沒して、電線の田間に倒るゝを見る。

其八

●飯河以前のテニスは飯河に統一し、飯河以後のテニスは氏家に大成す。飯河以前のテニスは、吾輩不幸にして之を見ず、知らず。
●「飯河一流の撫斬り」の一語は、久しく斯界を戰慄せしめき。飯河は浮田を前衛とし、唯だ一組を以て、敵の全軍に當るの意氣を有し、且つ屢之を事實に現はしたり。
●彼が、早稻田に孤軍以て大奮戰を試むるや、流石の早軍將棊倒しに斃る。然れども、鋒を交ふるの初め、早軍必らず一回を勝つ。勢援隊以謂らく、此組こそ勝つならん。如此にして、いづれの組も、先づゲーム一點を占め得て、却て見事に屠り去らる。
●重鎭關澤出でゝ先づ一點を占む。自から謂ふ、吾こそ仕留むべし。既にして續けざまに三敗し、凱歌師軍に揚る。蓋し、飯河は、其の第一回ゲームを犧牲にして敵手を研究したる也。
●飯河が最後の紀念戰は、大塚臺に於ける「三田軍撫で斬り」也。而して最後に彼に向ひたるは、慶の中堅中野也。
●中野をして倘ほ慶に在らしめば、三田の鼎は重かるべき也。前衛有岡が浮田の背後に打込みて、早やキマりたりと思ひきや、飯河が追付きて打つたるバックの快球は、正に、敵の前後衛の間を流星の如くに縫ふて、

ゲームセットを宣せらる。

●飯河は、此の光輝ある記念球を最後として、斯界を勇退せり。彼、今支那に在りて教育に從事すと聞く。

●彼は後衛として前後に冠絶す。然れども前衛としても亦た第一流たるを失はず。

●彼の球は强からずと雖も自由也。彼の長所は、敵の缺陷を衝くにあり、故に强球を必要とせず。

●畢竟、其の價値は、頭腦の明晰なると、大膽不敵の勇氣とに存せずんばあらず。聞說、彼はゲーム、ニオールとなれば、決勝は已にありと確信せりと。其の人、以て想見するに餘あり。

●飯河が、丈高く、鬚髮蓬々として、それに白木綿の兵兒帶を幅廣に結び、ラケットを搆へて敵手を見渡すときは、如何にも山賊の統領にてもあるべく見ゆ。

●彼ほどの伎術は、今日に在ては驚くに足らざるべし。彼、膽略は極めて得易からず。彼は勝負心の權化也。

●師の選手等嘗て、飯河の銅像を建設することを企て、嘉納甲南先生の同意を得る能はずして已めりと聞く。

●甲南先生は、柔道を說する、必ずしも其の伎術に於てせず、精神修養に資するを第一とす。吾輩を以て見るに、テニスの極致も、亦た這般の妙境に存せずんばあらず。

●飯河、氏家の如きは、ラケットに精神智略を籠め、狹きコートの中、能く活戰の眞味を發揮す。修養の點より見るに。三昧の妙境に入れる者ならずんばあらず。

●道は伎に因て尊卑無し。此の二人者のラケットを携ふるは、本多平八郎が蜻蛉切を提げて太閤の大軍に尾行するの心持也。

其九

●師、商の二校は斯道の先進なれば、早慶の頭を擡げ來れるときに當りて、飯河が獨木以て大塚臺の聲價を維持したるの功は非常也。

●彼は、眞に、一組を以て一軍を擔任するの實力と決心とを備へき。隨つて、選手間に於ける彼の待遇は、格別のものありしと聞く。

●彼が帝都に全勝して、東北に試合旅行を試むるや、旅館に在るに、階級嚴然、飯河の箸を下すを待ちて、他選手則ち食に就く。彼は、恰も將帥の如くなりき。

●飯河は東北に奮戰するつもりなりしが、二高のコ

トに來つて圖らずも、大困難を嘗め、油の汗を流して、僅かに活路を得たる也。

◉二高のコートは頗る理想的也。園樹周遭として在り。心も眼も散らず、閑雅にして、ラケットの音清く響く。老教師デニング、日々其の愛孃を携へ來りて、閑に練習しつゝあり。

◉吾輩も亦た一遊の昔を憶起す。教授古川ラケットの人、伎ゝ亦た凡ならず。今、京都の勇將たる河村、當時、二高の大將として、東北に雄視しつゝありき。吾輩をして、此に數時間の清樂を領取せしめたるは、此の數君の賜也。

◉飯河の來りしとき、彼の後衛は安藤。フォーアの猛球を以て、驍名今に傳はるの人也。而して此人、バックは、それほど困難也。

◉二高の大將、千葉強球を以て、飯河を避けて安藤のバックを衝く。ゲームは七回、而して千葉一氣に其の三を連勝す。

◉蓋し前衞術は、帝都に於て、殆んど飯河の創意に依るもの多く、仙臺軍未だ此の戰法を知らず、平行陣を張つて、一意、安藤のバックを覘ふ。恰も是れ、ボーアの蠻兵が、大英國の文明軍に突賊するが如し。

◉此時、飯河の苦闘、殆んど彼が一生の紀念とまでいはる。第四戰にして敗れんか、名譽ある帝都の大選手は青葉城下に零敗するものにして、恐らくは廣瀬川に投じて憤死せざるを得じ。

◉飯河退却して、安藤のバックを掩護し、打つて又た前衞に進む。雁行陣と平行陣とを懸持し、叫聲を放ちて奔命に勞す。此時、ジュースを繰返すこと幾回。而して一回に球の往復、六十七回に及ぶものあり。斯界のレコードと爲す。

◉此の天王山に勝ち得て、飯河は破竹の勢以て四回ゲームを連勝し、辛くして、且つ光榮ある面目を保ち得たり。

◉此の紀念すべきコートは、此の頃、樹綠に風薫ずらん。千葉は英文學を修めて、帝大の講師たり。續けて帝都に鍛錬せしめば、有數の好選手たる可かりし也。當時、出場の一選手に横田地あり、今帝大の大將たり。テニスを科學的に研究する人にして、プロフェッソル、テニスともいふべき人也。

其十

◉黑くして怖るべき氏家の頸以下は、白皙にして甚だ美麗也。其のスラリとして長き手足を見るときは、彼

ゲームセットを宣せらる。

●飯河は、此の光輝ある記念球を最後として、斯界を勇退せり。彼、今支那に在りて教育に從事すと聞く。

●彼は後衞として前後に冠絶す。然れども前衞としても亦た第一流たるを失はず。

●彼の球は强からずと雖も自由也。彼の長所は、敵の缺陷を衝くにあり、故に强球を必要とせず。

●畢竟、其の價値は、頭腦の明晰なると、大膽不敵の勇氣とに存せずんばあらず。聞說、彼はゲーム、二オールとなれば、決勝は已にありと確信せりと。其の人、以て想見するに餘あり。

●飯河が、丈高く、髮蓬々として、それに白木綿の兵兒帶を幅廣に結び、ラケットを搆へて敵手を見渡すときは、如何にも山賊の統領にてもあるべく見ゆ。

●彼ほどの技術は、今日に在ては驚くに足らざるべし。彼、膽略は極めて得易からず。彼は勝負心の權化也。

●師の選手等嘗て、飯河の銅像を建設することを企て、嘉納甲南先生の同意を得る能はずして已めりと聞く。

●甲南先生は、柔道を課する、必ずしも其の技術に於てせず、精神修養に資するを第一とす。吾輩を以て見るに、テニスの極致も、亦た這般の妙境に存せずんばあらず。

●飯河、氏家の如きは、ラケットに精神智略を籠め、狹きコートの中、能く活戰の眞味を發揮す。修養の點より見るに。三昧の妙境に入れる者ならずんばあらず。

●道は技に因て尊卑無し。此の二人者のラケットを携ふるは、本多平八郎が蜻蛉切を提げて太閤の大軍に尾行するの心持也。

其九

●師、商の二校は斯道の先進なれば、早慶の頭を擡げ來れるときに當りて、飯河が獨木以て大塚臺の聲價を維持したるの功は非常也。

●彼は、眞に、一組を以て一軍を擔任するの實力と決心とを備へき。隨つて、選手間に於ける彼の待遇は、格別のものありしと聞く。

●彼が帝都に全勝して、東北に試合旅行を試むるや、旅館に在るに、階級嚴然、飯河の箸を下すを待ちて、他選手則ち食に就く。彼は、恰も將帥の如くなりき。

●飯河は東北に樂眠するつもりなりしが、二高のコ

トに來つて亂らずも、大困難を嘗め、油の汗を流して、僅かに活路を得たる也。

●二高のコートは頗る理想的也。園樹周遭として在り。心も眼も散らず、閑雅にして、ラケットの音清く響く。老教師デニング、日々其の愛孃を携へ來りて、閑に練習しつゝあり。

●吾輩も亦た一遊の昔を憶起す。教授古川ラケットの人、伎も亦た凡ならず。今、京都の勇將たる河村、當時、二高の大將として、東北に雄視しつゝありき。吾輩をして、此に數時間の清樂を領取せしめたるは、此の數君の賜也。

●飯河の來りしとき、彼の後衛は安藤。フォーアの猛球を以て、曉名今に傳はるの人也。而して此人、バックは、それほど困難也。

●二高の大將、千葉強球を以て、飯河を避けて安藤のバックを衝く。ゲームは七回、而して千葉一氣に其の三を連勝す。

●蓋し前衛術は、帝都に於て、殆んど飯河の創意に依るもの多く、仙臺軍未だ此の戰法を知らず、平行陣を張つて、一意、安藤のバックを覘ふ。恰も是れ、ボーアの蠻兵が、大英國の文明軍に突貫するが如し。

●此時、飯河の苦鬪、殆んど彼が一生の紀念とまでいはる。第四戰にして敗れんか、名譽ある帝都の大選手は青葉城下に零敗するものにして、恐らくは廣瀨川に投じて憤死せざるを得じ。

●飯河退却して、安藤のバックを掩護し、打つて又た前衛に進む。雁行陣と平行陣とを懸持し、叫聲を放ちて奔命に勞す。此時、ジュースを繰返すこと幾回。而して一回に球の往復、六十七回に及ぶものあり。斯界のレコードと爲す。

●此の天王山に勝ち得て、飯河は破竹の勢以て四回ゲームを連勝し、辛くして、且つ光榮ある面目を保ち得たり。

●此の紀念すべきコートは、此の頃、樹綠に風薫ずらん。千葉は英文學を修めて、帝大の講師たり。繼けて帝都に鍛錬せしめば、有數の好選手たる可かりし也。當時、出場の一選手に横田地あり、今帝大の大將たり。テニスを科學的に研究する人にして、プロフェッソル、テニスともいふべき人也。

其十

●黑くして怖るべき氏家の頸以下は、白皙にして甚だ美麗也。其のスラリとして長き手足を見るときは、彼

が力の人に非ずして「頭の人」たることを想像するに足る。

◉彼は見掛ほどの無愛嬌者に非ず。コートに立てる彼は、如何にも惡役也。あらゆる敵を返討にせずんば已まざるの面魂を有す。然れども、一私人としての彼は案外に初々しき處もあり。

◉彼は、ラケットの人として傲漫を以て著聞す。マッチに於ける彼は、味方よりすらも人氣澤山ならず。彼が、惡々しきまでに、大膽にして傍若無人なれば也。

◉彼の價値も、亦た、其の飽まで强氣にして、逆境に處して動ぜざるの態度にあり。彼は敗るゝときと雖も見苦しからず。

◉飯河去後、三十九年の一年間は、氏家の黄金時代也此年、春秋の四校マッチに、東京のあらゆる撰手、面を向け得る者無かりき。

◉氏家の黄金時代は。テニスの興隆を意味す。此時よりテニス熱、沛然として起りたり。

◉三田のコンクリート、コートは他の嫉忌するところ也。此の難處に來り、懸軍孤立の難境に立ち、泰然として、慶の七組を粉砕し去りたる氏家の快戰は、一代の壯觀たるを失はず。

◉氏家の名に伴つて記憶さるべきは、彼の前衛山住也。山住は瀟洒たる男也、其の身體のコナシの自在なるは、天才の面影ありといふべし。

◉氏家は、一人を以て勝たんとせず。其の攻撃は理詰めにして、敵の後衛なして遂に惡球を返すに至らしめ、山住をして容易に功名を爲さしむ。

◉畢竟、彼は間接に敵に克つ。換言すれば、必らず克つべきの形勢を造り出すの手腕に在り。

◉彼、得意の攻め方に到達するや、敵、必らず山住に喰はるべき球を送る。山住隼の如くにラケットを揮ふ。彼、後ろより大聲「一本」と呼ぶ。

◉彼が「一本」の懸聲は、則ち彼が敵の野次隊に惡まるゝ所以ならずんばあらず。

◉彼、全勝の餘威を以て關西に試合旅行を試み、中ノ島に於て堂々として校舘試合を演ず。此時、氏家、三神。對、針重、飯田、眞に常陸山、駒ヶ嶽の對場の如く、東都のマッチに見る可らざる顔觸。

◉京阪の一撰手、「日本第二」を以て自稱するものあり。其の說、尤も愛嬌あり。曰く、東都一年間、氏家に對場して一ゲームを勝ち得し者ある無し。余、則ち一を得る、「日本第二」たる所以と。

●氏家が榮華の夢に「油斷大敵」あり。彼が「中ノ島」に、無心に、得意の球を送るとき、見物の人牆に混じて、熱心に氏家を研究せる者、「師」の大將鶴見あらんとは、氏家の夢想せざりし所也。

●此春のマッチに、「日本一の氏家」を、初めて土俵の砂に埋めたるは、鶴見なりき。

其十一

●氏家が模範試合の對手に針重を擇べるは、恰も講道館に於て、師範甲南先生が山下七段を、永岡六段が半田(義麿)を擇ぶと同一の味あり、正に是れ理想的の對手たる也。

●針重は、氏家の唯一の祕藏弟子にして、其の打球、戰法すべて氏家に髣髴たるものあり。若し彼等をして禪僧ならしめば、氏家のラケットは正に、針重に傳ふべき也。

●針重が氏家に及ばざるところは、攻擊力の稍足らざるの一點に存す。若し彼に攻擊力を附加せしめなば、濃厚なる氏家を現出するならん。

●針重は、今、籍を新聞記者に列す。記者のテニス俱樂部成立の曉には、彼を推して大將となす可き也。

其十二

●「商」「慶」共に錚々たる選手に乏しからずと雖も、遂に一人の能く、氏家の後ろ姿を見たる者あらず。

●「慶」の「早」に於けるは、蛙の蛇に對するが如く、戰はずして膽先づ落つ。而して「早」の「師」に於けるは、蛇の蛞蝓に於けるが如く、勝つべきの勢ありて、妙に制せらる。

●「早」は、つねに「慶」を壓す。而して、「早」は壓、「師」に脅めらる。而して「師」と「商」と對場するときは、殺氣地に滿ち、兩虎の勢を現はす。

●此四者は、互に特長ありと雖も、其の勝敗は、歷史的感情の力に依るもの亦た少しとせず。

●「師」は「早」に勝つ可く、「慶」に勝ち難し。「商」は早慶に敗るゝも、「師」に克てば能事畢れりとなす。

●「早」「慶」と「師」「商」と好箇の二勝負とす。「早」「慶」の試合中止さるゝの後は斯界頓に寂寞を感ず。四十年秋、大塚臺に於ける「師」の活動以後、未だ特筆するに足るの活戰殆んど稀也。吾輩は、運動界の爲に、「早」「慶」の試合の復活を翹望せずんばあらざる也。

其十三

●「商」の吉田は、終に李將軍たるを免かれざりしも、一種力量、自から沒す可らざるの特色を有す。

●彼、短軀、五尺に滿たず。「慶」の榎に比して僅に一分の長あるに過ぎず。其の一躍して大將波多野の後任を承はるとき、手代俄に大盡となれるの觀無くんばあらざりき。

●引續き前衛を勤めし渡邊に於ては、大旦那の歿後、手代を後夫に迎へし寡婦の感ありしならん。

●吉田の球は強くして頗るカーブす。其の空を飛ぶとき、極めてイビツになりて、小判を舞はすが如し。

●彼が、巨漢渡邊を隨へてコートに立つときは、牛若、辨慶を率ふるの圖を聯想せしむ。彼は實に牛若なりき。顏に不似合なる曲者にして、其の打球、戰法、强味に粘氣を帶び、大敵に惡びれず。

●彼は明眸皓齒、少女の如し。而して其の脛には熊のやうなる毛あり。彼の友、彼を字して、『足辨慶』と呼ぶ。

●吾輩、屢、彼をマッチに見る、未だ一語を交へず。後ち、彼をコートに訪ふ。突如として彼を呼んで曰ふ、「ヤー、吉田君」彼、急遽、帽を脫して答ふ、「ドーモ暫らくです」ラケット片手に嫣然一笑す。

其十四

●華を去り樸に就き、粘ばりて強きは「師」の特徵也。「慶」を見れば、都雅にして「師」は如何にも田舍臭し。

●「早」は力に任かせて推すを以て、土俵際に危きところあり。「慶」はスタイルに凝つて勝負に弱し。

●「早」と「師」とは、攻擊の態度を執りて、表裏の相違あり。「慶」と「商」とは、戰法相似て、藝以て身を滅ぼすことあり。

●「師」の撰手が、金巾のシャツに、小倉のヅボンを穿ち、手拭を腰に挾みたるは、一高の野球に於けるが如く、共に斯界の一異采たり。

●夏期練習の猛烈なるは、「師」也。「師」は、つねに春衰へ、秋振ふ。半年の間に、鼠變じて虎となる。春まで雜兵なりし中川が、秋に無類の强球を打ちたるが如し。

●「師」は一生懸命也。大會の撰手を送るに、數十の聲援隊を以てす。蓋し、「師」の外、絶無の現象とす。

●「師」の特色は、目指す敵に勝つを唯一の目的とす。「早」「慶」の伎藝其のものに浮身を窶すと稍異也。

●「師」は參謀本部の如く、敵國の偵察、研究に全力を盡くす、氏家强ければ、氏家を、和田巧なれば、和田を研究し、而して之に勝つべき所以を發見するに至らざれば已まず。

●一師」は、畢竟、力士の所謂注文上手なるもの也。所謂「大物喰ひ」なるもの也。其の能く「早」を斃すは、則ち此の精神の發揮ならずんばあらず。

其十五

●鶴見の戸塚原頭に、氏家を斃すや。「日本」新聞に谷河あり、元と水戸中學の教諭にしてラケツト狂也、三號活字を以て勝負を記す。

●鶴見既に氏家山住を斃し續く猛者の伊藤、飯田を破り、强努の末勢を鼓して、追掛けて關澤三神に迫る。

●若し此勝負にして鶴見勝たん乎、戸塚軍は殆んど生色無かりしならん。然れども、此時鶴見の腕すてに魯縞を貫くの力無かりし也。

●鶴見以謂らく、關澤は天下の强球也。ロツピング以て彼をまはすに若かずと。先づ强球を一發して、敵の呼吸を窺ふ。

●安んぞ圖らん。强球の關澤より軟球を揚げて鶴見をまはし來る。鶴見機先を制せられて心算外づれ陣法全く亂る。

●此の如きは關澤が、巧みに强球の鶴見を操縱したるにあらず。彼、由來、小心の人、氏家、伊藤の名將が連敗するを見て、得意の强球を控え翼々として弱球を揚げたるが、意外にも、敵を驚かし得たる也。

●勝敗の理、元と此の如し。テニスを見る者、須らく一隻の炯眼を養ふべし、

其十六

●一昨年の秋、「商」軍が、柴山、川上を大將とし、朝岡、宇多を副將とし、決死の勢を以て、三田の牙城に肉薄し、「慶」の大將、及宗徒の面々、小泉、和田、榎、小畑等、無殘にも骸を並べしとき游擊橋本、前田が病餘の瘠軀を以て、健鬪して、危機一髮に本壘を保全したるは、又々近年の一活劇なり。

●「商」軍、氣早の彌次連は、小泉等の斃るゝを見て、雀躍して欣舞し、宙宇を飛んて、樓を卜し、祝勝宴の準備に急也。かゝる頽勢の中に處して、橋本の紅顏益々紅に、音に聞えし熱球は、愈冴えて響き、殊死の勢一刻に鋭く、「商」軍の勇士續々戰死す。

●最後に、橋本は柴山に對場し、ゲーム、ニオールのジユースを繰返すこと七八回、滿場醉ふて茫然たるとき、川上フオーアに釣りてバツクに動く刹那、敵の裏を掻きて、付け入りたる橋本が熱球は、低く〳〵電光石火と、サイド、ラインに沿ふて鮮やかに川上の右を抜き、後線一二寸の中に飛んて、ヴアンテイジ、イン

となる。蓋し、橋本が『背水の球』にして、輓近稀覯の快球たらずんばあらず。

●勝敗の決、最後の一球に懸る。可惜、柴山、レシイブをネットに引掛けて、萬事休す。或は曰く、柴山の球にして、若し入らしめば、ネットを越して小さく左に跳ね落ち、またもジユースを繰返せしならん。橋本曰く、「僕は、ラケットを大きく振りかざして、深きサアーブと見せ、一刹那に小さく落して淺く入れたれば敵思はず前に泳ぎたり」。

●此の紅顔の勇士は、現に、前垂掛けに家業に從事しつゝあると聞く。ラケットの力を算盤に移さば又た商界の一勇士たらん。

其十七

●「師」には彗星多し。時々、突如として出現し、大に世間を騷がす。就中、四十年秋の大出は、大なる妖星にして、尾を曳くこと長かりき。

●大出は、一面には、「師」の代表者とも見るべし。「早」「慶」「商」の大將、悉く彼の爲に擊退せられたり。彼の名は、一場にして知られたり。

●彼が氏家、山住を破りたるは、頗る奇蹟也。ゲーム二、〇のカウント三、〇より盛り返し、一球一球に勢力加はり、遂に山住をして狂奔憤倒せしめたり。

●彼が、あらゆる大撰手を喰ひたるは、皆、此の奇蹟的勝利也。彼をして力士ならしめば、理想の一枚腰にして、劍の峯に殘りて德俵を回はる怪物なるべし。

●彼の風貌、彼の打球、極めて樂天的にして、俳味十分にあり。素人より見れば、下手の如くに見えて、其の敵手に取りては何とも言はれぬ强味あり。

●彼は如何なる窮境にも悠々自若たり。妙體とひねりて、球と共に飛揚る。ラケット振りは善からず、其の人は死地に談笑するの慨あり。

●彼の打球は、必ずしも第一流といふ可らず。然れども、其の戰法、及び覺悟に至つては、優に第一流にして、吾がテニス史に特筆さるべき一人なるべし。

●彼の戰法は、「敵の前衛攻擊策」に獨得の妙を有す。彼は、ロビングもプレーシングも交錯して用ゆ。殊に、其のロビングは、前衛の皮肉なるところを飛過して、敵をして少しく憤らしむ。

●彼が「敵前」を攻擊するは、熱球を以て突貫するに非ず。則ち强引にあらずして誘惑に在り。彼は、「敵前」が、打ちたし、打たねばならぬ、打てば必らず失敗するといふ要處を覘つて、皮肉の軟球を送る。

●此の如き皮肉の軟球は、容易に彌次には分曉せず。概ね、味方の遣り損とばかり殘念がれども、其の實、大出の妙技此處に在り。山住も和田も、此の魔球に誘惑されて、魔道に引込まれたる也。

●彼が、此の祕法は、和田と山住とを研究したる結果也。彼は松本の人也。和田、毎夏、松本中學にコーチす。彼、歸省中、屢、和田と切磋し、頓に其の弱點を了解すといふ。

●大出は下手らしき上手也。彼の奮戰的態度は、兎も角も、後世の模範とするに足る。

●彼、今、京都師範に教師たり。久しく京阪に樂戰せば、當年の奇蹟的手腕恐らくは消磨せん。

其十八。

●慨然として、ラケットを揮ふ者は、京大の大將神田也。彼の戰法、打球態度すべて「商」の岡村に酷似す。彼が得意の球、若し、ネットに掛るときは、彼、身を翻へして天を仰ぎ、右手ラケットを拔き、左手其額に加へて浩歎を發す。

●京大に昔し前衛藤田あり、精悍にして勇士の名を得たり。輓近、神田獨木以て大廈を支ふ。

●帝都より上方に移るの名手、今、大出、中川、渡邊、松林等あり。「神商」には玉垣、岡（誠）あり。玉は小男にして、肩より打つ熱球、岡は長身にして無邪氣に活躍するスマッシング、共に東西に著聞す。此の頃、三高に大將福井出づ。精悍自在の妙技、殆んど一世を空しくするの慨あり。勉めて倦まずんば、其の造詣測る可らざるものあらん。

其十九。

●「早」に關澤、三神。伊藤、飯田。井上、鈴木の三組駢立せしことは、又た吾がテニス史を飾るに足る。

●關澤は、忠誠の人、其打球は自在、其態度は寛大にして、大將の典型ともいふべし。彼の弟、小關澤亦た前途有望。

●關澤近時、度々失敗するに至れるは、思ふに既に横綱の老境に入りたるなるべし。

●伊藤は、自由自在、敏捷を極む。所謂上手と唄はれたる名手、「慶」に古賀、「商」に岡村等ありと雖も、伊藤の輕妙なるは、恐らくは學び易からず。

●井上は熱球を以て聞ゆ。近頃少しくロビングに注意し、球勢弱はれりと雖も、現代快心のプレイアーたるを失はず。

●其の三前衛に至つては、三箇の特色を發揮して光彩

陸離たるものあり。而して其の後衛との配合に至つては妙味言外に存す。

●或は此三人を婦人に見立てゝ謂ふ。三神は、世話女房の如く、地味なれども堅實無比にして氣品あり。飯田は、人を人とも思はぬ振舞太々しけれども、才華爛發、其の伎は水際立ちて、大向の喝采を引く。下田歌子の如くなるべし。鈴木に至つては、其コートに立つ、慓悍奇竦、際どき時に快腕を揮ふ。恰も、山千海千の老妓が、温順の佳客井上を、長煙管の烟に卷くの趣ありともいふべくや。

其二十

●現代華麗なる前衛は「早」の岩村、「慶」の和田を推す岩村は、土州男兒姿麗はしく、顔に愛嬌あり、其の下がりてのスマッシングの莊麗なるは、和田に過ぐ。

●和田は大將たること六年、都下第一流として著聞することと亦頗る久しといふべし。彼は、後衛としても、恐らくは三田の第一なるべし。

●彼の抜群に長く、瘦婷たる姿體は、如何にも理想的のテニスマン也。彼は、其の姿態を、巧みに屈伸し、高低前後の球を自由に取扱ふこと、極めて鮮やかなり。

●山島は自ら其姿に溺るといへり。和田は自ら其の藝に釣らるゝ乎と思はる。彼は餘に巧みにして、而して其のスタイルの爲に失敗す。

●和田は練習の大關にして、實戰には、いつも振はず。岩村も同じく「觀兵式」の稱號ある也。

●此の二人者は、上手も上手、好きも亦た甚だ好きといふべし。三度の飯は二度にてもといふ方なるらし。此の二人者は、宜しく之を「ラケットノ蟲」と尊稱すべき也。

●惜むらくは。好撰手。伎藝に專らにして、精神の修養足らず。其の實戰が平生の練習と、恰も別人の觀あるほど見劣りするといふは、平生唯だ腕を練つて膽を練らざれば也。

其二十一

●人は、榎をポン〳〵と呼べども、ポン〳〵は甘し、吾輩甚だ之を愛す。遠く見れば目も鼻も分らぬ程にて、近づけば則ち茫漠たる中に一種の英氣を帶ぶ。彼は不世出の一異才也。

●彼がロッピングは優勢にして機略あり。其の戰法を以てすれば、勿論、小泉の上にあり。

●「慶」に大將たる可かりし人は、榎の前に小久保あり、左手の擊球を以て著はる、斯界の快男兒なり。

●三田の古賀と、一橋の岡村とは共に無雙の器用者、古賀のコントロールは斯界の珍。岡村が體を半回するほど後ろに捻ねり、バックに搆へて、左と見せて右、右と見せて左へ抜く低球は、手に入つたもの也。

●「師」の中川は龍頭蛇尾に終りぬ。小さき球を打てぬ人は概ね此の如し。「商」の大西は最後に名聲を揚げ、大將の器を以て目せられたり。

●「早」の濱口、前田は實戰に勇、前田の沈着にして伎の大なる、濱口の見掛に依らぬ强球を打つ。前後相俟ちて「早」の老將軍たりき。

●鶴見の前衛吉川無器用にして、而かも發達の速かなる比類稀也。尾崎は大將の態度立派なりとも、素直にして些の變化無し。

●「慶」の富岡、小幡は圓滿に發達せる才物。尾崎、江森の獰猛なるは、後藤、今井の優美なると、好箇の對照にして、皆三田不可無の逸物なりき。

●帝大の中井、山領の蠻的なる、山本、大西の美的なると。又た好對照たるを失はず。帝大のテニス振りの美しきは柴山なりしが、惜むべし病んでラケットを廢せり。

●柴山の兄は右、弟は左。「商」の大將たり。共にラケットの人として精采を有す。共に餘りに無頓着にして、呆氣無く勝負を見捨つるは、撰手としては貴公子に過ぎたり。

●「早」の澤田益老熟すべく、斯界の麒麟兒「師」の鷲見前途果して如何。「慶」の飛將島山、頭腦明晰打球理詰めにして力あり。端午人形然たる風貌、コートに異彩を放つ。「商」の稲毛、水滸傳の豪傑の誰やらに似たる顔にて、ロビングに妙を得。此の四人者は今後續けてラケットを揮はしめば、まさに將來の雄鎭たる可き也

●アマチューアの勇將として、日銀の山崎、興銀の前田、共に颯爽たる武者振り、確かに東都の撰手たるべき人々なるべし。

其二十二

●テニス發達の歴史を大觀するに、雄といひ將といふべき名手頗る少しとせず。

●就中、飯河と氏家とは、ラケットに天下を取つたる者といふべし。天下を取るといふは、丈夫兒の本領、何物を以て之を取るとも、世の快心事たるを失はず。

●小泉は少年テニスマンとして夙に令名著聞し、頭腦體力も亦た十分なれども、藝の幅狹く、和田は、屢、日本一の評を博すれども、戰場に弱くして共に天下を

取るを得ず。

●飯河、氏家以後、天下統一の器は、まさに「師」の秋山(眞)ならずんばあらず。

●秋山は打球の自在なる、戰法の愼密にして巧妙なる。而して其の動作の沈着にして機敏なる、其人物の溫厚なると相照映して、絶好のプレイヤーたる也。

●彼は風采頗る揚らず。漠々たる田舍臭き表情を以てして、敢て靈妙なる球を連發し、其の手際の確實なる、平生の練習と異なること無し。

●彼は、「狸」の名を以て敵手間に通用す。彼の伎に於けるは、頗る狸なり。慓悍なる鈴木すら、彼の向に立ちては奔命に疲る。而して秋山の樣子を見れば、靜なること山の如し。故に、鈴木は切齒して彼を「狸」と呼ぶ。

●彼の疾さは動くとも見えて間に合ふにあり。彼は、「山」を張らず、正しく逆を覘ひ得て、緩球を以て靜々として、「敵前」を拔く。

●彼は、前衛に、俊敏なる中川を失ふの後、上條の一に平實なるを得て、組としては、遂に大に働くことを得ず。偉器を懷抱して、唯だ一箇人としては絶倫との嘆美の聲に送られて、テニス界を退隱せり。

●關澤嘗て、吾輩と語る。彼、敬虔なる語調を以て、秋山を賞揚し、『實に、日本にテニスありて以來の第一人也』とせり。

●「早」は「師」の敵にして、而して關澤は秋山の爲に、非常の大敗を蒙りたる者也。吾輩、彼の口より此語を聞き、切に秋山の不運を憐むと共に、關澤の男らしき襟度を感歎せずんばあらざる也。

●「早」の七祖を撫て斬つたる三高の大將福井は飯、氏、秋三人以後の雄者らしく見ゆ。彼は岡崎中學のときより既に斯界に知られき。

●聞說、三高の撰手、平生の練習に、彼に向つてジユースに達し得る者無く、彼はスマツシングの入割を打返すと傳へらる。

●「早」軍の諸豪、輕擧敗衂を悔ゐ、秋風時節、京阪に向つて捲土重來の勇を揮ふべしと噂せらる。福井の眞價は、此時に始めて定らん。

●福井の球は、必ずしも難球にあらず、或はコントロール慊らずともいふ。然れども打球とモーションの自由自在の一點に至つては驚く可きものあり。「早」軍の前衛、專ら前後に動き、左右の働き足らず、彼の名を爲さしめたるに似たり。

◉テニス界に、ハレー彗星の如くに輝きたる福井は、此秋其の尾を以て能く「早」軍を包圍すべきや如何。

其二十三。

◉吾輩は現代の紳士に勸む。宜しくラケット一本を購ひ得て諸本と併せ置くべし。晴にはテニス、雨には玉突、又甚だ妙ならずや。而して風雨蕭々の夜、謠一曲、味盡きざるものあるべし。

◉今や到る處の學生團體に、テニスコートあり。貴族の家庭にも、コート次第に多く、テニスマッチに紳士淑女の帽影傘影旁午するに至れり。

◉矢來町の酒井家の如き、特にコンクリート、コートを有し、樹蔭蓊欝、之を環りて頗る快適也。

◉吾輩も亦た嘗て、炎暑の一ヶ月を日々此に送りしことあり。鳥居大路、和田、犬飼、木場、湯川、伊藤の諸君、共に朝より來つて、輿に乘じて午餐の機を失し、晩風に吹かれて、ラケットを提げて、歸途を氷屋に憩ひしことも數々なりき。

◉與銀のコート亦甚だ佳也。蓋し總裁、添田博士、斯道の熱心家たるに因るといふ。

◉森田茂吉、桑原鷲藏の諸氏も亦た大の好者らし。唯だ此二人は、木戸御免の方だけなるべし。

◉滿鐵の兩久保田も亦た熱心にして且つ妙手といふ。「早」の安部磯雄は、優に撰手の域に入る。紳士中の雄者なるべし。

◉吾輩は、廣くラケットの老紳士を知らず。吾輩の如きは、晩學の一老生、却て老紳士を知らずして、靑年撰手とのみ馳驅しつゝあり。

◉遣露大使本野男、先きに吾輩と大に運動を談ず。男、露國の銃獵を話す、吾輩、生平、漁獵の趣味無し。聞いて記するのみ。話次、テニスに及ぶ。男も亦たラケットの人也。一日の閑を偸みて、好コートに會せんといふ。

◉好事魔多し。男の歸任期迫りて、約を果すを得ず。男は、此の趣味津々たる未決問題を齎らして烏拉山西に往けり。

◉吾輩は、此記事を露都に送りて、日本のテニスの近況を報じ、併せて、吾等兩人の間なるラケットの未了緣を續けんことを欲す。

其二十四

◉吾友玉堂は、今、琵琶湖畔に在り。玉の如き人也。

白玉の玲瓏として水晶盤に映ずるが如く、時にラケットを携へて湖畔を往返すらん。

●彼、つねに、ラケット日誌を記して送り來る。高潔なるラケットの音、紙上に響くを覺ゆ。

●吾輩も亦た時に、コートに臨んで玉堂を憶ふ。天晴波平の夜、玉堂、舟を琵琶湖に放ちて、橫笛を吹きて以てラケットの思を寄せよ。則ち、吾輩の書齋なるラケットの袋に月光滿ちて、ラケットに聲ある夜なるらん。

老母、妻兒と、園中に出てゝハレー彗星を眺めし夜、稿了　黑頭巾記す

寄席行

倫敦にて　繞石生

今夜は書物は讀めさうに無い。疲れては居るやうだが、眠くは無い。寄席へでも行て見やうかといふ氣になる。折から臺所の用を濟ましてカノン孃が食堂へやつて來たから、

「どうです、寄席（ミュウヂック、ホオル）へでも行きませんか」

と誘つて見る。一人て行く程の元氣も今日は無いから。

「ユアール、エリイ、カインド、ミスタ、オターニ、イエース、アイキル」

と來る。此邊でいゝのは何處ですと訊くと、イスリントンにも在るが善く無い、ホロエー、ロオドのエンパイヤが善いと言ふ。

「ゼン、レタス、ゴオ、ゼア」

「オーライ。エイト、ア、ビツ。アイル、ドレス」

と、奴さん大分エキサイトして居る。喜色滿面て、三階の自室へ衣物着換にあがつて行く。すると今迄臺所てナイフやフオオクを拭き淸めて居たアンダソン孃がまた食堂へ出て來た。「しまつた。こいつ一人殘して行くも可哀相だ。二人居る時に誘へば宜かつたに」と思ふが仕方が無い。今日はカノン孃と一所に行つて、此の次に之一人連れ出してやらうかとも考へる。がどうも氣の毒なやうだつたから、

「あなたは今夜は忙しさうてすね」

は、ちと窮して居た、忙しさうだつたから誘ひませんてしたといふ積りで。

「フエアリイ、ビジイ、アズ、ユウジアル。ミスタ、オターニ」

と、フオーク、ナイフを脇テエブルの抽斗へ納れながら應へる。素振が確かにカノン孃を誘つたとを知つてる素振だ。少々不平らしい。仕方が無いから、

「あなたも行きませんか、寄席へ。カノンさんも行きますよ」

と言つてやる。果してだ、

「それはどうも有難う。――おつかさん、私も行つてよう御座いますか。」

と急にいそ〳〵する。すると臺處の方から

「お前もかへ、いゝとも。――臺所の用は大抵すんだから。」

といふ聲がきこえる。大將も亦アタフタ三階へ上つて行く。

僕も自室へ行つて、帽子かぶつて、外套引かけて、再び食堂へ出て、今日の夕刊新聞を拾ひ讀して二人の身仕度の出來上るのを待つて居る。と間も無く、階段を下りて來た二人が、

「アアユ、レディ、ミスタ、オターニ」

と叫ぶ。豫想外に身仕度が早かつた。餘程エキサイトして居るやうだ。

カノン孃はフロツク、アンダソン孃はジヤケツ、そして二人共外行のハツトをかぶつて居る。エンパイヤ

は一と晩に二度ある、今八時過だから初のには間に合はぬ、二度目のは九時過からだから、散歩ながらに歩るいて行かう、ゆつくり歩るいて行かう、と言ふ。口では左う言つてるが歩調が仲々早い。斯(か)う行くのが一番近道だと、ハイベリイ、フイールドを途中から右へ抜けて、淋しいロナルヅ、ロオドの坂道を南(みなみ)へ下り、右へホオセル、ロオドを出り、左へドレイトン、パアクを曲つてホロエーの大通りへ出た。それから賑やかな電車道をトットと歩るく。九時に二十分前にホロエー、エンパイヤ、パレイスといふ寄席の前へ着いた。『歩るいたつて近いわ』とカノン嬢は言つたが、電車に乗れば其れ丈け餘分の散財させるとになるのを慮つてあるいたらしい。

寄席には入口が幾つもある。フオーチユール入口、グランド、サアクル入口、ピット入口、アムフイシアタア入口、ピット入口、バルコニイ入口などある。ピツト、アムフイシアタア、バルコニイは、何れも追込みだから、早く入つて上席(せい)を占めやうといふ連中が、二列を爲してその三つの入口に百人餘りも詰かけて居る。御免蒙つてその行列を横切つて、門内の切符賣場(ブキングオフイス)へ行く。いくら女連れだと言つても、寄席にボックスを奢るのは馬鹿らしい。『フオーチユールを三枚』といふと、後(あと)に控へて居たカノン嬢が、

『およしなさいよ。グランド、サアクルの方が却て宜(よ)う御座いますよ』

と忠告して呉れる。フオーチユールは高いから氣の毒だといふ念から出たものらしい。其實一席に付て三片(ペンス)しか違はぬのだ。が仰に從つてグランド、サアクルにするとにして、座席表を見して貰ふと、附込(つけこみ)はまだ一向無い。其處で第二列の中央、十三、十四、十五の三席を附込(ブック)する。

見ると開場(ドアス)八時五十五分、幕明(カーテンアップ)き九時十分と掲示してある。

『まだ大分間(あい)がありますから、其處いら散歩しませう』

とアンダソン嬢が言ふ。仰に從つて切符賣場を出る。門外へ出て見ると、追込連中が二百人許りにも殖(ふ)えて

居る。『私達は切符で入るのですよ』と言はん許り、兩孃は得意氣に『御免〳〵』と、追込連中の行列を横切つて大通りへ出た。序でに云ふが、此處の棧敷は十志半、七志半、五志と三段にあつて、土間が一志半、二階正面が一志（附込料三片）、そして、ピットは六片、アンフイシアタアは四片、バルコニイは三片なのだ。

何處か茶店でもあれば、休息かた〳〵、二人にカフエーでも飮ましてやらうと思つたが生憎と綺麗な家が見當らぬ。其の癖、僕自らの入りたいと思ふバアは町角毎にある。

兩孃を左右にして（僕が車道近き端に居るべきであらうが）話しながらハイゲエトの方へぶら〳〵歩るく。流行のトオクやハットを硝子戸内一パイに飾り立つてる小間物屋の前へ立つて眺める。プリムロオズ、ヒヤシンス、チユーリップ、ダフオヂル、ペラゴニアなどの鉢植を臺の上に載して切りと購客を呼んで居る大道花屋の前にも立つて眺める。とある町角に大變な人だかりがして居る。近よつて見ると、糶賣だ。色んな日用品をゴチヤ〳〵に並べた臺の左右に、大きなランプがアカ〳〵と照つて居る。糶賣屋——シルク、ハットを冠つたその糶賣屋は、臺の後ろにある踏臺の上に突立つて、手當り次第に、前なる日用品を取り上げて糶つて居る。

『これは素敵に廉い。この石鹸が六ハッて僅か三片。三片。』

と叫ぶ。群集の中の誰れかゞ、

『二片』

と聲かける。誰れかゞまた

『一片半』

とつける。群集といふのは、イヤース(yes)とか、ナウ(no)とかいふ發音をする土方や工場女らしいの許りで、キチンとした服装をした男女は一人も交じつて居らぬ。賣つてる品物は僞造物に決つて居る。

『もう歸りませう』と言ふから、後歸りする。はや開場をしたものと見えて、行列の追込客はもう居ない。正面右手のグランド、サアクル入口の階段——絨氈

柔かい階段を上つて二階正面へ出る。三階を見ると一パイの人だ。下の平土間にも六七分の客が居る。附け込んで置いた椅子にはエンゲーヂトといふ札が下つて居るので直ぐ眼に着く。坐つてる人の前を『御　免』『御免』で通つて自席へ就く。『丁度九時てすよ』とカノン嬢がさゝやく。

寄席の構造は劇場と同じだ。装飾は固より劇場には遙か劣る。

正面に、劇場同様、幕が下つて居る。然しそれが地質も下等な廣告幕だ。四角、三角、五角と仕切つて、種々な廣告書きがしてある。「高等洋服店、ハイゲート、セント、ジヨンス、ロード二十五番ビイ、マント、エンド、サン」と讀まれる部分がある。「齒科醫、ミスタ、イー、テイ、ブツクエル」と讀まれる部分がある。「無類飛切の麥酒、無類飛切の葡萄酒、無類飛切のヰスキー、無類飛切の葉卷煙草は當店にあり、ホロエー、ナグス、ヘツド」と讀まれる部分がある。「春は正に巣造りの時期なり」と素敵に大きな文字を現はして置いて、其下に「喜ばしきは春なり。鳥は巣を營み、幸福なる人は家を建つ。一時に金を支出するに躊躇する人は吾が社の理想的月賦支拂に頼れよ。ゼルクス、アンド、サンス」といふ長々しいのがある

やがて舞臺の眞前の樂席から囃し出した。囃し出すと言つても、淺草式のプーカプカドン〱ぢや無い。それでも管絃樂だ。オーヱルチユールてザムパZampaとある。

囃が終ると、幕が揚がる。掲示通り九時十分だ。最初が一幕物の喜劇。粗忽な女房が、前を通る知らぬ他人を亭主と間違へて家を飛出して迎へ入れる。そいつが又亭主らしくはいり込んで、キスなどよろしくやる處へ、本物の嫉妬家の亭主が歸つて來たので、あはてゝ先のを隱くす。隱くれて居る押入れの中て音をさせる。亭主が密夫を引き入れたと氣付いてピストルを持出す。その中に旨く先のを逃がすといふ、筋は簡單だが、臺詞が滑稽ずくめに出來てるので仲々面白い。

幕を下ろすが早いか、すぐ上がる。さつきは背景が室内であつたが、今度は背景がスコトランドの風景だ。其處へ蘇格蘭固有の服著た男が三人出て來て、蘇格蘭固有の何んとかいふ踊を踊る。珍らしいから面白い。

そいつが退場すると、入違にアイルランド生れの十五六の女が三人出て來て、こいつが又愛蘭土固有の何んとか踊りを踊つて見せる。仲々綺麗だつた。終ひ際(しまひぎは)に英吉利の昔風な衣物着たチャリが男女と二人出て來て、さつきの少女の踊りを彌次りながら、踊つたが、こいつがまた滑稽で一寸腹の皮がよれた。

お次が活動寫眞。活動寫眞は珍らしくは無いが、つい三四日前にアレキサンドラ、パアクであつたフットボールの光景を見して呉れたので、見に行かなかつた僕は、この活動でその盛んな光景が窺はれて面白かつた。

お次は輕業。宙返りや、越後獅子の眞似見たいなことをする許で、一向つまらぬ。それでもカノン、アンダソン兩孃は、アブサアドだの、リヂキユラスだの、ゴット、グレイシヤスだのと、さゝやいて感心して見て居る。

お次はヂームズ、エンバンクメントを背景にして、其處へ乞食の歌歌ひが出て來て流行歌を歌ふといふ趣向。歌は滑稽歌だつたが、今思ひ出せぬ。なんでもカン、ロンドン、ドウ、キザウト、ミ、フエームといふリフレン付の歌だつた。

お次がオルガ、エルガア、ホドソンといふ、夫婦と女の子と三人連れの合奏。娘がピヤノやれば、おやぢはフルウト、細君はヴイオリン。娘がフルウト、おやぢがピヤノ、細君が肉聲、といつた風にしていろ〳〵やつた。僕には能くは分らなかつたが、『あの人の聲は少し齒の間から洩れるね』とか、『ニユウbowをヌウだなんて』とか、カノン孃がアンダソン孃にさゝやいてるのがきこえた。

其次が、ノルトンといふ男の聲色(ミメチツク、モノログ)遣ひだ。役者に御馴染の淺い僕には馬耳東風だつたが、でも大向ふからは屢喝采を博した。

其次はボクシング。居酒屋で土方と商店の若造とが落ち合ふ。エイトレスのことから喧嘩になるといふ仕組で、つまりはボクシングを見せるのだつたが、本體ボクシングといふ奴が、ベースボール用のミットのやうなものを手にはめて、敵の隙を見て、顏や肩を打つて、敵をなぐり倒すといふに過ぎんし、仲々勝負のつかぬもので、威勢のいゝ撃劍や柔道を見て居る僕等には、まだるつこいもんだ。

はねたのは十一時。例によつて出口が別にしてあるし。下駄を出して貰ふとも無し。それに寄席へ來るやうな客でも——英吉利人はこれは實に感心だ——うん〳〵人を推したり、先に出やうとしたりは決してせぬ。席の順に徐々と出口へ歩ゆんで行くから一向込み合はぬ。

寄席の出口から電車でハイベリイ停車場まで行つて、其處から公園をつきぬけて歸つた。出る折には降りもしさうな空であつたが、星がキラ〳〵輝いて居る。そして十八九日頃かと思はるゝ月が早や大分上に上つて居る。

二人は『面白かつたはね!』とか『あのアイリシユは三人兄弟なんだらうよ、顏が似て居るぢや無いか』とか『フルウトを吹いた娘はおつかさんの方に餘計似て居る』とか『あれが嵌めてたダイヤは餘程高からうよ』とか頻りに話しながらあるいて行く。僕は『英吉利と日本とは時間に九時間許り相違がある。今は此處では四月二十七日の夜の十一時過だが、日本では二十八日の朝の八時過だ。學校の同僚は今頃出席簿を抱へて敎場へ出かけて居る刻限だな』などと月を見て不圖日本のことを思ひ出して、默つて二人の横になつてすた〳〵歩るいて歸つた。

前號に豫告せる黒頭巾氏の「現今の政治に關係ある富豪」は書き方に氣に入らぬ所ありとて、筆者より撤回を申込み來りたれば本號に掲載すること能はざりき。其代り次號に金權と政權とに關係ある別種の面白き人物を捉へて縱横の論評を加ふべしとの事。

德富蘆花論

人物評論（五）



△健次郎さん

山路愛山

私は健次郎さんと接觸したことが餘り多くないから深く立入つて委しくお話する程の材料は無い。民友社に六七年一所に居つたが、健次郎さんは何時も隅つこの方に引込んで、他の人とは碌に口も利かぬといふ風であつたから、從て僕も餘り話をしたこともない。だから健次郎さんの腹の中までよく分るといふ程まで理解する機會が無かつた。一體兄貴のやつて居る新聞社に居るのであるから、弟は少しは出娑婆るべき筈であるが、健次郎はそんな事がなく、殆んど有るか無きか分らぬといふ風があつた。

然し私は健次郎さんの書いたものは終始讀んで居つた。そして昔から感心して居つた。コブデンやブライトやグラッドストンなどの傳記、あれ等なども感心して讀んだ。當時の私の考といふものはグラッドストンでもコブデンでもブライトでも、其私生涯（プライヴエートライフ）は非常の興味を以てよく書いてあるが、社會の大勢とか政治上の大問題とかに向ては健次郎さんは興味を持たぬ人だといふ事であつた。そこで私は、此人は如何なる場合でも物を一個人の生活の上から觀察する人で、グラッドストンを見れば。家庭に於けるグ氏、田舍に於けるグ氏、教會に於けるグ氏を中心として、其れから社會政治上に於けるグ氏に觀察を向ける人で、いつて日

れば、觀察が中心の生命に觸れることに骨を折て、周圍の事情から性格を造ることに興味の少い人だ。若し此人が小説家になれば、立派な小説を作るだらうと考へて、友達にも内々話した事もあつた。之は竹越君から聞いた話だが、蘆花君といふ人は實に文章に忠實な人て、ユーゴーの九十三年（ナインティ、スリー）をみんな飜譯したが、文章が氣に入らぬといふので原稿を悉皆火の中にくべて了つたといふ事てあつた。實際健次郎さんの原稿を見ると消しだらけて鉤の中に鉤が入つたりして殆んど文字の見別けがつかぬ程て、文章を以て生命とする人てあると感心して居つた。他日必らず立派な文章家になるだらうと其時から思つて居た。果して健次郎さんは今日文壇の雄となつて居る。

當時民友社ても健次郎さんの本領を本當に識認し、又趣味も同じい處から、よく話をしたといふ人は宮崎湖處子、國木田獨歩の二君てあつたらうと思ふ。才の大小はあるが此等の人は何處か似通つた所がある。然し或は國木田君の如く中年にして病死し、或は宮崎君の如く發展すべくして發展せずに居る人もあるが、其中に健次郎さんは、勉强家でもあり、志す所に忠實てもあり、又身體も健全であるので一番よくなつたのだらうと思ふ。

健次郎さんの人となりについては多少分らぬこともないが、深くも知らず、又善い事ても惡るい事ても友達の事を話すことは餘り面白くないし、又友達となれば大概の事は忘れて了ふものであるからこれは御免を蒙る。

文章の事をいへば、實をいへば私は「不如歸」を讀んてゐない。新聞ては處々讀んだが纏まつてから讀まなかつた。又「寄生木」も讀まない。妙なもので、健次郎さんをいくらか知つて居るが爲めに、本を讀まなくても大體分つて居る樣な氣がする。然し「黑潮」は讀んだ。政治上の事も書いてあるといふ事だから自分の趣味に適するだらうと思つて讀んだ。又「思出の記」は健次郎さんの友達の事ても書いてないかと思つて讀んて見た。兩方共感心して讀んだ。が、之を要するに政治

とか經濟とか、天下の大勢とかいふ側の觀察、描寫はあの人の長所でなくして、矢張り一個人の內部の生命に深い興味を以て總ての物を觀察描寫する人であるといふ最初の觀念を改める譯に行かなかつた。文章は非常に細かくて、絹糸の針で羽二重を細かく縫ふといふ風で、實に痒ゆき所に手が屆くといふ趣がある。而かも其中になか〳〵強い所があつて女らしくない。文章の精細な人は多く女らしい弱々しい調子になり易いものだが、健次郎さんの文章には一種の野心が閃めいて居る。強く男らしい所がある。それが其精細な文章とコントラストをして面白味を與へる。今の小說家に文章の旨い觀察の細かい人がないではないが、其底に野人らしい所が少いから平板單調なものになり易い。健次郎さんは底に野人らしい所があるのみならず、勉强家で新らしい本を讀み、又凝り性で氣に入るまでは書直すといふ流儀だから見るべきものが出來るだらうと思ふ。

今一つ健次郎さんのものを讀んで感心するのは政治とかいふ外側の事も極く短かく書いてあるが決して分らぬ人でない。總ての問題について多くの人の持て居る考がよく分つてゐる。健次郎さんが嘗て自分でいつた事がある。「帝國主義の理屈は自分もよく知つて居る」といつた事がある。大抵自分の說を持て居る人は、他人の立場の分らぬ人が多い――例へば宮崎湖處子君は立派な人であるが、自分の事がよく分つて反對の人の立場を正しく解することの六つかしい人だ。北村透谷君もさうであつた。天才の人は多くさういふ傾はあるが、健次郎さんはよく自己を修練して反對の人の說もよく分り、そして自己の主義を極端に主張する、之も一つの特徴である。

それから今一つ健次郎さんに及ばないと思ふ事は、あの人は眼にイリユウジョンを浮べる力のある人で、物の輪廓が繪のやうにあらはれて來る。此イリユージョンやヴイジョンを浮ぶる力は兄の蘇峯君の文章にもあらはれて居る。蘇峯君の頭は極めてよく理屈や道理が分る頭で而かも又極めて想像力の强い頭である。健

次郎さんは其想像力の方は一層强く、あの人には物がすべて繪畫となつてあらはれる。又自分でも變な畫を書く。今から十五六年ばかり前には繪を書いて眞黑になつて歩いて居た。蘇峯君も詩を作る所を見ると、頭に繪があるやうだ。此點は兄弟共通である。先づ此位でやめませう。

△徳富蘆花氏

相馬御風

○徳富蘆花氏について何か思ふ所を述べろとの事だが、私一個の考から云へば、徳富蘆花氏の如きは論じたり評したりする人ではなくして、遠くから見て居る人と思ふ。手近に引き寄せて見る人ではなくて、遠くに置いて眺める人のやうに思ふ。蘆花氏の作品は先づ別として、令兄蘇峯氏との絶交、トルストイに逢ふためのロシヤ行、さては田園に耕す人としての生活、凡て之れ遠くから眺めるべきものであつて、近く寄つて覗くべきものではなからうと思ふ。

○文筆を以て世に立つ人で、徳富氏兄弟位廣い讀者を左右し得た人はあるまい。蘇峯氏の國民新聞と蘆花氏の「不如歸」と此二つの勢力は實に驚くべきものであふ。共にこれ一般人心の赴く所を摑むに巧であるに因るものと云はなければならぬ。此の點に於て蘆花氏は蘇峯氏と比べて、聊かも劣る所なき賢なる人である。少なくとも世を觀るに賢なる人である。

○蘆花氏の作品で私の最も好む所のものは、「自然と人生」と「思出の記」と「巡禮紀行」と「二十八人集」中に收められた「國木田哲夫兄に與へて僕の近狀を報ずる書」にとである。中でも最後の獨歩に與へた書は、私の最も愛讀したものである。その中にこんな句があつた「僕思ふに頭腦ばかり使ふと惡魔になり、手足ばかり使ふと獸になる。そこで少しは讀書もやる。勞働もやる。」して見ると蘆花氏は少しばかり惡魔で、少しばかり獸なのであらうか。そこでその惡魔と獸とを除き去つた他の部分は、神か人間か。

○又同じ文中にこんな事が云つてある。「無論正式の農てなく、園藝と云ふ程爲行的でもない。たゞの野菜づくりだ」。これによつて見ると蘆花氏が田園に耕す人となつたのは、正式の農になつたのでもなく、さうかと云つて園藝を樂しむのでもない、たゞ何となき野菜づくりなのであらう。

○少しばかり惡魔にも獸にもなりつゝある蘆花氏、農にもならず園藝家にもならず、たゞの野菜づくりに甘んじて居る蘆花氏、その何れの方面から見ても、氏の生活は眞劍でなさゝうである。私達と同じく好加減な生活を送つて居る人らしい。トルストイに逢ひに行つたのも、主義の爲めに兄と絶交したのも亦糟谷村へ引込んだのと同じやうに、いづれを何れとも定めがたい、好加減な心持からなのであらう。「眞劍になれぬ」事は氏自らも云つて居るから、これは强ち私の偏見ではあるまい。

○實行の人としての蘆花氏を遠くから作品を透して見たゞ私は、大體以上のやうな印象を受けた。が、藝術の人としての蘆花氏に對しては、私は少なからぬ魅力を感ずる。「自然と人生」にせよ、「思出の記」にせよ、又「巡禮紀行」にせよ、私には矢張り明治の文藝的産物の中でも特に數へ上げるに躊躇しないだけの印象を與へて居る。氏は矢張藝術の人であると思ふ。

○蘆花氏の作品の中でも、就中私の愛誦する所は、氏の自然描寫である。自然描寫に於ては、氏は一種獨特の妙技を持つて居るやうに思ふ。これはつい近頃島村抱月氏とも話した所である。島村氏も矢張り蘆花氏の自然描寫に特長を認めて居られるやうであつた。

○併しその自然描寫も「自然と人生」や「思出の記」では、まだどこか文章の爲めに文章を書いて居るやうな所があつたが、「巡禮紀行」や獨歩に與へた書などに至ると、純粹の自然描寫になつて居る。活きた自然をそのまゝ描くと云ふ風になつて居る。殊に獨歩に與へた書の如きは、當代にも之れ以上に出るものがどれ程もないと思ふまでに、活々した自然が描かれて居る。

○「巡禮紀行」の中でもたしかゼルサレムの舊跡を描い

たあたりだつたと思ふが、あの邊の描寫などは實に自然描寫の模範とすべきものである。

○蘆花氏の自然描寫は、田山花袋氏などの平面描寫式とは違つて、一種の印象描寫である。觀察から成る分子よりは、感じから成る所が多い描寫である。随て自然を描いた中にも、氏の詩人的な情緖が一貫して流れて居る。而もその情緖たるや、氏の所謂宗敎的生活などよりも最つと復雜な、もつと高尙な情緖である。

○結局私一個には德富蘆花氏と云ふ人の宗敎的生活などゝ云ふ事は、一向に力强い印象を與へない。人としての蘆花氏を思ふ時には、徒らに茫漠曖昧の感しか起らぬ。併しながら藝術の人、自然人生を味ふ人としての蘆花氏を思ふ時には、捨て難く忘れがたい懷しさを覺える。随て蘆花氏がトルストイを訪ねに行かうが、田園へ引き込んで鍬を握らうが、そんな事は私にとつては左樣な根底的な感激を與へない。それよりも氏の自然を描寫する中に現はれて來る一種の藝術家的の心持が私には印象が强い。

○實行の人としての蘆花氏は己れを守るに賢なる人と云ふ外はない。それが氏の藝術とどれたけ深い關係があるかは、私には考へられない。繰り返して云ふ蘆花氏は藝術の人である。宗敎的の人でない。

△蘆花君

内田魯庵

○蘆花君の事に就て話せと云つても話すだけの材料を持つてをらぬ。二十年前、民友社に居た時分、編輯局で能く會つたが、到つて謙遜な、口數の少ない人だから餘り話した事も無い。忠實な、勤勉な、何事にも疎略てなかつた人だ。其頃の『國民之友』の泰西思潮(?)といふ欄は外國雜誌の抄譯で、頗る異彩を放つたもんだが、之は蘆花君の筆であつた。

○蘆花君は此欄で屢々トルストイに關するものを翻譯した。其内、重なるものは翁の飮酒喫煙論であつた。恐らく日本で最も早くトルストイを讀み且最も早く日

本にトルストイを紹介した人の中の一人であらう。

○トルストイのみで無い。蘆花君はツルゲーネフ、イプセン、ビヨルンゾン、ドストエフスキー等現代思潮の名篇大著を最も早く且最も廣く涉獵した。所謂新興文藝の先驅者の一人である。ゾラ、ドーデ、フローベル等佛國自然派の作も洩れなく涉獵した人だ。シカシ蘆花君は所謂自然主義よりはユーゴーやトルストイのやうなものに最も深く傾倒したやうだ。(たしかユーゴーの作を飜譯された事があつたやうに記憶する。)

○蘆花君が曾て告白した人道の爲めの文學なるものは大體に於て文學の最高目的であらう。しかしヒユーマニチーを狹く見たなら甚だ窮窟なものになつて或は文學と兩立出來ないかも知れぬ。トルストイが文學を呪ふは之が爲めて、此狹い意味から云つたなら人道の爲めの文學なんてものはツマラヌものになつて了う。トルストイの『復活』——あれは私も譯した事は譯したが、文學としては餘り多く價値を與へる事は出來ない。『復活』の價値は別に有る。文學としては『アンナ・カレニナ』や『クロイツエロヷ・ソナタ』の方が以上だと思ふ。夫と同樣に、蘆花君も亦——假に將來益々文學に力を効さるゝ事と見做して——餘りにヒユーマニチーなるものに累せられざらん事を欲する。尤もこんな事は十分御承知の蘆花君であるが、唯私の希望をいふだけだ。

○蘆花君の作は實は餘り讀んでをらぬ。最近の有名な『やどり木』を實は知らないのだ。『思出の記』は讀んだが、平たく云つて餘り面白いとも思はなかつた。シカシ今、考へると蘆花君は『思出の記』に於て自己を告白してをる。花袋君や藤村君の態度を十何年前に於て發表してをる。此點に於ても蘆花君は先覺者である。

○『不如歸』の藝術上價値は別として百版數十萬部を賣つて匹夫匹婦までも其名を諳んじ、英佛獨其他七八ヶ國語に飜譯されたは日本文學史上空前であらう。此點に於て蘆花君は何人よりも勝つて居る。兄蘇峯君も此世界的名聲に於て蘆花君に讓らざるを得ざるだらう。

○蘆花君の性格は私交が無いから精しくは知らぬが、

たあたりだつたと思ふが、あの邊の描寫などは實に自然描寫の模範とすべきものである。

○蘆花氏の自然描寫は、田山花袋氏などの平面描寫式とは違つて、一種の印象描寫である。觀察から成る分子よりは、感じから成る所が多い描寫である。随て自然を描いた中にも、氏の詩人的な情緒が一貫して流れて居る。而もその情緒たるや、氏の所謂宗教的生活などよりも最つと復雜な、もつと高尚な情緒である。

○結局私一個には德富蘆花氏と云ふ人の宗教的生活などゝ云ふ事は、一向に力強い印象を與へない。人としての蘆花氏を思ふ時には、徒らに茫漠曖昧の感しか起らぬ。併しながら藝術の人、自然人生を味ふ人としての蘆花氏を思ふ時には、捨て難く忘れがたい懷しさを覺える。随て蘆花氏がトルストイを訪ねに行かうが、田園へ引き込んで鍬を握らうが、そんな事は私にとつては左樣な根底的な感激を與へない。それよりも氏の自然を描寫する中に現はれて來る一種の藝術家的の心持が私には印象が强い。

○實行の人としての蘆花氏は己れを守るに賢なる人と云ふ外はない。それが氏の藝術とどれだけ深い關係があるかは、私には考へられない。繰り返して云ふ蘆花氏は藝術の人である。宗教的の人でない。

△蘆花君

内田魯庵

○蘆花君の事に就て話せと云つても話すだけの材料を持つてをらぬ。二十年前、民友社に居た時分、編輯局て能く會つたが、到つて謙遜な、口數の少ない人だから餘り話した事も無い。忠實な、勤勉な、何事にも疎略でなかつた人だ。其頃の『國民之友』の泰西思潮(?)といふ欄は外國雜誌の抄譯で、頗る異彩を放つたもんだが、之は蘆花君の筆であつた。

○蘆花君は此欄で屢々トルストイに關するものを繙譯した。其内、重なるものは翁の飲酒喫煙論であつた。恐らく日本で最も早くトルストイを讀み且最も早く日

本にトルストイを紹介した人の中の一人であらう。

○トルストイのみで無い。蘆花君はツルゲーネフ、イブセン、ビヨルンゾン、ドストエフスキー等現代思潮の名篇大著を最も早く且最も廣く渉獵した。所謂新興文藝の先驅者の一人である。ゾラ、ドーデ、フローベル等佛國自然派の作も洩れなく渉獵した人だ。シカシ蘆花君は所謂自然主義よりはユーゴーやトルストイのやうなものに最も深く傾倒したやうだ。(たしかユーゴーの作を飜譯された事があつたやうに記憶する。)

○蘆花君が嘗て告白した人道の爲めの文學なるものは大體に於て文學の最高目的であらう。しかしヒユーマニチーを狹く見たなら甚だ窮窟なものになつて或は文學と兩立出來ないかも知れぬ。トルストイが文學を呪ふは之が爲めて、此狹い意味から云つたなら人道の爲めの文學なんてものはツマラヌものになつて了う。トルストイの『復活』――あれは私も譯した事は譯したが、文學としては餘り多く價値を與へる事は出來ない。『復活』の價値は別に有る。文學としては『アンナ・カレニナ』や『クロイツエロヴア・ソナタ』の方が以上だと思ふ。夫と同樣に、蘆花君も亦――假に將來益々文學に力を効さるゝ事と見做して――餘りにヒユーマニチーなるものに累せられざらん事を欲する。尤もこんな事は十分御承知の蘆花君であるが、唯私の希望をいふだけだ。

○蘆花君の作は實は餘り讀んでをらぬ。最近の有名な『やどり木』を實は知らないのだ。『思出の記』は讀んだが、平たく云つて餘り面白いとも思はなかつた。シカシ今、考へると蘆花君は『思出の記』に於て自己を告白してをる。花袋君や藤村君の態度を十何年前に於て發表してをる。此點に於ても蘆花君は先覺者である。

○『不如歸』の藝術上價値は別として百版數十萬部を賣つて匹夫匹婦までも其名を諳んじ、英佛獨其他七八ヶ國語に飜譯されたは日本文學史上空前であらう。此點に於て蘆花君は何人よりも勝つて居る。兄蘇峯君も此世界的名聲に於て蘆花君に讓らざるを得ざるだらう。

○蘆花君の性格は私交が無いから精しくは知らぬが、

田園生活をして小トルストイを任じてる處は、批評すれば色々に批評されるだらうが、シカシあのまねは誰にも出來るといふわけで無い。殊に文藝に遊ぶものは、較やもすれば好事に流れる。デカダンに墮る、道樂者になつたり風流人になつたり通人になつたりナマケモノになつたりするが通例であるのに、兎に角、蘆花君の生活及び態度は異彩を放つてる。蘆花君の如きは、其作はドウでもいゝ、之から先き一生作らないでもいゝ、作れば猶ほ可なりであるが作なんぞはドウでもよしとして、唯其の敬虔な態度を偉なりとする。

△徳富蘆花氏

徳田秋江

（自然と人生）

▲徳富さんのものは、小説は「不如歸」を十年も前に一度讀んだきりで、その他には、「黑潮」も「思ひ出の記」も讀んでゐない。此の頃出た「寄生木」もまだ讀んでゐない。

けれども氏の雜著は「自然と人生」を始めとして、「靑山白雲」でも「靑蘆集」でも「トルストイ」でも繰返して讀んでゐる。――尤も「トルストイ」だけは少し讀む主意が違つてゐるが――中にも「自然と人生」は、私に取つて、殆ど精神の修養となつてゐる。その

▲「自然と人生」との初めに、私は次のやうなことを書き付けてゐる。

「蘆花氏の「自然と人生」は吾が爲に自然を樂む眼を供す。吾れの暦日なり吾れに無限の慰藉を與ふ」

何時書いたか、記憶せぬが、此の書は依然として、私に取つて、今日までもさういふ感じを起さしめる。丁度十年間私は此の書を座右に離さない。決して誇張ではない。單に座右に離さないばかりではない。夏など旅行する時には、屹度それを鞄に收めて行く。さうして十年來同じ手擦れた本である。十年の長い間、座右に離さない本と言つたら辭書と此の「自然と人生」だけである。私は、度々いふ故高山樗牛氏の書いたものが

好きて、氏の博文館から出した、小さい形の一文藝時評」だの「時代管見」なども、今だに持つてはゐるが、それは座右に離さないといふほどてはない。座右を離して、何處かそこらに放り込んてゐる。

▲けれども「自然と人生」はさうてはない。何かに屈託して、些と輕い本が讀んて見たくなつたり、または四季の變化につれて、フト自然の移り行くさまなどを意識したりする——自然の移り行くさまは、平常は忘れ勝ちてゐるものだが、——時などに急に此の「自然と人生」とを披いて見る。

▲例へば五月十日前後の時分に、フトそんなことを思ふと、徳富氏の「自然と人生」には、何樣なことを書いてあつたかと思つて披いて見ると、その五月十日の處に、

「暮春の野」と題して、

「青葉茂りて、村々緑に埋れ、蘆暢びて川狹ふなりぬ。云々」と書き起して

「夕風そよ吹き、殘照の影も次第に薄ふなりぬ。蘆は影と一つになり、そよ〳〵歌ひながら暮れ行く。何處の寺の鐘か杳々として野末を渡る。やがて地は青黒ふ暮れ、人家の障子に燈火紅に見へ初めぬ。」

と書き了つてある。此の一文を讀めば、成程五月十日の頃の「暮春の野」が、歴々と想像せられる。懐しう思ひやられる。極めて簡樸に、さうしてデリケートに描かれてある。

▲此の二三年來、自然を描くに妙を得た若い人も、大分出て來た。其等の人々も巧みは巧みだが、往々、自然そのものを寫生したといふよりも、自然に對した感じを書いて、その感じに入つた自然を描いてあるといふやうなのが少くない。然るに徳富氏のは、矢張り自然だけを書いてある。尤も中には

「大河」と題して

「子在川上曰、逝者如斯夫、不舍晝夜」

「上州の山」と題して、

「……日常生活の齷齪に立雜つて、然も心に挺然として無窮の天に向ふ偉大の人物は、實に斯くの如くあ

るてあらふ。

自分は上州に行く毎に、山が斯く囁く様に覺ふるのてある。」

など〻言ふやうに、氏一流の道德調の出てゐる處もある。單に自然を寫生したばかりではない。自然に就いての自分の聯想を抒してある。

▲人によつては、或は之れを古いといふ者があるかも知れぬが私はさうは思はない。唯美といふ方面からのみ自然を寫生したのも佳いものである。けれども自然を見て、人生を聯想するのも好いのである。道德調があるのが可いのである。事實として、自然――崇高な山とか、汪洋たる河海とかを見れば、一種の神祕な道德調の湧いて起るものである。私は德富氏の「自然と人生」とは、さういふ意味に於て、清高な作品であると思ふ。

成程、此の書を、私が始めて讀んだ時分に面白いと思つたものが、今日では、左程に思はれないのもある。それは氏の作が、時勢と離れたのか、――時勢が進んだのか、それともまた私の思想が移らうたのか、分らない。けれどもそんなことは「自然と人生」の全部にわづらひするものではない。

書き方が少し、今から見れば漢文句調なのが目觸りなやうでもあるが、再應考へ直して見て、矢張り漢文句調である方が可いと思つた。漢文句調なるが故に、キチツ〳〵と簡潔に思想が引締つてゐて、圓容の道德調とピッタリと合つてゐる。さういふ例は「吾家の富」などを見れば分る。

「家は十坪に過ぎず、庭は唯三坪、誰か云ふ、狹くして且陋なりと。家陋なりと雖ども、膝を容る可く、庭狹きも碧空仰ぐ可く、步して永遠を思ふに足る。……」

などがそれである。

▲全體蘆花氏には勿論、故の國木田獨步氏にも、斯ういふ調子の文章が多い。私は此の陶淵明思想といはふか、老莊思想といはふか、虛靈な思想も好きである。

近頃の自然の描き方が油繪又は水彩畫ならば、之れは東洋固有の墨繪である。此の墨繪に云ふべからざる趣味がある。

　けれども「自然と人生」の中に收めてある「雨後の月」などは無遠慮に言へば、幼稚な小説である。

▲私は、何度もいふやうに、惡毒い、小説よりも、——小説に惡毒い味がなかつたならば、その小説は心理の無いものと言はなければならぬ。小説に心理がなければ、その小説は人間を描き得たものとはいへない。さうして心理のある處必ず一種の厭な惡毒い味が付き纏ふ。——「自然と人生」のやうなものを好むのだ。こゝては入らぬことだが、私は田山花袋氏の書いたものだつて、單に自然を書いたものゝ方に、小説よりも、より多く興味を持つ。小説といふ立場からは、氏の作品に就いて云々もするが、花袋氏の作品の全體から云へば、自然などを書いたものゝ方が好きなのだ。全體小説といふものは、誰れのだつて、少し下卑たものだ。

▲その他、「青蘆集」中の「雨の水國」と「青山白雲」中の「水國の秋」などを、愛讀する。「水國の秋」の方は、書かれた時代も先であるが爲か、文章が少しあくど過ぎて幼稚だが、「雨の水國」は、流麗に淡彩に描かれてある。私は斯ういふ文章を好む。

　それから「青山白雲」の中の「恐ろしき一夜」は凄味を表はす筆力伴ふた文字だと思つてゐる。（五月廿日夜）

△徳富君の革命期に於ける書簡

木下尚江

徳富君の人物若くは作物に就ての評論と云ふ御差圖ですが、是れは小生に力に無いとですから謹て御容赦を願ひます、只だ小生は丁度同君の革命時期に親交を結びましたので、其頃の手紙を繰返へして見ると、同君の胸臆に打ち寄せて來た巨濤の叫が、文字の上に聞ゆるやうに感じます、其れを少々書き拔いて他の評論家の材料に供することが出來ますならば小生に取ては寧ろ光榮の事業と心得ます。

明治三十九年の九月と申せば、日露戰爭が終局を告げて、市中の交番燒拂のあつた月ですが、私共非戰主義者の本城「平民社」も矢張同じ月の末に瓦解を告げたのでした、本城の瓦解と同時に從來正統的社會主義即ち物質的社會主義に滿足の出來なかつた連中が、基督敎的社會主義と申すか、社會主義的基督敎と申すか、兎に角右樣の旗幟で、一と運動して見ると云ふとになり、「新紀元」と申す一小雜誌を計畫致しました。其れて九月の終か、十月の初かに、小生が德富君を其頃の原宿の寓居に訪問して、一臂の助力を求めたのです。所が同君は意外にも早速に快諾して下だされ、小說「黑潮」の後を書くと云ふとになりました。其時同君の意氣は盛なもので、「事に依ると全誌面を悉く頂戴するようなとがあるかも知れません」などゝ言はれましたが、十一月に出ました第一號に「小說黑潮第二篇を揭載するにつきて」自ら執筆された文章の中に、

「……今や我日本民は此の巨人を相手の奮闘より起ちて、砂を拂ひ、汗を拭ひ、而いて世界舞臺の中に立たんとす。彼の歴史は實に一時期を劃せるなり『新紀元』の此時を以て生るゝも、亦偶然にあらずと謂はむ歟。此誌上に於て拙著小說の稿を續くを得るは余の窃に喜ぶ所なり……」

とあるのでも略ぼ推察が出來ませう。

十月下旬に編輯者への手紙には

「原稿少々申譯ばかりに差上候、まづき事夥しきものに候。次回よりは今少し澤山にまとめ度候。」

とありましたが、既に長く內部に熟して居た革命が、此の黑潮の執筆に促がされて猛然眠から醒めたのでせう、「懺悔」と題した戰爭に關係のある一文章を雜誌へ送つて越されましたが、是れは直ぐ撤回されましたのて、揭載せずに仕舞いました。而して十二月七日付て、次の手紙が來たのです。

「小生の心頭に革命あり、靜に筆を執る能はず、新約聖書を讀きて、しばらく海邊に居はんとす、歸り來らん日黑潮の稿をつぐ可く候。」

同君は海へ行かずして、遂に山へ行かれました。翌三十九年の一月、同君には因緣深き伊香保の山から一封の郵便が同人の元へ參りました。當時の同君の心情を知るには、唯一偏强の資料と思はれますから、少々長いがお許を願ひたい。

「榛名山上より一筆啓上致候。小生も去八日の午後當地に著、神許し玉ふ間の假住居を定め候。今は大兄初諸兄に對して兄弟よと呼ぶを得る身となりたれど、昨年十二月の中旬までは、小生は猶恐ろしき罪人なりき。「懺悔」の一文を大兄に齎らし、其時迄は猶惡魔の配下を脱する能はざりき、然れども廣大無邊の父なり神の愛によりて、小生は生後三十八年、受洗後二十年にして復活し、寧ろ新に生るゝを得たり。最早天下何人に向ても自家の面を背向くるを要せず、至愛の神讃むべきかな。年として日として天恩にあらざるなきも、昨明治三十八年程神の御手の小生の上に加へられたるとなかりしを今に至りて痛感す、非戰論の一條、及家兄に對する態度の一變の如きは事小なるにあらざるも、小生が身に起りし革命の一端のみ、小生はよき加減の所にて踏みとまらんとし、切りあげんとしたるも、神は憐みて姑息の革新を許し玉はず、小生は追ひつめられ、追かけられ、探まれ、たゝかれ、水に洗はれ、火にて燒かれ、攻めて〳〵攻めぬかれて、終に全く神のものとなり了んぬ。肉は一たび去年の八月に富士山上に死し、ふるき吾は其十二月に到りて全く死し了りぬ。斯一ヶ月有餘の間、小生は時間空間の其何れにも生活せず、一切の外界は小生の爲に殆ど存在せざりき、今や斯渾沌の中より内なる新しきものは生れ出でたれども、外なる人は綿の如く疲れ果てたり、斯疲れも回復せざるべからず、内なる者の今少しく育つまでは默思を要す祈禱を要す、靜養を要す、故に小生は此山に上り來りしなり内的生活の一變と共に、小生の思想見解の上に全く一變化を來し、また來さんとしてあり、社會觀藝術觀其他一切の思想感情は醱酵又醞釀、今日の所未だ如何になり行くやを豫知する能はず、將來の行爲如何なる方針に向ふやも未だ豫知する能はず、愚痴の稿を續け得べきや、或は小說なるものを書くべきやも、今日に於て猶一の疑問たるを免れず。

然れども大兄よ、獨善は決して小生の希ふ所にあらず、人の子の叫は此山の上より聞え來るなり、靈に肉に救濟を促す聲は日々耳に徹す、此大切なる場合には、傷病兵も銃をとつて戰はざる可からずと云ふとなきに非ず、然れど大兄よ、戰の日は永し、小生は、神の小生の如き小なる器をも猶其榮の爲め用ひ玉ふべきを信ずるが故に、決して戰場に出るを急がざるなり、云々」

而して此の手紙の末に「小生は蘆花生の號を廢したり、今後は德富健次郎を以て、すべての場合に御呼被下度候」と書き添へてありました。

山居二た月、三月の初に不圖基督の足跡を聖地に踏みて見たく、トルストイ翁の顏が見たくなつて順禮の途に上ぼられた。

限なき生命(いのち)の水を尋ね來て
心の底に見出でつるかな。

斯くて德富君の革命は其の序幕を終へました。德富君がトルストイ翁を辭される時に、

「生は從來常に夢みて終に生活せざりき、生は今歸りて生活せんと欲す」

と云ふて、急いで歸途に就かれたと「順禮紀行」に見えますが、糟谷の村居は革命の第二幕に入られたものと見て可いでせう。

「生活」――人生の問題は必竟此の一語でせう。中央公論に「人生と勞働」を書き上げたまゝて永眠された綱島梁川君は「淨財問題」の爲めに最後まで苦惱されたらしい。「信仰即生活」「生活即信仰」綱島君は此の問題を遺して逝かれ、德富君は現に此の苦鬪を繼續して居られる。綱島君に淨財問題を提供せられた西田天香君は小生の師友でありますので、先月は一所に德富君を訪ふて半日遊ばして貰ひ、又た今月の梁川會では故人の肖像の前で共に一夕考へさせて頂きました。

德富君は小生と同じ年に生誕されたように思ひますが、小生は常に師友として同君を敬慕し、且つ同君の如き偉大なる人格と接近するとの出來た因緣を深く喜んで居ります。

△蘆花氏

正宗白鳥

「寄生木」を通讀した。文飾をしない粗雜な作品だが兎に角終まで―少し飛ばした所もあるが――この大冊を讀むことが出來た。種本にあまりに手を入れなかつたゞけに、主人公自身の眞相や周圍の人物を淺薄に現はしてゐる所が多いが、それを自分で深入して想像して見ると、血と肉の生々した實人生を窺ふことが出來る。觀察が幼稚でも眞面目に書いた一代の日記は尊い者だと思ふ。大木將軍や篠原中佐に對しては原作者の好惡の念が交つてゐて、觀察が正確でないらしい。二人とも型に入つてゐる。蘆花氏はもつと無遠慮に立入つて觀察したらよかつたらうと思ふ。だが、大木將軍の日常生活の一面はよく現はれてる所がある。一體に不如歸よりも眞實に富み、誇張と安價な同情の分子が少い。蘆花氏の作風のこれだけ異つたのも文壇の風潮の感化が多少あるのぢやないかと思はれる。

同じく日記を基礎とした花袋氏の田舎教師と比較して見ると兩方の主人公の性質はよく似てゐる。現代の青年に共通した感情や悲哀を親ふことが出來る。

△徳富健次郎氏

中村將爲

夏木立の青葉の匂ひのなつかしい、武藏野の片ほとりに徳富氏を尋ねたのは、もう二三年前になる。始めての日は雨であつた。

同じ年の秋の晴れた日、色づきかけた雜木林の裾に、白い芒の浪の光る頃にもお目に懸つた。

お目に懸かつたのはこの二度よりない。二度とも雜誌の方の用事で、何か書いて貰ふか、話して貰つて材料にしようと言ふ商賣根性を抱いて行つたのであつた。

其頃の事を思つて見ると氏の面影や周圍の景色は、今なほハッキリと浮んでは來るが、氏が何う言ふ人柄の人であるかは考へた事もないし、考へる事も出來ない。自分は氏に逢つて何か面白い話でも聞き出さうと腐心して居たゞけだからでもあらう。

たゞ次の事は言ひ得る。氏は可也氣六ヶ敷い人だとも後に聞いたが、少くとも自分にだけは非常に丁寧に親切にして下すつた所から、見ると氏は對手に依つて態度を變へる人であらう。それがワザとではなくとも、變へずには居られない人ではないか？トルストイなぞも無抵抗主義は唱へながら矢張一視同仁とまでは行つて居ないらしい。偏狹と言へば偏狹――そのやうた傾きが氏にあるのかも知れない。これは普通の人間は誰でも持つてる筈の傾きだと思ふ。

またあゝ言ふ閑寂な一種の農民生活を送りながら、なか〳〵都會生活にも興味を斷たない――世俗的の考も十分に持つて居られるやうである。始めての日、別れる時、雨傘を差して林間の小道の道しるべをして下さりながら『失禮のお尋ねだが君のサラリイは？』と言ふ問ひを懸けられた。形は隱者のやうでも、心は忙しい人であらうと思ふ。

作物で忘れられないのは「思ひ出の記」である。

△徳富蘆花先生

警醒社主人 福永文之助

○徳富先生の御本は私の處から澤山出して居りますし、又先生とは二十年も御交際を願つて居るのですから、お話することはいくらもありますが、あのお方は御自分の事を餘り御吹聽なさることを好まぬ人ですから、申上げてよいものかわるいものか一寸困ります。

○私は最初に「ゴルドン將軍」の傳をお引受けして出した。其時に一番私の感服した事は大抵の廣告には何々先生著といふ事があるが、私の出版物には先生といふことを附けて呉れるなといふ事をいはれた事である。それで今日でも私は先生といふ字を附けずに廣告して居るが、さういふ點は餘程面白いので、私が澤山の先生方の著書を引受けてやつたが、自分からさういふ事をいはれたのは徳富先生一人であるやうに思ふ。

○それから今度出版した「寄生木」を廣告するについては、實はあの位の大部な本ではあるし、又餘程久し振りでお書きになつたものであるから、大きな廣告を澤山出す積りで居つた。處が先生がいはるゝには、どうもあの本は内容が充分でないから餘り大きな廣告をするのは面白くない。それはよしたらよからうといふ事で、餘り大きな廣告をしなかつた。こゝらも他の著者とは一寸變つて居る。著者によつては本の賣れないのは廣告が小さいからだなどゝ本屋を尤めらるゝ方もないではない。徳富先生はさういふ事は決してない。

○又これは殆んど何處でもやる事で、いはゞ近來の流行といつてもよい位のもので、後に新聞雜誌に廣告する時は新聞雜誌に出た批評の中の最も褒めたものを取つて廣告する。私共でもさういふのを用ひたいのであるが、先生は矢張りそれはいかんといつてさせない。よくてもわるくても、コレは確かに全篇を熟讀して眞面目に本當に批評したものだと思はるゝのを用ひたい。一も二もなく褒めた批評は載せたくないといふ事であ

つた。

○それから之は本の事についてゞはないが、非常に謙遜な方で、私共の小僧などが參りましても、悉く何君〳〵といつて尊敬して使はれる。それから人の困難して居るものがあれば隨分お救ひなさるといふ事も私は始終認めて居る。御自分では非常に質素で、服裝といひお住居といひ決して贅澤をなさらない。又旅行でも汽車は必らず三等でなければ乘らないといふ風である。約束などの事は實に嚴重で、一寸でも話した事は必らず之を行ひなさる。先づ此位で御免を蒙りませう。

△德富蘆花氏に就いて

宮崎八百吉

一、余は同氏の天才を畏敬す。

一、余は同氏が文藝に由りて宗敎を傳へらるゝ誠意を多謝す。

一、余は同氏の雜誌「黑潮」の廢刊を甚しく遺憾とす。

一、余は同氏のトルストイ崇拜を尊敬す、然れども其のバウル崇拜に復歸せられんこと余の冀望して已まざる所なり。

右聊か貴問に應じ候謹言。（五月廿三日）

△德富蘆花氏

後藤宙外

德富蘆花氏を評せよとの瀧田樗陰氏のお頼みではあるが、拙者は未だ一度も蘆花氏にお目にかゝつたことは無い。その人柄も經歷も何も彼も知つて居ない。唯二三度何かの機會に書面の往復を致した位のことで、蘆花氏その人に對しては意見も說も立てやうがない。

併し蘆花氏の著書は隨分久しい以前から愛讀して居るし、出る物も出る物も大抵漏さず讀んだのである。特に氏のコブデン、ブライトなどの傳は拙者の青年期に少なからぬ感化を與へたらしく記憶する。此の點か

ら云ふと蘆花氏は拙者に取りては未見の一恩人と云はねばならぬ。

七

さて純文學の方面では彼の非常に名高い、『不如歸』とか『思ひ出の記』とか云ふものを通じて、幾分蘆花氏を知つてゐるのである。それから新聞雜誌などに傳へられる氏に關する逸話談片といふものなどに依つて、自分の心の中に朧ながら蘆花氏の面影を描いて居らんではない。

右の如き極めて乏しい材料に依つて拙者の造り出した蘆花氏なるものは、一種の奪ふべからざる確信の上に立脚する精神家だといふことは爭はれぬやうに思ふ。それ故世の所謂才子肌の文士のやうに流行に巧みに調子を合せ得る人ではない。餘り融通の利く方ではなかりさうに思ふ。その次には深く田園趣味を愛好する癖のある人だとは、著書を讀むと直ちに察しられる。必ずしも氏が現に晴耕雨讀主義を實行して居るといふ噂を聞かんでも其れは判じられる。

讀書、研學、著述といふやうな書齋的仕事も我等が生活の一面であり、人間活動の一部には相違ないのであるが、長年月の間、そんな事ばかり繰返してゐると、折々はもうチット直接に造化の秘機に觸れる道はないであらうか、もう少し人生の骨髓にぶッつかる捷徑はないであらうか。こんな書齋的仕事は仕事としては、何れもホンの豫備、傍觀、間接の仕事であつて、更に人間の爲すべき究竟的、實行的、直接的な仕事はないであらうか。かういふ自問自答は誰の胸にも起りさうなことである。蘆花氏の如きも此の種の問題に撞着せられたことが乾度幾度もあつたであらう。

筆よりは鋤犁を取つて勞働することは一層造化の秘機に觸れ得る一方便であると考へたことが無いであらうか。直ちに自然と面し、自然を相手に耕耘の事に從ひ、汗の味ひ、勞苦の甘味を探ぐる、其所に云ひ難い人生の眞諦に達する一捷徑があると考へたことがないであらうか。今の學者から云はせると、此樣な單純な幼稚なことを蘆花氏とも云はれる人が考へたか、どうか知らぬと、疑ふであらう。そして氏の價値を低くす

るやうに思ふかも知れぬ。勿論それは唯拙者の考へだけである。拙者自身は折々この様なことを考へるが故に、己れを以て他を恃るのは失禮ではあるが、其様こともあらうか、と想像して見たのである。

蘆花氏の著述を通じて拙者の知る限りでは、蘆花氏の思想は極めて穏かな、溫かな、そして清い理想の下に安立してゐる人であるらしく考へる。そして文章もアッサリはしてゐるが、却々人を引きつける一種の力があつて、清新な所が何處かにひらめいてゐる。そして何時も現代の民衆といふことを忘れずに筆を執る人であると考へる。先づこの位のことで、外にも細かなところを云へば云ふこともあるが、別に變つた觀察も意見もないから、これで御免を蒙るのである。

△德富氏

上司小劍

▲私は十年ほど前に德富氏の『思ひ出の記』を愛讀した。名高い『不如歸』はそれから後に讀んだ。けれども『不如歸』には左程感心しなかつた。

▲『黒潮』も讀んだ。それが星亨を主人公にしたものだと云ふことを聞いて頗る好奇心を動かした。伊藤、井上、大倉などの人物が出て、東老人と云ふ空想の產物と議論するのを面白いと思つた。

▲今でこそ『不如歸』が時代の道德に阿諛してある厭味や、『黒潮』が藝術化されてゐない點が直ぐ分る、けれど、あれの出た時はそんなことが明瞭に分らないで、只面白いものと思つて讀んだ。但し『不如歸』だけは何うしても私の性分に合はないものと見えて、何んとなく厭やであつた。

▲其の後の德富氏の著作は全く讀まない。巡禮紀行とか云ふものなぞは本の形を見たこともない。

▲德富氏がトルストイ翁の崇拜者であると云ふことは知らぬものもないし、また德富氏が藝術上の手腕に於て遙にトルストイ翁に及ばないと云ふことも今更述べる必要はないが、德富氏の娑婆氣はトルストイ翁の娑

婆氣に比して、同じやうな遣り口ではありながら、日本人だけに德富氏の方が淡然としてゐる。

▲私はトルストイ翁の無政府主義的意見を讀む毎に、たとへ翁の云ふやうに今の世界が罪惡の機關を中心として築き上げられてゐるものとしても、「そんなことは何うでもよい」と云ふサッパリした心にはなれないものかと思ふ。いゝ年をしてヤキモキと法界坊の出來ソコナイのやうに、執念深く咒咀の聲を發するのは年甲斐もない老爺だと思ふ。

▲其處へ行くと、德富氏のは横着なのか、冷淡なのか知らんが、トルストイ翁と同じ思想の根底から芽を出しながら、翁ほどに執着がない、サッパリしてゐる。

▲德富氏が國民新聞にゐた時、編輯局を擧つて議會だの、解散だのと騷いてゐる中を、獨り冷然と机に凭れて瞑想に沈み、果は自身の事務を拋棄して散歩に出て、政治家や愛國者の狂熱を餘所に、土橋邊から徐に赤い暮雲を眺めてゐたと云ふ話がある。それを聞いた時私は德富氏が好きだと思つた。

▲併し其の後德富氏が『勝利の悲哀』と云ふ文章を作つて、熱心にそれを朗讀して廻はつたと云ふことを聞いた時は何んだかまた少し厭やになつた。要するに私は禪宗坊主の中に見るやうな淡然冷然たる人間が好きなのだ。

▲トルストイ翁もあんなことを云ひながら、なか〳〵財産を持つてゐると云ふことだし、德富氏にも矢張り財産があると云ふ。何事も金があつてからの道樂ですね。

チフスの流行と病毒に打勝つべき身體の養成

醫學博士　二木謙三

近頃はチフスが非常に流行して居る。でチフスの事から亘つて、一體人間が病毒及び外界の障害に打勝つて行くにはどうしなければならぬか。どういふのが理想的の身體で、其養成法鍛錬法は如何といふ事を話

して見やうと思ふ。

先づチフスの流行といふ事はどういふ事かといふに、チフスといふ黴菌が人間の身體に入つて、人間の身體に病的作用をなし、或場合に於ては人間の生命を奪ふ、此黴菌は病人から漸次に健康者に傳染る、其傳染り方が非常に激しいといふ事である。

抑〻此チフスなる黴菌は如何なるものかといふに、極々微細なもので譬へて言へば髮の毛の尖を千位に割いた程のものである。そして其形――太さと長さとの關係――は恰度小指のやうなもので、其周圍から八本乃至十二本の足を出し、辨毛と名づくるものを出して活潑に泳いて居る。何が故にそんな小なるものが恐ろしいかといふに、繁殖力が非常に強いからである。然らば一分間に幾萬幾千萬に繁殖するかといふにさうではない。廿分かゝつて一個のものが二個になる。一時間に三度しか分殖しない。一日廿四時間の間に僅かに七十二回しか分殖しない。さういつて了へば何んだ大變鈍ろい繁殖の仕方でないかと訝る人もあらう。處がさうでない。二十分間に一回しか分殖しないが、次の二十分間には分殖した他の一つの黴菌も亦分殖する。其次の二十分間には其分殖した黴菌も亦各々更らに分殖する。即ち一が二となり、二が四となり、四が八となり、八が十六となるといふ風に幾何級數的に殖えて行く。斯くして一晝夜に殖える數を數學の公式にあらはせば、一に二を乘けたものゝ七十二乘$(1\times2)^{72}$になる。之を數ていつて見れば、驚く勿れ二十二萬八千刧餘。十露盤の桁は二十一しかないから此數は十露盤に載り切らない。即ち二二八の次に丸が十九ついて二十二桁の數になる。僅か一晝夜の間に一つの黴菌が十露盤に載り切らない數になり其次の一晝夜には其二十二萬八千刧の一つ〳〵が、又各々二十二萬八千刧になる。昔大久保彥左衞門が德川家康に向て六疊の間の疊の隅に一文錢を置いて其れを隅々毎に倍づゝにして下さいといつた所が、家康はそれは安い事だといつて勘定して見ると大したものになつたので流石の家康も驚いたといふ話がある。成程六疊の隅々といへば二十四ある

から一乘ける二の二十四乘て凡そ十何萬圓になる譯だ。幾何級數的に殖えるもの丶恐るべきは其通りて、チフス菌などは實にそれて殖えて行くのてある。而して世界の中に存在するチフス菌の數は無數てあるから其繁殖の甚しい事は殆んど想像も及ばぬのてある。

然らば此チフス菌は何處から人間に入り込むかといふに口から入る。禍は口より出づといふが、チフス菌は口より入る。口からして口腔を通つて腸に入り、血液に入り、脾臟、肝臟、淋巴腺、骨髓等て繁殖して再び血液に逆流して來る。チフス菌も一定の數に達しなければ人體に病的作用を及ぼさぬが、それが、一定の數に達すれば熱が出て三十九度から四十度以上にもなる。舌が乾き、腸の粘膜を刺戟して毒素を注ぎ込む。それが激しくなると腸出血を起し、又腸に穴をあけ腸穿孔から腹膜に入り急性腹膜炎を起して死に至らしめ、或は心臟に入つて心臟痲痺、腦に入つて腦症狀、脊髓に入つて脊髓腦膜炎等を起さしめる。

之を防ぐには黴菌の附かぬものを喰べればよい。黴菌の附かぬものといへば清潔に取扱つたもの、一言にしていへば煮沸したもの、即ちよく／＼煮たものてある。一囘煮たものても之を冷まして不潔にすれば同じ事てあるから、さうしない注意を要する。最もいけないのは生のもの、生水、さしみ、生な菜、生豆腐等はいけない。心太の如きも甚だ宜しくない。又生なものてなくても偶然に食物に入つて居る場合がある。どういふ場合かといふに、患者の所て菓子を喰べる、其菓子から病氣が傳染る、又疊に手をついてお辭義をし、其手て物を喰べる、そして病氣になるといふ事もある。

一體黴菌が何處から出るかといへば、大抵患者の大便と小便から出る。時としては患者の吐いた咳唾から出ることもあるが之は常てはない。女は乳から出ることもある。そして人間は其大小便から感染して病氣にかゝる。人間が大小便を甞めるものかといふ人があるかも知れないが、人間は誰てもみんな甞める。笑つちやいけない、甞めた證據があるから駄目だ。何が證據

かといふに、誰の腸にも大腸菌といふものがある。之れは生れつ子にはない。が三日目位になればもうチャンど大腸菌がある。大腸菌は糞便の中にあるもので三日目になれば、父か母か或は下女か乳母のお尻から出た糞便を喰べさせれて居る。おれは大小便などを喰べるものかと威張つたつて、一度は必ず喰べた證據があるし、又常に知らず〳〵の間に喰べて居るのだ。

此大小便の外に、も一つチフスの黴菌を傳播するものがある。其れは蠅と鼠てある。蠅が糞便にとまつて、そして食物に飛びつく。之れが實に非常な働をするものて、患者の糞便にとまつた蠅を捉へて、黴菌の培養器の中に入れると、其歩く足跡の形に驚くべき多くの黴菌を殘す。又蠅よりも小なる羽虫も同じ働きをやる。又鼠の尾は黴菌傳播に非常の働をなすもので最も恐るべきものである。又一度チフスに罹つた人は、癒後數週間位は其尿から黴菌を出す事がある。百人の中の三十人位はあらう。針の尖につく一滴の小便――人間は一日一リツトル即ち千グラム以上の小便を排泄するから、其千分の一の又千分の一にも當らぬ程の小量の小便――をとつて見ても尙一の集落を作つて其中に二十二萬八千刧の黴菌がある。

然らば人間は到底チフスに罹らぬといふ保證が出來ぬだらうといふ問を發するだらうが、其れは尤もてある。人間の身體には大抵黴菌が入つて居る。近頃流行の結核の黴菌なども持て居る人も多からう。然しながら人間が黴菌に侵されゝば必らず病氣に罹るかといふにさうてはない。少くとも一定の潜伏期がある。その潜伏期はチフスに於ては十四日てある。其間は患者も知らずに居る。結核菌は凡そ十年、或は其れより早い事もあるが、又其れ以上の事もある。多くの結核患者は産れてから間もなく感染し、その爲めに此子は弱い〳〵といはれ、十三四から結核を起し、本當に甚くなつて血を吐くやうになるのは二十前後てある。それから又癒つた樣に見えたりして二十五六か七八になつて死ぬ。一度黴菌が身體に入れば、身體と黴菌との戰爭が初まる。其間に身體の方が強ければ病にかゝらずに

る濟み、弱ければ負けて病氣になる。身體さへ强ければ結核にもレプラにも勝つことが出來る。つまり身體て以て病毒を征服して了ふのである。

そこて人間の身體の中て病毒を打殺すものは何かといふに第一は流れて居る血液の中に入つてゐる處の溶解性物質て、之が黴菌を殺して溶かして了ふ。第二は身體の中にある細胞が、其活力を以て黴菌を喰ふて了ふ働て之を喰菌現象といふ。人間の血液の中にある白血球は其一つ〳〵が黴菌を幾つも喰ひ、其喰ふた黴菌の周圍に消化液を分泌し、黴菌を溶して了ふ。此働きは實に强いものて一個の白血球が十個乃至二十個の黴菌を喰ふ。而して此白血球なるものは人間の身體の中に澤山ある。どの位あるかといふに、針の尖て突いた所から流れ出る粟粒よりも小なる一滴の血は五百萬の白血球がある。此一滴の血液に五百萬もある白血球と一晝夜に二十二萬八千刧も繁殖するチフス菌と大戰爭を初めるのてある。

黴菌と人體との戰爭の有樣を、簡單な分り易い例て以て說明すれば、例へば根太が出來たとする。それは黴菌が皮膚の中に入り、毒素を分泌して人體を中毒せしめんとするのである。初め血管が膨れて來るので、之を掻き破る。其腫れ方が一層激しくなつて來る。それは白血球がそこに寄り集つて來て戰爭を初めるのだ。第一の圍み、第二の圍み、七重八重に圍んで黴菌を撲滅せんとする。黴菌は外界から榮養物を取るのであるから、白血球に圍まれると其途を杜絕される。即ち外側の硬く膨れるのは黴菌を包圍攻擊するのである。そこて黴菌は自己の毒素を分泌して細胞を攻擊する。細胞は毒素に中つて死ぬ。細胞は其本分を盡す爲めに自ら毒素に近づいて喜んで討死する。そして黴菌を征服し終れば細胞は元の位置に退却する。寧ろ凱旋する。そして其死骸を處分する爲めに皮が破れて膿が出る。膿といふものは實に皆白血球と黴菌の死骸てある。其治療の際に醫者が切開するのは戰爭の際に、餘り戰爭が激しくならぬやうに敵も味方も排除するのてある。即ち人工を以て天工を補ふのである。醫術を稱

して仁術といふのも此處だ。然し病氣によつては人力を以て奈何とすることが出來ぬ場合もある。例へばペストの如きはそれだ。ペストは潛伏期も短く、豫防準備がつかぬ中に猛烈にやつて來る。然し人間は其ペストにさへ打勝つ力がある。敵強ければ味方にも亦之に應ずる策がある。それには平常から身體を鍛へて置かねばならぬ。例へば疵に負ける人と負けない人とある。疵に負ける負けぬは連鎖狀球菌といふものに關係するので黴菌とは違ふが、兎に角身體の鍛へ方に關係する。百姓などはなか／＼疵に負けぬのは普段から鍛へて居る爲めだ。茲に一つの面白い例があるが、東京から三四里を隔てた田舍で、男の子が子守をして居た。其子が負ぶつて居た子を下において柿の木に上つて其實を取つてゐた。處が其枝が折れて下の枝で横腹を貫いて血がダク／＼と流れた。それにも拘らず子を抱いて家に歸り、子を投げるや否や息が絶えた。醫者を呼んで戸板に載せ東京まで運んで來た。それは夜の十一時頃で怪我をしてから數時間經つた後で、腸が外に出て戸板にくつついて居た。そして其上には僅かに半紙か何かを一枚かけてあつた。もう誰が見ても助かる見込がないものであつたが、氣休めの爲めに腸を腹に收めて縫うて見たら、不思議にも息を吹き返して生き歸つた。そして化膿さへもせずに癒つた。こういふのは非常に身體の抵抗力が強い爲めてある。

細胞の喰菌力、血液の溶解性等が強ければ從て人間の病毒及び外界の障害に對する抵抗力が強くなるのであるが、然らば細胞は何でも喰ふかといふになか／＼さうはいかぬ。白血球の好きなものと嫌ひなものとある。好きな味が附いて居れば喰ふしさうでなければ喰はない。即ち選擇の力がある。白血球は自分で動いて黴菌を取圍んて喰ふ、喰つて了へば居眠かなんかして居るといふ風だ。光線をやると嫌て暗い方に隱れる。細い竹筒の中に好きものを入れて動物の身體などに刺すとドン／＼入つて來てそれを喰ふ。我々人間が好きなものを食ふのを意志と名くるならば白血球にも確かに意志がある。慾と名くれば白血球にも慾がある。若

し嫌なものを喰はぬのを制止の力とすれば白血球にも其制止力がある。我々の身體の働きは要するに細胞の働てある。細胞は吾々の縮寫々眞である。我々は細胞の擴大寫眞てある。我々の筋肉は千鈞を上げる。それは槓杆の力てある。支點と重點の間を摘んで上ぐるは筋肉の力である。此筋肉を十本に割けば十分の一、千本に割けば千分の一となる。一本の麻の纖緯が集つて麻絲となり、それが又集つて綱となる。つよき綱を作るにはつよき纖緯を以てしなければならぬ。細胞の全身體に對する關係も亦之と同一てある。つよき細胞あつて初めてつよき身體ある。故に人體の研究をなすものは必らず細胞の研究を初めねばならぬ。

抑々此細胞なるものは一個々々別々に働くものにはあらずして全體的に働くものてある。一個の人間にはいろ／＼な働がある。愛國心もあり、孝心もあり、又泥棒心もある。此等の人間が皆別々に動いて居るが、それが又國家といふものに統一せられ、國家の中にあつては全體的統一的に働いて居る。然らざる國家は國家として非常に弱い。細胞の人體に於けるは實に忠實無比なる國民ともいふべきもので、皆己れを忘れて、全體の爲めに働く。例へば胃や腸に於ける細胞は口から入つたものを一生懸命に消化する。自分から消化する物質を出して米を砂糖にして食ひ、肉をペプトンにして食ひ、それを全部後ろの血液の中に送る。恰度取つたものを少しも私せずして全部政府に收むるといふ働をなす。一ミリメートル立法に幾百萬といふ割合で胃の周圍に並んで居る細胞が總て同一の働をなす。胃に瓦斯が溜るといふのは、胃が膨れて瓦斯の爲めに胃の細胞が半分の働しか出來ないやうな狀態になるのて、それて消化力が衰へるのてある。血液は自分の流れの中に胃や腸から來たものを運んで肝臟に來る。そこにも亦一團體の細胞があつて砂糖やペプトンに同化作用をやる。それを取集めて人間の蛋白質が出來る。そこてそれが本當の人間の身體――本當の政府の所有物となる。恰度日本政府のスタンプを捺したやうなもので、其人の身體の中丈けに通用することになる。所

臓にある幾億萬の細胞は只それのみを其本職として居る。そして之を心臓に送る。心臓は譬へば郵便局のやうなもので、之を身體の各部に運送する。心臓の一晝夜に働ぐ力は常陸山や梅ヶ谷が十人集つた所で到底比べものにならない程である。心臓は先づ第一番に之を肺に送るが、肺は酸化作用をやつて血液を温かくする。血液は肺からして全身を廻つて臓器〱に必要なものを與へ、不必要なものを又擔いで歸る。筋肉が疲れるとか足が疲れるとかいふのは其處に排泄物の溜まつた爲めであるが、夜寢て起きると、朝癒つて居るのは血液が滋養物を送つて排泄物を取去つて來る爲である。譬へて見れば汚穢屋のやうなもので、臭いものを持て行てお米を持て來ると同じだ。そして大腦は頭の眞中に座つてゐて總ての機關を支配する。いはゞ内閣とか政府とかに當る。神經を通じて盛んに電信電話がかゝつて來る。針一本觸れても直ちに中心に報告して來る。さうすれば直ぐ兵隊を出せといふ命令を出して白血球がドン〱働いて行くといふ事になる。人間の身體を研究すると實に整然たる働をなすもので、只驚くより外はないのである。

そこで如何にすれば身體がよくなつて、總ての病氣に負けぬやうになるかといへば、一つは肉體の養成を心懸け、一つは精神の修養を心懸けねばならぬ。つまり百姓もエラクなければならず、内閣もエラクなければならぬといふ事になる。若し國家の中で一人でも私するものが出來るとか政府の命令に從はぬものが出來るとかすると國家が弱る。身體に於ても細胞に命令に從はぬものが出來ると癌腫といふものが出來る。癌腫といふものは細胞が自分の職分を奉ぜずして勝手に働く時に出來るものである。例へば五本の指は何故こういふ形をして居るかといへば、それは手に能働と靜止との二つの働がある爲めである、胃や腸などの細胞にも此二つの働があるのであるが、其働を守らぬものがあると、癌が出來る。そして癌は多く細胞の組織の移り目、即ち食道と胃との繋がり目といふやうな處に出來る。外國では暴徒は國と國との境目に出來る。露

し様なものを喰はぬのを制止の力とすれば白血球にも其制止力がある。我々の身體の働きは要するに細胞の働てある。細胞は吾々の縮寫々眞てある。我々は細胞の擴大寫眞てある。我々の筋肉は千鈞を上げる。それは槓杆の力てある。支點と重點の間を摘んて上ぐるは筋肉の力てある。此筋肉を十本に割けば十分の一、千本に割けば千分の一となる。一本の麻の纖緯が集つて麻絲となり、それが又集つて綱となる。つよき綱を作るにはつよき纖緯を以てしなければならぬ。細胞の全身體に對する關係も亦之と同一てある。つよき細胞あつて初めてつよき身體ある。故に人體の研究をなすものは必らず細胞の研究を初めねばならぬ。

抑々此細胞なるものは一個〳〵別々に働くものにはあらずして全體的に働くものてある。一個の人間にはいろ〳〵な働がある。愛國心もあり、孝心もあり、又泥棒心もある。此等の人間が皆別々に動いて居るが、それが又國家といふものに統一せられ、國家の中にあつては全體的統一的に働いて居る。然らざる國家は國家として非常に弱い。細胞の人體に於けるは實に忠實無比なる國民ともいふべきもので、皆己れを忘れて、全體の爲めに働く。例へば胃や腸に於ける細胞は口から入つたものを一生懸命に消化する。自分から消化する物質を出して米を砂糖にして食ひ、肉をペプトンにして食ひ、それを全部後ろの血液の中に送る。恰度取つたものを少しも私せずして全部政府に收むるといふ働をなす。一ミリメートル立法に幾百萬といふ割合て胃の周圍に並んて居る細胞が總て同一の働をなす。胃に瓦斯が溜るといふのは、胃が膨れて瓦斯の爲めに胃の細胞が半分の働しか出來ないやうな狀態になるのて、それて消化力が衰へるのてある。血液は自分の流れの中に胃や腸から來たものを運んて肝臟に來る。そこにも亦一團體の細胞があつて砂糖やペプトンに同化作用をやる。それを取集めて人間の蛋白質が出來る。そこてそれが本當の人間の身體――本當の政府の所有物となる。恰度日本政府のスタンプを捺したやうなもので、其人の身體の中丈けに通用することになる。所

臟にある最優秀の細胞は只それのみを其本職として居る。そして之を心臟に送る。心臟は譬へば郵便局のやうなもので、之を身體の各部に運送する。心臟の一晝夜に働く力は常陸山や梅ヶ谷が十人集つた所で到底比べものにならない程である。心臟は先づ第一番に之を肺に送るが、肺は酸化作用をやつて血液を溫かくする。血液は肺からして全身を廻つて臟器〱に必要なものを與へ、不必要なものを又擔いで歸る。筋肉が疲れるとか足が疲れるとかいふのは其處に排泄物の溜まつた爲めであるが、夜寢て起きると、朝癒つて居るのは血液が滋養物を送つて排泄物を取去つて來る爲である。譬へて見れば汚穢屋のやうなもので、臭いものを持て行てお米を持て來ると同じだ。そして大腦は頭の眞中に座つてゐて總ての機關を支配する。いはゞ內閣とか政府とかに當る。神經を通じて盛んに電信電話がかゝつて來る。針一本觸れても直ちに中心に報告して來る。さうすれば直ぐ兵隊を出せといふ命令を出して白血球がドン〱働いて行くといふ事になる。人間の身體を研究すると實に整然たる働をなすもので、只驚くより外はないのである。

そこで如何にすれば身體がよくなつて、總ての病氣に負けぬやうになるかといへば、一つは肉體の養成を心懸け、一つは精神の修養を心懸けねばならぬ。つまり百姓もエラクなければならず、內閣もエラクなければならぬといふ事になる。若し國家の中で一人でも私するものが出來るとか政府の命令に從はぬものが出來るとかすると國家が弱る。身體に於ても細胞に命令に從はぬものが出來ると癌腫といふものが出來る。癌腫といふものは細胞が自分の職分を奉ぜずして勝手に働く時に出來るものである。例へば五本の指は何故こういふ形をして居るかといへば、それは手に能働と靜止との二つの働がある爲めである、胃や腸などの細胞にも此二つの働があるのであるが、其働を守らぬものがあると、癌が出來る。そして癌は多く細胞の組織の移り目、即ち食道と胃との繋がり目といふやうな處に出來る。外國では暴徒は國と國との境目に出來る。[illegible]

獨の國境とか獨佛の國境とかに住する國民はなか〳〵治めにくい。アルサス、ローレンの如きは其好適例である。それと同じ理屈で、組織の移り目にある細胞は動すれば全體の爲めに働かずして自分獨りの爲めに動く。さうすれば其れが癌になつて顏色蒼白となつて形容枯槁終に生命を失ふといふ結果を見る。人體は譬へていへば、完全なる專制君主制といふ事も出來、又完全なる共和政體といつてもよいので、一つ〳〵の細胞は皆愛國心に滿ち充ちた忠良無比の國民といつてもよいのである。

人體を健全にするには細胞をよくしなければならぬといつたが、如何にして細胞の力をよくするかといふに、之も亦吾々の教育と同じ事で慣らさねばならぬのである。よく風邪にかゝる人は綿やフランネルを頸に卷いて咽喉を保護することよりも、喉頭を風に晒して、風邪に負けないやうに喉頭を慣らさねばならぬ。綿やフランネルで保護しても、それを取れば直ぐ又風邪にかゝつて何にもならぬ。さういふ人は初めは室内で靜かに呼吸をして、段々椽側に出て、庭に出て、終に野外で深呼吸をして喉頭を丈夫にすることを慣らす。又皮膚の弱い人は冷水摩擦をやり、段々氷の中にも入る位にする。眠い人は徹夜の稽古をし、疲れ易い人は身を勞働に慣らさねばならぬ。田舍の人は田に入つて外界の障害に當るやうに慣らされて居り、其れが子にも孫にも遺傳して居るから容易に外界の障害に負けない。身體を鍛へるには決して富家の子弟の如く保護的にしてはいけぬ、百姓の子の如く抵抗的にすべきである。立つときは直立不動、二十四時間位もぢつとして立つて居ることが出來、座る事は端然正座、一晝夜の間ぴくとも動かぬ位の事を稽古しなければならぬ。又一日位飯を食はぬ練習もして見ねばいかん。饑饉の多い國に住む人民は數日の間平氣で斷食をして居るものが多い。肝臟にはグリコーゲンといふものが貯蓄されてあるから慣らし樣によつては斷食は左程六つかしいものでない。武士は喰はねど高楊枝の意氣込は何人と雖も持たなければならぬ。頭腦の使ひ方でも、

時々過度に使つて見て萬一の時に慣らして置かねばならぬ。

又精神の方の鍛へ方をいふと、第一番にいけない事は恐れといふ事てある。恐れといふ事が最も精神の力を鈍らす。精神の力が二つに分れて相爭ふ。或事をなさんとする時に細胞がドン〱進行して行く、一度恐れを抱けばそれが總て退却する。そして無益に精神の力を減削する。戰陣に於ても大將恐れて號令を下せば士卒は決して進まぬ。試驗場に於ても、少し恐を抱けば氣がセカ〱して決してよい答案は書けぬ。精神を養ふは恐れを抱かぬに限る。然らば恐れを抱かぬといふことは只無鐵砲にやつつけろといふ事かといふに決してさうてはない。恐れを抱かぬには抱かぬ工風が必要てある。

物に恐れぬ工風とは何ぞ。只どんじまりの處に心を置くといふ事てある。どんじまりの處に心を置くといふ事は如何なる事か。戰爭に負ければ死ぬといふ事てある。試驗をやり損ねれば落第するといふ事てある。商買て失敗すれば無資本になるといふ事てある。身を捨てゝこそ浮ぶ瀨もあれといふのは此處の事てあつて、心を此どんじまりの處に置てこそ、初めて戰爭に於て生き、試驗に及第し、商買には儲けるといふ事になる。只世人此決心なき故に徒らに喧囂して終に何等の得る處なきものが多いのてある。要するにどんじまりの處に決心を置くといふ事は成功不成功の基をなすのてある。否、獨り成功不成功の基てあるのみならず、其決心は精神上に非常の勇氣を與へる。遣れ〱といふ心の命令は全身の細胞を鼓舞振興して精神力が十倍百倍する。斷じて行へば鬼神も之を避くといふは此事てある。

重ねていふ、細胞は人間の縮少圖てある。人間は細胞の擴大圖てある。チフスの黴菌の繁殖力は恐ろしい。然し人間の細胞の働も亦甚だ強い。此細胞の力を平常から養つて置けばチフスの黴菌に侵されても之を征服して了ふ。それには一つは肉體から養ひ、一つは精神から養ふ。肉體から養ふには身體を抵抗的に慣らして、

病毒及び外界の障害に打勝つことを心懸くる。精神的に養ふには、どん底の處に最後の決心を置いて物に恐れぬ工風をする。此二つの工風あつて初めて積極的に健全なる身體を作ることが出來、積極的に健全なる身體あつて初めて病毒及び外界の障害に打勝つことが出來るのである。（完）

右は二木博士が在京秋田學生の寄宿寮たる秋田育英館生の爲めになしたる談話を筆記したるものなるが、今後本誌の爲めに時々人體に關する談話をせらるゝことを承諾せられたれば、博士の該博にして且つ多趣味なる研究は本誌讀者を益すること極めて多かるべきを信ず。文中若し誤あらばそは筆記者の罪なり（編者しるす）



▲謹んで請ふ▼

市川女寅閣下

改めて

市川門之助閣下となる

願くは閣下の卓抜非凡なる伎藝を觀照し名優に對する敬意を以てせられん事を

青柳有美

東京高等商業學校教授花輪虎太郎先生著

英語擬試驗問題及解釋

（定價金五拾錢　郵税六錢）

反省社編輯

空文年表

（一名かきいれ年表）

（定價金五拾錢　郵税八錢）

中央公論發行所　反省社

德富健次郎氏著作書目

小説 寄生木 第廿四版
菊判千百頁
定價上製金貳圓
並製一圓五十錢
小包料十二錢

小説 黒潮 第十八版
四六判四百頁
定價金四十錢
郵稅金六錢

順禮紀行 第七版
菊半截五百頁
定價金五十錢
郵稅金六錢

ゴルドン將軍傳 第四版
四六判四百五十頁
定價金五十錢
郵稅金六錢

東京京橋區尾張町二丁目
警醒社書

此廣告により御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

新刊 社會と人道

家庭學校校長 留岡幸助先生著

菊判八百頁 定價金貳圓 小包料十二錢

本書凡そ社會、教育、慈善の事述べざるなく、述べて肯綮に當らざるなし蓋し本書は先生が持論の大系にして明治年間の社會觀史なり以て時代の推移を知るべく社會改良の要義を知るに於て遺憾あるなし

新刊 人生と文學

文學士 内ケ崎作三郎先生著

四六判四百五十頁 定價金八拾錢 郵稅八錢

論あり美文あり紀行あり傳あり雄大なる學士の健筆は遺憾なく發揮せらる沈滯せる現文壇の新聲なり健全なる文學を愛する者には必讀の書なり

新刊 スピノザ研究

文學博士 波多野精一先生著

菊判クロス美本 定價金七拾錢 郵稅八錢

近代哲學の大立物たるスピノザの汎神論に精細なる批評と鋭利なる解剖とを施したる新研究なり

賜天覽 高山彦九郎

坂本箕山先生著

菊判三百五十頁 定價金七拾拾 郵稅八錢

最正確の高山傳は本書なり珍史料と之を叙する妙文は本書をして小説以上の興あらしむ

（中付の三）

現代文壇の最大產物
嚴肅なる人生の批評

坪内雄藏
内田貢
池邊吉太郎
編輯

東京朝日新聞社發行

菊判八百頁
コロタイプ肖像一面
挿畫五面入
正價金二圓三十錢
郵税金二十二錢

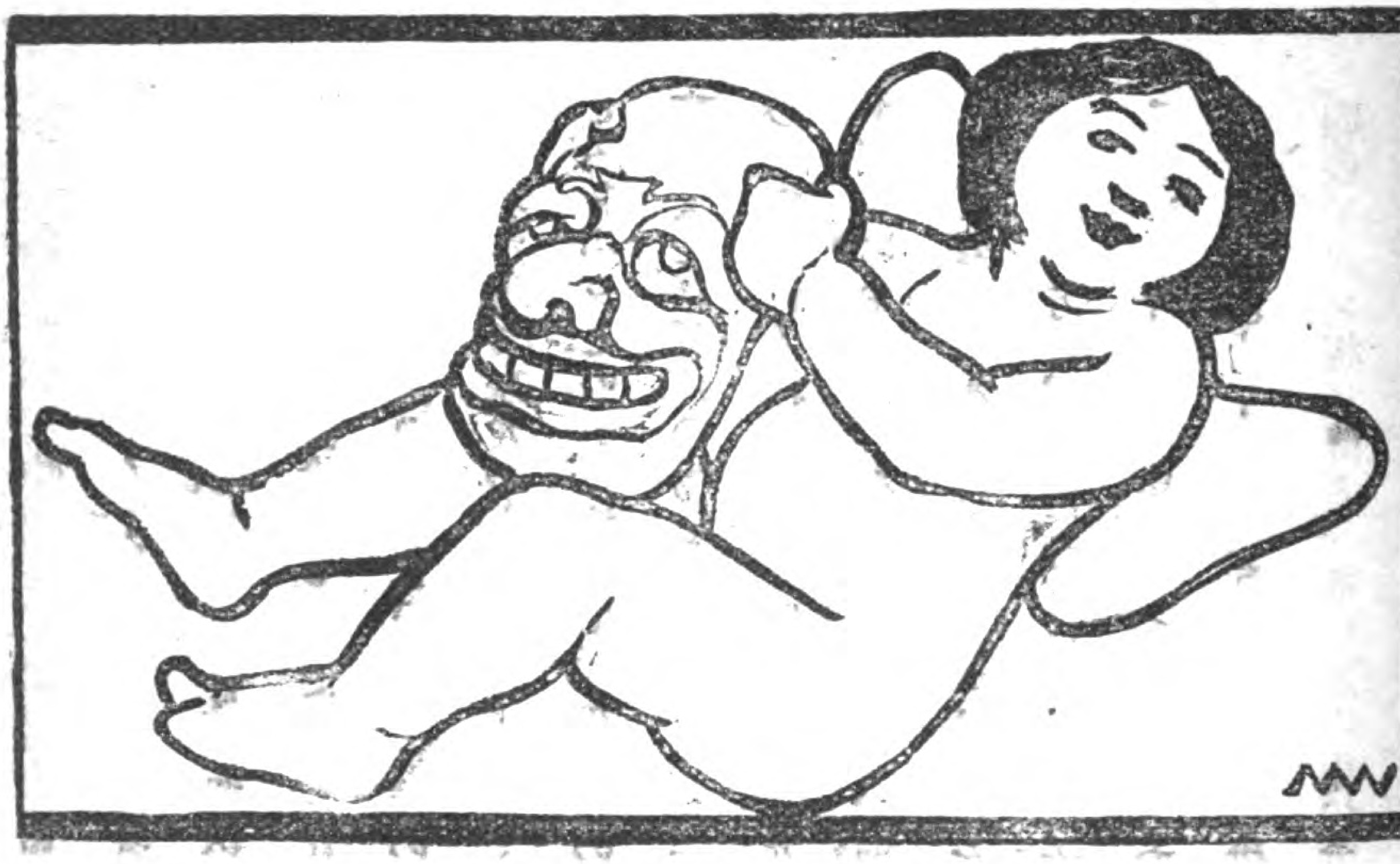


二葉亭全集

第一卷 創作之卷 浮雲、其面影、平凡

此沈鬱なる聲を聞けよ、此痛酷なる描寫を味へよ、二葉亭の著作に由て初めて人生の爲めの文學を見るを得、二十年前の『浮雲』が沈痛なる露國の文豪の音響を傳へて戲作の甘睡を破りたるが如く文學史上永遠に輝くの此三傑作は今日も猶は、明日も亦、永久に渡りて人生の教訓とすべきものなるべく、犀利峻嚴細さに到るの描寫に由て人生のパノラマ的縮圖を活躍し來る、眞に空前の大手筆也、座右二葉亭全集あつて初めて嚴肅なる、森沈なる痛酷なる現代思潮を談ずるを得べき也

發賣元　東京本町　博文館



新店

徳田秋聲

懈い耳元に、忙しい時計の音が八ッばかりも響くと、貞次は遽に急立てられるやうな氣がした。目のさめたのは、もう二十分も前だが、今日も何だか店へ通つて行く氣がしなかつた。貞次は熱つた足を心持よく蒲團から冷かな疊の上へ伸出して、白い腕を頸に捲つけながら、壁の方を向いてうと／＼と何を考へるともなしに寢床を離れかねてゐた。部屋にはまだ子持の女の臭が籠つてゐた。

そこは六疊であつた。去年の暮に燒けた跡へ建てたばかりの借家の一つで、雜な障子も天井も、まだ木の香がする

現代文壇の最大産物
嚴肅なる人生の批評

坪内雄藏
内田貢
池邊吉太郎
編輯

東京朝日新聞社發行

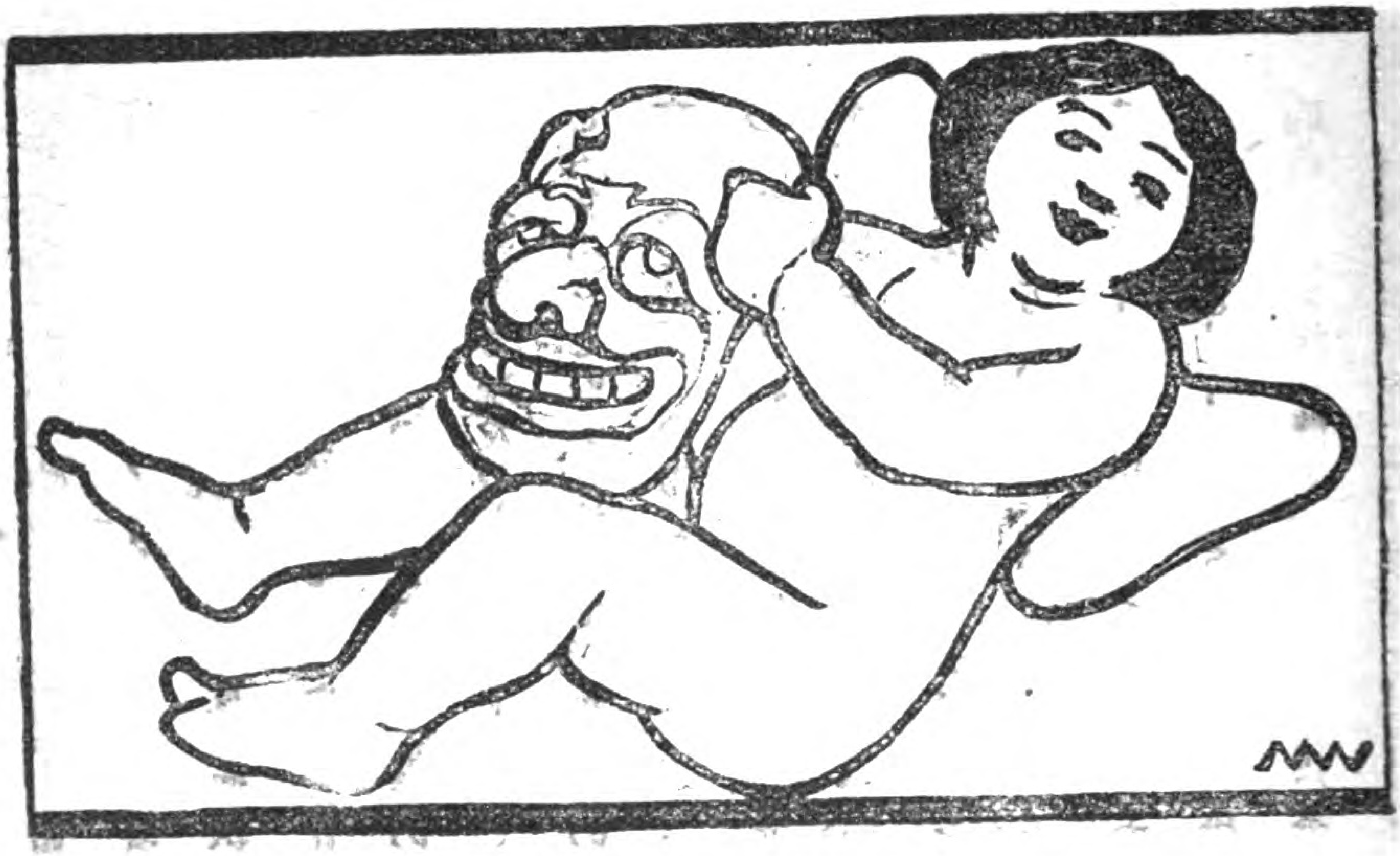
菊判八百頁
コロタイプ肖像一面
插畫五面入
正價金三圓三十錢
郵税金二十二錢

二葉亭全集

第一卷 創作之卷 浮雲、其面影、平凡

此沈鬱なる聲を聞けよ、此痛酷なる描寫を味へよ、二葉亭の著作に出て初めて人生の爲めの文學を見るを得、二十年前の『浮雲』が沈痛なる露國の文豪の音響を傳へて戲作の甘睡を破りたるが如く文學史上永遠に輝くの此三傑作は今日も猶は明日も亦永久に渡りて人生の教訓とすべきものなるべく、犀利峻嚴細さに到るの描寫に出て人生のパノラマ的縮圖を活躍し來る、眞に空前の大手筆也、座右二葉亭全集わつて初めて嚴肅なる、森沈なる痛酷なる現代思潮を談するを得べき也

發賣元 東京本町 博文館



新店

徳田秋聲

懈い耳元に、忙しい時計の音が八ッばかりも響くと、貞次は遽に急立てられるやうな氣がした。目のさめたのは、もう二十分も前だが、今日も何だか店へ通つて行く氣がしなかつた。貞次は熱つた足を心持よく蒲團から冷かな疊の上へ伸出して、白い腕を頸に捲つけながら、壁の方を向いてうと〳〵と何を考へるともなしに寢床を離れかねてゐた。部屋にはまだ子持の女の臭が籠つてゐた。

そこは六疊であつた。去年の暮に燒けた跡へ建てたばかりの借家の一つで、雜な障子も天井も、まだ木の香がする

やうてあつたが、物の好い簞笥や用簞笥がきちんと積重ねられ、人形町の露店から買つて來て据えた鏡臺や長火鉢もチラ〳〵してゐた。貞次は目をさまして、然した身を周のものをつく〳〵眺めてゐた。

一時は大分金も拵へた。道具も買込んだ。それを田舍の兄が土地に聯隊が出來て、そこへ食料品や雜貨一式を一手に供給するとになつたについて、手がまはりかねるからと云つて、無理に連れて行かれたとき、棄値て賣拂つてしまつた。軍隊の方は利潤が薄く、その上安軍人に威張られて、飲倒されるのと、競爭者が出て來たのと、兄の下に働くのが窮窟なのとて、直に厭になつた。漸く商賣に脂の乘かけたところを引ッこぬいて連れて行かれたのも、貞次に取てつは大した損害てあつたが、それから東京へ出て來て又これだけの物を集めるのは、一ト通りの骨折てはなかつた。それに間口二間たらずの店には色々のものが仕入れてある。煙草に手輕な化粧品、捲紙、櫻紙のやうなものて。店へ行つた留守を妻のお琴に小使取にやらせてある。この店も、前のに比べると品物が半分も入つてゐなかつた。馴染が淺いので客もまだ着かなかつたが、貞次はそれを前のやうに擴張する氣もしなかつた。

臺所の方て、今年三つになる男の子が不意に啼出したので、貞次は煩さうに身悶をして、「チヨッ、うるさい〳〵」と、甲癪聲て呶鳴つけた。

妻はおど〳〵したやうな聲て、子供をすかしてゐた。間もなく啼聲がやむと、そこらが又靜になつて、廂のトタン板に降る、輕い夏の雨の音がパチ〳〵と聞えた。

貞次は手を伸して、新聞を引寄せると、仰向いてそれに目を通したが、目を惹くやうな雜報も見あた

らなかつた。芝居や活動寫眞の廣告、寄席の出しものなどを、一々擬つて見たが、それにも興味が湧かなかつた。二三日前の晝、友達と一緒に遊びに行つた日本橋の女のことなど考出してみたが、使つた金が惜いやうな氣がするばかりで、暫くの間に田舍で買なじんだ女に比べると、何の味ひもなかつた。

その女は越後產であつた。手足のすらりとした、揉あげの長い愛くるしい顏立て、字を上手に書いた。產もそんなに鄙しくはなかつた。その越後音が今でも耳についてゐるやうで、可懷しい部屋の空氣も體に染込んでゐるやうに思へた。萎びたやうな妻の顏や、笑ふとき外眥に小皺の寄つた善良さうな其目つきに厭氣がさして來ると、ふいと出て行つて、二日も三日も歸らないやうなことが幾度もあつた。一つは兄に對する反抗もあつた。そのあひだお琴は子供と一緒に、聯隊の横に新しく建つた店の方にジッと留守をしてゐて、良人の居所を捜さうと云ふ氣働もなかつた。商賣に忙しい兄がやつて來て、ブツ〳〵小言をいはれる度に、お琴はおど〳〵してゐた。夕方兄が大通の本店の方へ歸つて行くと、哀しげな兵營の喇叭が廣い野の果に響き、裏の田圃で厭な蛙が喧しく啼たてる。お琴は子供に添乳をしながら、夜中うと〳〵としてゐた。

貞次は女に色々の事を打明けるやうになつた。女もしみ〳〵した身のうへ咄に耽ることがあつた。

「私ア眞實兄貴の野郎に欺されて來たゞね。」と、貞次は東京の世帶を疊んだ時の事情や、此の土地へ乗込んで來てからの細しい不平などを陳べた。一緒に居る女房が、東京近在のもので、懇意な友達から其姪を押つけられたのだと云ふことなども話した。

の女のところへ通つて來る、客の樣子が貞次に能く解つた。景氣が直つて米が少し賣れたら、其金で女を落籍してくれるとか言つてる爺さんなどが近在から通つて來た。其老人はもう女と同じ年の娘があるくらゐの年輩で、近頃女房に死別れてから、若い敵娼の許へせッせと通つて來るやうになつた。

「あすこへ行けアどうせ家が揉めますからね、そしたら逃出して、私もきつと東京へ行きますよ」と女はずッと將來のことまで約束しやうとした。

「私も東京へ行きさへすりや、今のやうに時に小遣に困るやうな事もねえしね……それに嬶だつて、談さへつけア私の方にはもうはい未練はないもんだて、金と道具をつけて綺麗に別れてしまふだね。」

それから東京へ逃げて來る時も、直ぐに女のところから立つた。一身上のことについて、兄と言爭をした揚句に、掛金を少しばかり持つて上つたきり、四日も五日も町へ來なかつた。四日目に呉服屋をしてゐる嫂の弟が迎ひに來て、貞次を別の部屋へ呼んだ。而して「貞さは何が氣に入らねえで、そんなに家を明けるだね。內儀さんが厭だか、それとも兄さんと氣が合はねえですか……。」

貞次はごた〳〵してゐる家の樣子や、そのなかで獨で悒々してゐる妻の慘な顏が、目の前に見えるやうであつた。

「兄さんもあれてなか〳〵貴方のとは心配してゐるんですぜ。商賣も見込がないと云ふ譯ぢやねえしね………。」

貞次は聞いてゐた。「それて私も知つてやすがな……。」

鬼に角金を持つて迎ひに出直してもらふとにして別れたが、弟はそれきり來なかつた。貞次は着の身着のまゝステーションへ立つた。女は身の圍のものを三四品持出して、旅費や何かを拵へて送出してくれた。通ひて元の店へ入るとになつてから、貞次は暫らく浪花町の方に部屋借をしてゐた。

二タ月目の或日の晩方、お琴が行李を蹴込に積込んで、子供を抱いて其家の前に俥を乘つけたとき、貞次は碌々口も利かなかつた。

「こんな處へ子供をつれてやつて來たつて、爲樣がないぢやないか。」

お琴は紅い顔をして、目に涙を入染ませて俛いてゐた。子供も臆病さうに、母親の膝を離れなかつた。春風にやけた貧相な妻の詰つた顔や、小紋の小袖を着た短かい膝、丸い肩つきなどが、貞次の目に一層田舍じみて見えた。

「私も田舍へ行つたばかりに、折角稼ぎためた身上を悉皆すつて了つたてね、これから新規捲直しに、こゝ二三年獨だちてうんと働かんけれアならねえ。お前もその心算てゐてもらはう。」

お琴は一言二言爭つてみた。女のとなども言出して泣いた。

「氣樂を言つてら」と、貞次は鼻頭で笑つけた。

お琴は、それから一月の餘も國分寺在の實家の方へ引取られてゐた。

貞次は重苦いやうな目を瞑つたまゝ、女の部屋の有樣などを色々に思出してゐた。借りたものを未だ

返さないとも氣になり出した。最近に受取つた手紙によると、七月初めには如何しても出て行くと云よやうなとが書いてあつが、それから二週間たらず何の音沙汰もない。何だか突然にもう出て來さうにも思へる。何の準備もないところへ出て來られても困るとも思つた。貞次は急に氣が苛々して來た。

寢所を起出すと、お琴は大きな芥のやうに長火鉢の前に坐つてボンヤリしてゐた。小供は其膝に硬い頭を載せながら、仰向いて、だらりと垂れた乳房を指頭で突ついてゐた。

「おッぱい、もうない／＼」などゝ、お琴は目尻に皺を寄せながら、黒繻子の半衿のかゝつた着物を掻合せた。子供は足をバタ／＼させながら、鼻を鳴して其手を拂退けやうとした。

「何だ莫迦！　乳なんぞ飲むんぢやない。」

貞次は顔を顰めて舌うちした。

障子を開けると、目の前に六區の活動寫眞の白い壁などが、聳々聳えてゐて、横も後も家建がごちや／＼してゐる濕つた空氣に、懈い樂隊の音などが聞えて來た。

綺麗に拭込んだ餉臺の前に坐つて、貞次は何と云ふことなし氣忙しさうに飯を食ひはじめたが、頭腦は女のことや、お琴の事で一杯になつてゐた。お琴の實家の方の父が、長いあひだリウマチで悩んでゐるうへに、兄が近頃金を費ひだしたので、家が始終ごた／＼してゐた、その苦しい中へお琴が暫らく引取られてゐたので、何彼につけて繼母の口が煩さかつた。間もなく父親が病氣を押して話をつけに出て來て。貞次は自分の都合ばかりも言つてゐられなくなつて、其から又此處へ店を出して一緒に暮すこと

になつた。口の重い父親の前では、其娘の不足を言立てることすら出來なかつた。お琴にも此と云ふ落度がなかつた。

父親が歸つてから、貞次は急に世帶を持つ氣になつた。而して家を借りる計畫を立てた。家が決ると直ぐお琴を呼寄せた。疊建具の新しい家へ入つて、一緒に店を飾りなどした時には、貞次の胸にも初めて結婚した時の待遠しいやうな心持などが思出された。島田に結つて、平打を挿して、繼母の側に俛いて坐つてゐた櫻色の其顔や、翌朝から赤い襷がけて、いそ〳〵と臺所働きをしてゐた、小柄な後姿なども、今から想ふと初々しいやうであつた。

それから一月二月たつと、この女の氣象の面白くないとや、氣働のないことが少しづゝ解つて來た。「あゝ云ふ莫迦だが、まああれても氣立は好いものですから」と貞次は自分の氣安めに田舍から弟の嫁を見に來た兄や母に吹聽してゐた。兄の顔には輕蔑の色が見えた。貞次はそれを吹聽すればするだけ、自分の心持は寂しかつた。

どうかすると、打つけにそれをお琴に當りちらすこともあつたが、お琴は顔を赤くして唯ニヤ〳〵してゐた。

結婚した次の次の年の冬に、良人の留守の間に、お琴が新手の詐欺に罹つて、現金を少しと仕立卸の晴着を一ト襲、帶や襦袢まで持つて行かれたとき、貞次はいつになくお琴にミッチリ小言を言つた。

お琴も三四日諦めがつかなかつた。「私は貞次さんと同じお店のものでして、今一緒にちよッと其處い

らて友達同士て一杯やりましてな…赤ちやん大きくおなりてしたね。」といふ風に狎々しく話しかけながら、極惡さうに頭を掻いて細い目つきをしてゐた其男の淺黒い顏が、幾日も目先を離れなかつた。お琴は居堪らなくなつて、實家へ泣込んで行つた。而して金を半額ばかり調へて來て貞次の前に差出した。貞次はそれを受取らうともしなかつたが、亡つた品物のことが、何時までも氣になつた。よく途中で、古着屋の前に立停つて覗きなどしたが、到頭それ限になつて了つた。

貞次はこの女が憎いやうな氣が爲だした。

暫くすると、きりりとした貞次の姿が電車の停留所の方の栁の葉の蔭に見えてゐた。黑つぽいセルの上に縞の單衣羽織、恰好の好い麥稈帽子などを冠つて、註文や賣上の手扣のやうなものゝ入つた折鞄を小脇に挾べ、絹の傘をさして茫然突立つてゐた。電車が二三臺前を通つて行つたが、貞次は相變らず混雜する昇降口の方を眺めたきり、不決斷な顏をして其處に彷徨してゐた。

「今日も何處かで遊んでくれやう。」恁うも考へたが、今に出て來る女のことを想ふと、それも無駄な浪費のやうに思へた。家へ入れることが出來ないまでも、一月や二月は東京で遊せて歸さなければならぬとも考へた。然うなれば宿屋の拂だけ持つとしても、大抵ではないとも思つた――執にしてもうからか惡してゐられないやうな氣がした。

ジメ／＼するやうな電車のクションに腰を卸してからも、其事ばかりに頭を取られてゐた。ふと向側を見ると、汚いネルの單衣を着て、子供を負つた一人の貧相な内儀さんが目についた。風呂敷包をさげて、

雫の滴る番傘の遣場に困りながら、暑苦しさうにをり／＼背の子供を揺りあげてゐた。子供は白い帽子を冠つて、窮窟さうに首を据え、目ばかりきよろ／＼さしてゐた。

「この頃は些とも子供を抱いて下さらない」と、昨夜お琴の零した事を想出して、貞次は變な氣になつた。

「抱くばかりが親の能ぢやない」と、貞次は淋しい笑顔を見せてゐたが、子供ばかりに縋らうとしてゐるやうな妻の樣子が、みじめにも思はれた。

貞次は須田町のところて、些と自分だけの用事をたして、それから又本郷行の電車のなかへ紛込んだ。

一丁目まで來て降りた頃には、雨は幾ど霽つてゐた。白みかゝつた雲がふわ／＼と近い空に輕く動きだして、をり／＼赫と差して來る强い日光に、町は蒸されるやうに暑くなつて來た。貞次は金助町の或る靜な道の方へ入つて行つた。

門を開けて入つたところは、可也な構の家であつた。籬のかゝつた二階の綺麗な部屋が木立の蔭に、往來の方からも涼しさうに見透された。貞次は裏口から上つて行くと、旋て茶の間のやうな六疊の部屋に座つてゐた。

奥の方から顔を出した細君の樣子や、六ッばかりの女の子を見ると、何となくそわ／＼してゐる。部屋の入口にもリボンが散つてゐたり、買立の白足袋が見えたりした。「何處かへお出かけですか。」

貞次は田舍では遠い親類先になつてゐる細君に聲かけた。
細君は二十六七で、柄も大きく顏もボキ〳〵して、調子の賑かな女であつた。
「え、今日は賴まれて本鄕座の總見ですよ。貞次さんも來ないこと。」
「何です出物は……。」と、貞次は女中が出してくれた茛盆を引寄せながら訊いた。部屋まで映つてみえる深々した庭の木の影に、胸がスッとするやうであつた。
細君は何やら調子の浮いた應答をしながら、せか〳〵と奧へ引込んで行つたと思ふと、くすんだ色氣のお召の單衣物の褄を揃い〳〵又顏を出した。
「私も何だか怏々するもんですからな、どうせ今日は一日遊ばうと思つて……」と、貞次は氣がむしやくしやするやうに五本の指で頭を引搔いてゐた。
「矢弱家が面白くないんですか。」
「それも有るしね……。」
「お琴さんは好い人だがね。」
「たゞ好いだけで、何をするにも氣がないんでね。だなら今度はへい奈何しても別れやうと思つてね。例の女の方からも喧しく言つて來やがるし　」と、貞次は機械的に折鞄の口を開けて、中から手紙のやうなものを一束取出さうとしては、其まゝ底の方へ押込んでしまつた。
それは女から來た手紙で、どれも此も長いのばかりであつた。田舍にゐる時分のもあるし、東京へ來

てからのものあつた。人に話せないやうな込入つた事情や女の心持などが、手紙の文面にも色々に現はれてゐるので、貞次はいさこさなしに綺麗に別れる心算のお琴にそれを見られるのが極が惡かつた。自分よりか字の巧い女の手紙を反故にして棄てるのも惜しかつた。この手紙を見せて誰かに解決を仰がなければならぬやうな氣もしてゐた。

「さうは言つても、あんな子供があつてみればね……。」

細君は奥の方から話しかけた。

少時すると、悉皆支度の出來あがつた細君は、火鉢の傍へ來て、女の手紙を一本撮げて見てゐた。

「ほんとに字が巧いわね。」と、細君は白い指頭で、眉尻のところを些と掻きながら、こまこました文句の意味を辿つて行つた。

「この人幾歳です。」細君は少し眞面目な口を利いた。

「二十一ださうですがね。」

細君は感心したやうに、首を傾げて、それからそこそこに手紙を捲收めた。

「かう云ふ人があれば、それは然うも思ふてせうね。それなら其のつもりで、愈よと云ふ場合には口を利いてあげても可いわ。自分の腕で自分がするとなんてすから、好きなやうにした方が可いてせう。」

貞次は默つて手紙を受取つて、鞄のなかへ仕舞込んだ。

「だけど散々口を利かしておいて、後てずるずるに矢張り仲よくしてゐるやうだと、此方が困るんてす

よ」と細君は笑つた。

貞次は少し顔を顰めた。「まさか其様なとはないてすよ。」

「それに其女だつて、家へ入れたとなつたら、如何いふものでせうかね。其邊も能くお考へなさいよ。」

「それアそんな事はないてす」と、貞次は氣のない返辭をした。

「商人は堅い方が、まあ好いんですからね。」

「けど私アお琴より優だと思ふがね。」

「それは恁ういつちや惡いか知らないけれど、眞實お琴さんは少し見損ひましたね。」

細君の目のうちには、男の心持を捂しがつてゐるやうな色が見えた。

「笑顔や目容もちよつと可愛いし、氣心も優しくて厭味のない人だけれど、何處といつて好いたと云ふところもなくてね……」といつて貞次の厭なやうな顔をしてゐるのに氣がつくと、急に話を切つて了つた。

貞次は何と云ふとなし業腹になつて來た。この問題を恁云ふハメへ持込んで來たのが、情なくもあつた。

そこへ「今日は……」

と聲かけて、裏の方から髮結のおきんと云ふ年增が入つて來た。能く連中總見の切符など持込んで來る女で。貞次も此處で幾度も出逢つて知つてゐる。

「お時間が丁度ようございますよ」と、おきんは柱時計を見あげながら、帯際から貲入を取出した。

「それぢやあ、そろ〳〵出かけませうかね。」來月が誕生月に當る子供に乳を呑せてゐた細君は、ふいと乳房を引離すと、側に紐をもつて控へてゐた子守の背中に其子を載せてやつた。

「餘り泣いたら連れてお出よ。オヽ好い兒〳〵。」と、柔かい紐をかけると、背中を輕く敲いて頰ずりをした。そして衣紋を繕ひながら、摺足で奥へ何やら取りに行つた。

少時すると「一緒に出ませう」と、貞次も鞄を擁へて陽氣に出て行く二人の後から續いた。

貞次が駒込に葉茶屋をしてゐるお琴の叔父——仲人——のところへ顏出をしてから、芝居へ引返して來たのが、もう一時近くであつた。

叔父はもう四十近くの年齒である。今度も店を出すとき、わざ〳〵來て棚を釣つてくれたり、障子張をしてくれたりした。貞次は兄のやうな氣がしてゐた。

貞次が店頭から立つて行くと、叔父は日當の惡い狹い庭に臨んだ奥の間に、自轉車から落ちて傷めた足に繃帶して臥てゐた。その故か目が窪んで顏も窶れてゐた。この親切な友達の顏を見てゐると、貞次はお琴の不足も言出せなかつた。掃除の行屆いた、古びのある靜な部屋のなかに坐つて、落着いた低い調子で話をしかけられると、お琴のやうな正直一遍の女を世話したのが、自分のために深い意味があるやうにも思へて來た。

貞次は番茶を一杯貰つて飲むと、近所で買つて持つて行つたビスケットの罐をおいて、直にそこを出て來た。

「田舍などへ行かずに、今度は是非辛棒おしなさい。」

友達は店口まで這出して來ながら、言つた。

「私もへイ、どんな事があつても兄貴などには欺されない心算だね。」貞次も熱心に言つて暇を告げた。

それから汗を拭き〳〵茶屋の二階へ上つて行くと、茶を飲む間もなく、男衆に案内されて場内へ入つて行つた。

舞臺には美事な緞帳が下つてゐた。外の世界と何の緣もないやうな廣い場内には、上氣したやうな群衆の顏、白い手、手拍、扇子、リボン、簪などが、落着のない貞次の目に一時にパッと映つた。連中のなかへ割込んで行くと、貞次は直に金助町の細君の側に入れられた。側に髮結のおきんも目を光して、屈み加減に坐つてゐた。周の連中は何となくざわ〳〵してゐた、辨當を配るもの、受取るもの、便所へ立つもの、酒を飲むもの、坐るもの、腰かけるもの……するうちに、菓子と辨當が貞次の手にも渡された。貞次はそれを下においたまゝ、桝の隅の方にぎごちなく腰を屈めて、番附や筋書を見散してゐた。

「駒込の方の話は如何だつたの。」細君は辨當に箸をつけながら聞きかけた。

貞次も漸と箸を割いて、「駒込の方かね。彼の男はどうせダメだね。私が嫂を嫌つてゐるとすら解んねえんだから」と高調子に言つて、辨當を食ひはじめた。

「それぢや如何なるの。」

「如何なるか、私にも薩張解んねえ。」

「ちよいと御免なさいよ」と、誰やら後て聲をかけたものがある。振顧つて見ると、意氣がつたやうな銀杏返しの町家風の女が、桝の仕切を渡つて出やうとする處てあつた。

貞次は些と前屈みになつた。

「あれ切通しのあの大きな荒物屋の娘てすよ」と、細君は俛いて私語いた。

「もう娘てもありませんよ、」と傍からおきんが二人に茶を汲んて侑めながら笑つた。

「幾歳だね。」

「もう三十てすもの。」おきんは手て細君を打つやうな手容をした。

「へえ、あれて……」と、細君は丸い目をして女の後姿を振顧つた。

「評判の萬年新造てすもの。」

「然うてせうね。」

「隨分道樂をしたもんてすよ。方々役者にも關係をつけたんてすよ。大和にも一時騒いてましたがね……

…………。」

「大和なぞ好くもないぢやありませんかね。」細君は眉根に八の字を寄せた。

「え、ちッとも……ても座蒲團だの、長繻絆だの、何だかんだと云つて拵へてやるんてすよ。」

「でも商ひはなか〳〵巧いんですつてね。」

「え然ですつて。」おきんは目を光して頷いて見せた。「阿母さんと二人で、とにかく彼だけの店にしたんですからね。もうお金も餘程出來たでせう。ですもの役者買したッて好い譯でさね。」

「ヤッぱり獨身？　貞さん貴方養子に行つちや如何ですね。」

貞次はモク〳〵飯を食つてゐた。

「私かね。もうダメだ。」

「え、それだとお誂向なんですけれどね、此頃あの人養子が出來たんですよ。あんな道樂をした人が、如何してあんな人で辛抱が出來るかと思ふくらゐ、其婿さんと云ふのが無意氣な人なんですの。それで口が重くて、お愛相がないと來てゐるんでせう、始終お内儀さんに叱られ通してすわ。」

「ぢや矢張役者買するでせう。」

「些とは締つたと云ふ事ですがね‥‥。」

舞臺の方で、拍子木の音が聞えだした。ぞろ〳〵と廊下や運動場の方へ出てゐた女の群が、二人三人席へ戻つて來る頃、前の女も歸つて來た。而して貞次の肱を突いてゐる直ぐ前の桝の後側へ來て、此方へ斜かひに向いて坐つた。其一ト桝は女には馴染のない人ばかりで占めてゐた。眼鏡をかけた背の屈んだ爺さんに、下卑びた才取屋風の四十年輩の男などがゐた。女は其隅の方に片寄つて坐つた。而して始終此方の桝の話に耳を假してゐた。時々獨て嫣然笑つたり、貞次や細君と親しげな目を見交すとなぞ

があつた。

そのうちに賑かな囃て幕が開いた。見物の方では、扇子の影が目間苦しいほど動いた。長い其一幕が濟むと、醉つたやうな觀衆の顏には一樣に疲勞と興奮の色が見え、起つたり出たりする人が其方にも此方にも混合つた。其時分には、女と後の連中とはもう自由に話をするほどに打釋けて來た。

「何て暑いんでせうね。」銀杏返は蓮葉なやうな口の利方をした。

「眞實に暑ございますね」と、細君もだらりと膝に倚かゝつて來る女の兒の汗ばんだやうな前髮を、指先て弄りながら扇子を使つてゐた。

「今日は又格別ですよ。でもどうせ家にゐてもお暑いんでございますから、寧そ芝居でも見てゐた方がようございます。」

女はそれから芝居の話をしはじめた。役者の好き嫌や、樂屋うちの噂などが出た。誰も知らないやうなヤクザな下廻りの內幕まで話した。貞次は何處からか、正宗の二合壜を持つて來て、獨てチビ／＼飲んでゐたが、醉が色白の優しい其顏に出て來ると、調子が段々に燥いて來た。

「役者なんて旨いことをしてやがら。女はお上品な樣子をしてゐて、皆な買ふんですからね。」貞次は調子はづれの聲を出した。

「ぢや貴方も、役者になれば可かつたぢやありませんか。」女も目を丸くして、愛嬌のある身振を

せた。

皆なは笑出した。

「貴方は私どこかでお目にかゝつたやうですよ。」女は貞次の顏を見つめながら言出した。「いゝえね、私先刻から然う思つて見てゐるんですけれどね、如何しても思出せませんもの。」

細君もおきんもニヤ〳〵笑つてゐた。

「さうかも知れませんよ」と細君は言出した。「萬更此土地には緣のないともないんですから。」

「さうでせう、何處かにゐたでせう。」

貞次は俛いて頭をかいた。

「今は何方です。」女は手帕で唇のところを拭きながら、恍然したやうな目つきをした。而して日本橋と淺草と兩方にゐると聞いて、「へえ……どうしてもね、下町の商人衆は……」と、首を捻つてゐた。白粉やけのしたやうな、生地の荒れた顏には、視てゐると何處かに三十女の淋しみもあつた。

女はそれから貞次の年や商賣など訊いた。

「私も御存じの、つまらない商賣をしてをりますがね、これを御緣にどうぞ……奧さんのお宅へも是非伺ひますよ」と、女は舊い友達にでも逢つたやうな調子で話した。

貞次も紅い顏をして、時々舞臺へ聲などかけて一同を笑せてゐた。

貞次は醉ざめの蒼い顏をして、淺草行の電車のなかに、疲れた目蓋を閉ぢてゐた。電車は激しい響を立てゝ走つてゐた。貞次は時々驚いたやうな目を睜いて、暗い窓の外を眺めてゐた。電車の窓からは寒い夜風が吹込んで來る。

舞臺の背景や役者の白、陽氣な連中の話聲などが、疲れた耳にまだ着いてゐるやうであつた。荒物屋の女の剽輕らしい目容も目に浮ぶ。―

家の近くまで來ると、界隈には漸く露店を仕舞かけてゐる商人などがあつた。其處此處に默つて動いてゐる其人達の姿を見ながら、貞次は夜露てしつとりした町を歩いてゐた。自分が初めて東京へ出て來て、周旋屋の口から、春木町の鑵詰屋へ丁稚奉公に住込んだ頃のとなどが、ぼんやり疲れた頭に浮んだ。

「今日も又費つてしまつた」と、貞次は懷の紙入へ、私と手をやつて見た。

家へ歸ると、お琴は急いて寢所から起出して來た。乳くさいやうな寢息が、貞次の鼻に強く感じられた。

貞次は火鉢の側て、默つて茶を飮みはじめたが、そこに見慣れぬ齒磨の袋が三つ四つ散らばつてゐた。留守にお琴が廻つて來る卸屋から受けておいた品らしかつた。

「何だこれは……。」貞次は不思議さうに手に取上げて見た。

「薑齒磨……莫迦にしてら。」

「それがね、この頃大變出るんですつて。」お琴はおづ〳〵した調子て、「それに格安ですから……。」

貞次は一ト袋開けて見た。

「こんなもの爲樣がない。ザラ〳〵してら、全然(まるで)砂だ。」

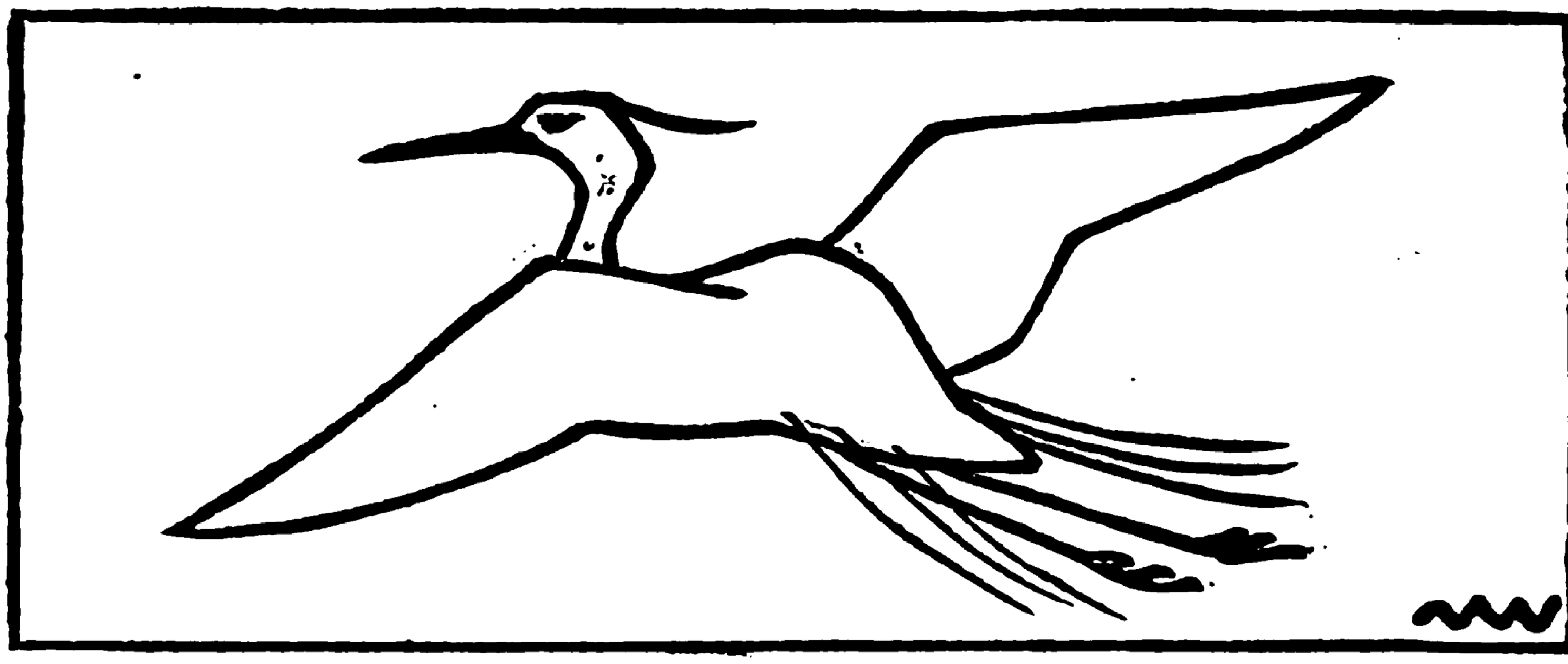
「でも……」

「お前がはめられたんだ。金を拂つたのか。」

「え、割引をしておくから、百ばかり取つておいてくれッてね……。」

貞次は舌打をして、默つて俛いた。この頃骨折つて漸く飾つたばかりの新店が、また段々廢れて行くやうな氣もした。

（をはり）



王昭君

永井荷風

（一）春の夜の物思ひ

いつの間にか十年近くの月日は過ぎた。堪えられぬほど長くもあつた。また驚くほど短くもあつた。譬へば晴れた夜の空にかゝる月の輪の、ぢつと眼を上げて見詰める時には一ツ處に動かず止まつてゐながら、しばし慰む徒然の琴の一曲、詩の一章を咏ずる暇には、滑なる奥庭の苔の敷物に横はる梢の影畵はいつか移つて玉の階に上ると同じやう、目に見えぬ時間は音なき車に乘つて休みなく行先知れぬ未來にと急いでゐるのであつた。さま〳〵の花は時を違へず咲いては散つた。雁と燕は代り〳〵に何處からともなく來て、又何處へとも知れず飛び去つた。柳は芽をふく、碧梧は散る、雨が降る、風が吹く、日があたる……いつか十年近くの月日は過ぎて

ゐたのだ。

別れたのはほんの昨夜であつたやうな氣もする。何故なれば其の夜設けた別離の宴の光景は燈の光に動く物の色、夜の暗さに混ずる物の影、皆あり〳〵と涙に潤む眼の中に殘つてゐる。いざ名殘と彼の女が彈じた琵琶の一曲は大絃の霧き小絃の私語、一ッとして耳の底より消え失せはせぬ。さるを今、自分と彼の人の間には八千里と傳へ聞く道程が横はつてゐる。其の空間の恐しき隔離を思へば時間は又いかに、再び相見がたく二人の運命を遠ざけてしまつたか。あゝ、その夜の幻影のうつくしさよ。磨いた瓦の床に敷く其の裾よりも猶長い兩の袖を飜して、幾人の宮女の休む暇なく舞つては代へる新しい銀燭の光に照され、太き石の柱と紫檀の彫刻の欄干に圍まれた高樓は、何人も未だ嘗て其の端を究めた事のない廣い奧庭の、烟渡る春の夜の暗さが中に、錦糸の織模樣の如く鮮かに浮き出してゐた。風がないので、垂下つた重々しい帷幕と共に、燃えて動かぬ燭の焔のあまりに明かつたせいであらう。いつも酒宴に侍る詩人の群の一人が彼方なる宮殿の鬼瓦が異樣なる形相の口を開いて夢より淡き朧月を啗むさまの面白やと云つたけれど、自分は高樓の奧に一段高く据えられた虎の毛皮の椅子からは唯欄干に近く、夜露の重さに其の枝を悩し氣に垂らす海棠の花と、神仙の岩窟を見る如き聳えた庭石の彼方一面に咲揃ふ桃の花が、繁つた柳の梢と共に、夜の雲夕の霞とばかり棚曳いてゐるのを見たばかりであつた。わが前に運び出された大きな蠟石の食卓には世界の隅々から貢物にと獻げて來る珍しい果物のさま〴〵が、磨いた瑪瑙や珊瑚や象牙の器の中に輝いてゐた。其の周圍には粧ひを凝す幾多の宮女の紅濃き唇が、詩人や

畫家の優しい眼と、學者や將軍の嚴しい髯との間に微笑んでゐた。突然、見えない廊下の端れにひかへた樂人の群の奏出す音樂の響に、彼の女の姿のわが目の前に現れ出た時、自分はいかに驚いたであらう、怪んだであらう。この若い、この美しい、これが昭君と云ふのであつたか。わが宮殿に養はれ女た三千人、其の人數のあまりに多ければ、宮中の畫家が一人一人に寫して獻ずる畫像によつて自分はかの醜い王昭君を知つてゐたに過ぎない。されば人も言葉も盡く違ふ遠い北方の强國から都會の美女一人をとの望みに由なく、醜いと思つて昭君を差遣す事にしたのであつた。其の夜北方の兵士は酒宴の終るを遲しと待ち構へ、わが宮中の美姬を連れて去らうと都の端れの城壁の外に天を焦すまでに篝火を焚いてゐたとやら。時々歌ひ叫ぶ、其の太い聲に、濠のほとりの柳に眠る小鳥の群は、塒をはなれて烟り渡る空の中に朧月の一夜を彷徨ひ明したとやら。今日まで幾年の春を見る人もなく我が家の庭に咲いた可憐の花を、むざ／＼北の夷に手打らせる其の罪の歸する處は、かの人の美しい誠の姿を寫さなかつた畫工の身の上ではないか。わが憤恨の焔は拙き畫工の群と又才なき詩人の筆をも歡樂の宮より追ひ出して犬のさまよふ市に捨てさせたが……あゝ然し初めて見て初めて打たれた心の傷は遂に癒すべき手段がない。戀しと云ふ切ない思ひを癒すには、焔る胸の火を唯だ忘却の氷室の底に封じてしまふより道がない事は知つてゐるが、其の忘却の氷室は、忘却を欲してゐるもの丶眼には決して其の所在を示すものではなく、却て追囘の濕室をのみ求むる人の突然能く此れを見出して悲しむものである。見まじと思ふ海棠の花は今宵々々其夜の通りに露を帶びて惱んでゐる。桃花の霞は垂柳の烟と共に朧夜の奥庭を限つてゐる。あゝ誰

であらう。築上げた岩の彼方に高く連る土塀を越して窃に笛を吹くものがある。海棠の花は其の音に耳を澄すものゝ如く一片の輕い花瓣をも動かさぬ。柳は身も心も堪えられぬやうに俯向いてゐる。岩の間から岩の間にと苔の上を滑る池の水も其の呼吸を止めた。見上げると唯だ桃の花の棚曳く上に、今宵は燭の數の少い處から圓い月の明に浮んでゐるのが見える。不思議や、あの笛の曲は其夜彼の女が彈じた別れの琵琶の曲を其のまゝ、四條の糸より六孔の管に移して奏てゝゐるのだ。そも誰であらう。今まで幾度か宮中の伶人に命じてあの夜彼の女が彈じた別離の一曲を聞かうとしたが誰一人記憶してゐるものがない。彼等は皆口を揃へて古代から傳つた正しい樂譜の中にはあんな纒りのつかぬ破格な曲は書いてないと申譯するばかり。然るを、然るを。何人がどうして其れを記憶して、どう云ふ心で、この朧月の夜更に獨り花を隔てゝ、腸もちぎれよと笛吹くのであらう。あゝ笛吹く人よ。笛吹く人よ。

(二) 笛吹く人

私には其の日まで、眼に見て美しき凡ての物の形と物の色、それをば繪絹に寫す繪具と繪筆とは實であつた、生命であつた。繪絹よ、繪筆よ、繪具よ、これあるが爲めにこの世の中は生きて悔ひなく、苦んで美しく、泣いて猶更樂しきものゝ限りであつた。牧童の笛の音消ゆる時、黄昏の光に怪しく輝く野川の水の色、渡場に布洗ふ女の歌も聞き眞晝時、明き日當りに翼の光澤を誇る小鳥の姿は、幼き時より私をしてこの世には何とて斯くは美しきもの〻多きやと思はしめた。美しと見惚るゝ果は、いかにかし

て其の美しき物の形、物の色をば其の儘に紙の面に寫して見やうと思ひ立つた。城壁の外の柳が繁る青野に生れた私には、書を學ぶ都の書生の如くに師と頼むべき人のあるではない。身の周圍の生きた物、動く形が知らず〳〵に書と云ふ技を私に教へた師匠であつた。十六歳の時、牛飼の娘も黑髮に野菊の花さす秋晴れの九月の午過ぎ、渡場の畔の河原の石に腰かけて翁が釣る魚の形を寫してゐた時、白銀の鞍置いた遠乘りの馬に水飲ませんとて河原の白い砂に下り給ふ貴公子の二三人、其の中の一人がふと私の寫す魚の繪に目を留められたのが、私の出世の糸口であつた。…………

王昭君について

永井荷風

このやうな書掛けの原稿を雜誌に出すのは讀者に對しては甚だ申譯のない次第である。

實はこの「王昭君」は二幕の劇詩として書き上げ、四月發行中央公論の春期附錄に出すつもりであつたが、とても間に合ひさうも無かつたので、篇中人物の臺詞の重な處ばかりを、一節一節にして、つまり上下四節の散文詩に書きつゞめて見やうとした。ところが其れすら期日に間に合ばず、雜誌編輯者に非常な迷惑をかけた結果、今度は書きかけた部分だけを、埋草に印刷する事になつて仕舞つたのである。

「王昭君」の故事は今更説明する事もあるまい。自分は唯だ王昭君と云ふ女が都を離れて遠い異人種の國へ行つたが、然し其の堪えがたい悲しみは肉體の生命を傷けず、異人種の夫に嫁して子供までを設けたと云ふ事を土臺にして、人間は精神上の悲哀に惱せ衰へて美しく死にたいと思つても、肉體と云ふ別なものがあつて、さう思ふやうに詩的の最後を遂げる事が出來ないと云ふ氣持を暗示しやうと思つた。此れが自分の書かうとした劇詩の主意である。



ル・パルナス・アンビユラン

鷗外

荒物屋の横町に人立がしてゐる。

白い着物を着せられた、よぼ〳〵した爺いさんが、白張の提灯を持つたり、竹の筒に挿した花を持つたりして、本通りの角まで、不規則に並んで、がや〳〵云つてゐる。シルクハツトを被つた男が、手に書付を持つて立つてゐて、癇癪を起したやうな聲をして、指圖をしてゐる。

葬の行列を作つてゐる最中である。

花に下げてある木札を見れば、何々新聞社とか、書肆何館とか何堂とかいふやうなのが多い。書肆なんぞとわざ〳〵書

いてあるのは、造次顚沛にも廣告といふことを忘れないのである。

小さい冠木門の傍の、大分古びた板塀に寄せ掛けてある銘旗の文字を見れば、名高い小說家の名である。此人は當世第一流の作家と云はれてゐたのであるから、獨逸や佛蘭西てゞもあらうものなら、キルヘルム陛下とか、フアリエエル大統領とかの花輪でも來てゐる筈であるが、日本の第一流は本屋位が花をくれる外には、誰も顧みるものはないのである。

戴冠者や大統領は扨置き、國務大臣だつて花なんぞはくれない。第一流でもなんでも、小說家である以上は、政府は厄介ものだと思つてゐるのだから、死んでくれゝば喜ぶのである。中にも此人なんぞと來ては、發賣禁止を五六遍食はせられてゐたのである。注意人物になつてゐたのである。いかに警察が行き屆いても、泥坊の跡は絕えないと同じ事で、小說家は跡から跡から出て來るのだが、それにしても、第一流と云はれる先生は三人か四人であるから、それが一人死んでくれゝば、神聖なる Censure の任務に當るお役人が大いに助かるのである。

そんなら學士院だとか大學だとかいふものはどうかと云ふと、アカデミイに小說家が這入るだの、教授が小說を書くだのと云ふのは、遠い西洋の事で、小說を書くどころではない、小說を讀むやうな、じだらくなものは學士院にもゐなければ、大學にもゐないのである。死んだ小說家に花なんぞをくれる筈がない。

本屋丈は花位くれる。併しこれも教科書を書いて貰ふやうに、小說の原稿を難有がつて貰ふのではな

い。殊に第一流の小說と來ては、讀者は男女の學生の外には餘り無いのだから、本屋もさ程恩惠を蒙つてはゐない。花をくれるのも、義理にくれるのである。

門の內の騷がしい人聲が一層騷がしくなつた。棺が玄關から舁き出されるのである。

書付を持つたシルクハットの男は、さつきから人力車に乘つて待つてゐた坊さんを呼んで、花を持つた人足の次に、その車を留めて置かせる。坊さんはまだ二十代位で、何學林とかを出て間がないと見える。頭を剃る代りに器械刈にして、近眼目金を掛けてゐる。その頭が衣を脫いで俗にまぎれる時の用意らしく思はれる。

「こん度は君だ」とシルクハットが聲を掛けると、今一臺の車に乘つて待つてゐた、髮を長くした、痩惚けたやうな男が、「はい」と返事をして、坊さんの車の跡に續いた。兩手で不調法らしく、白木に戒名を書いた位牌を擎げてゐる。亡くなつた先生には長男があるから、それが位牌を持つ筈であるが、先生が亡くなる前まで自由戀愛を遣つてゐたので、細君と三人の子供とは、別居をしてゐて、葬にも立たない。そこで門人の此男が位牌を持つことになつたのである。

その跡へ四句の偈の旗を持つた人足が續く。自由戀愛はしてゐても、第一流の先生は餘り經濟が饒かではなかつたのであるし、それに平生やれ生の意義だの、生の受用だのとは云つてゐても、立派に生きるといふ程生きて見たのではなかつたのであるから、生滅滅已、寂滅爲樂には相違ない。

「こん度は棺だ」とシルクハットが叫んだ。流石第一流で、門人もある人であるから、寢棺丈はさばつ

れたのである。中にゐる先生は、死といふことは始終書いてゐたが、實はそんなに深く死といふものに就いて思索を費したのでもない。殊に自分の死といふことは少しも考へたことがなかつた。そこで遺言もない。又奇拔な事、奇拔な事と心掛けて書いてはゐたが、茶毘をせられる時の用意に、花火を懷中してゐたといふ、昔の作者の工夫もしては置かなかつた。只平凡な死骸になつて、棺の中に仰向になつてゐるのである。

シルクハットが門の内へ向いて、「棺側の諸君はどうしたのです」と叫んだ。手んでに銜へてゐた敷島かなんかを抛つて、四人の男が出て來た。シルクハットが一人に山高帽子が三人であるが、黒の洋服といふ所丈は揃つてゐる。尤も服の所有權に關しては、多少の疑を挾むべき餘地がないでもない。併しそんな事を言つて piété を傷けてはならない。棺の中に仰向になつてゐる先生を除けて、日本の文壇で第一流と云はれる人は、此四人ばかりである。一歩を進めて言へば、此棺と棺側とが即ち日本の文壇なのである。これが歩いてゐる文壇である。Parnasse ambulant である。

四人の使徒は棺の左右に二人づゝ立つて、威儀堂々として控へてゐる。右の前にゐるのは、シルクハットで、色の蒼白い、智略に富んでゐさうな男である。その背後にゐるのは、色の黒い、顏の四角な大男で、dévotement に項垂れた様子が、いかにも文壇の icône に對する信仰の篤い人らしい。左の一人はまだ二十代で、鼠のやうな目をした、鼻つ端の鋭さうな男、今一人は大人しさうな、一度位見ては記憶して置かれさうにない容貌の男である。

書付を持つたシルクハツトが、今迄にない優しい聲で「さあ、花子さん、あなたの番です。」と云ふと、ハンケチで顔を押へながら、庇髪の女が門の内から出て來て、棺の背後に佇んだ。棺の中で仰向になつてゐる先生に、若し意識があつたら、これで心殘りがなく門出が出來ると、ほつと息を衝いたであらう。但し折々ハンケチを顔から離したところを見れば、花子さんは餘り別品ではない。

次に呼び出されたのは、數人の批評家で、近眼目金を掛けた痩男が先頭に立つてゐる。これが文壇の主義の名附親である。謂は le fondateur d'isme である。文壇が内閣なら、これが書記官長である。跡に附いて列んだのは、皆訓練を受けた少壯者である。主義の違つたものなぞは交つてゐない。

書附を持つたシルクハツトが、細長い體を反身にして、頤を反らして、「Messieurs étrangers」と呼んだ。

此時冠木門の向側にある、八百屋の店の溝板の上に、さつきから立つてゐて、珍らしさうに行列の出來るのを見てゐた、黒服の西洋人が四人、帽を脱いで遣つて來た。同じ黒服でも、此連中の着てゐるのは、羅紗の光澤が違ふ。帽子も同じ事である。手袋も大き過ぎて指の尖が餘つたり、細過ぎて無理に嵌めたやうになつたりしてはゐない。

西洋人は一人々々名刺をシルクハツトに渡した。どれも／＼葬に來ては葬に來たらしくしてゐて、にこ／＼笑つたり、餘計な事を饒舌つたりはしないのである。シルクハツトの男は少し慌てゝ、手に持つてゐた書付をポツケツトにしまつて、シルクハツトを脱いで、名刺を受け取つて、相手の顔と引き合せ

るやうにして、讀んで見た。

そしてU. C. Delnatureといふフランス人らしい名の男に「Vous arrêtez-vous auprès de moi, Monsieur, s'il vous plaît」と云ふと、濃い褐色の髪を四角刈にして、妙に長く切れた細い目の、吊るし上がつてゐる此男は、默つて帽を被つて、行列掛の左後のあたりに、介添人らしい樣子をして立ち留まつた。殘つた名刺には Dr. Symbolicus, Dr. Mysticus, Dr. Neoromanticus と書いてある。行列掛は、此三人には餘程傲慢らしい態度で、「Die Herren Doktoren bitte ich, sich dem Zuge anzuschliessen !」と遣つ附けた。三人は丁寧に禮をして、行列に加はつた。兎に角行列掛の先生はいろんな國の語を饒舌るのである。尤も間違つてゐるかも知れない。又長い事が言へるかどうだか、其邊は保證の限でない。

行列掛はシルクハットを被つて、門の內へ向いて「さあ〳〵若い諸君にさつさと出て貰はう」とどなつた。色の蒼い痩せた二十前後の男がぞろ〳〵出て來て、列に這入つた。あらゆる帽子の種類が並ぶ。羽織は着てゐるのもゐないのもあるが、袴丈は皆穿いてゐる。その間々にいろんな學校の制服が交る。一年志願兵の軍服なんぞは交つてゐない。それは其筈である。身體檢査を受ければ、丁種になりさうなのが揃つてゐるのである。

行列掛のシルクハットは、ポツケツトから書付を出して一寸見て、すぐに皺くちやにしてポツケツトに捩ぢ込みながら、「やれ〳〵、跡は並の會葬者だ」と、人に聞えるやうに云ふかと思ふと、横町に人力車を留めて待つてゐる大勢に、くるりと背中を向けて、急ぎ足に前の跡を追つて行く。例の西洋人は、

それを變だとも思はない樣子で、影の形に添ふやうに、同じ步調で附いて行く。二人は棺の直後の廂髮の傍まで來て、シルクハットが花子さんの左に並ぶと、ドラナチユウル君は心得顏に花子さんの右に並ぶのである。

跡では車夫等のがや〳〵罵り合ふ聲の中に、數十臺の人力車の列が、自然淘汰の方則の下に出來る。車の上の人は、年寄もあれば若いのもある。第二流以下の小說家、isme の違つた批評家、戲曲家、長詩家、短詩家なんぞである。その列は自然淘汰で出來ると云つたが、それは車の上の先生方の自然淘汰ではない。車夫と車夫との間に行はれる自然淘汰を謂ふのである。何處かの停留所で電車から降りて、偶然乘つた車の車夫の技倆次第なのである。

人力車に乘つてゐる連中は、皆お人好しばかりで、シルクハットに何と云はれようが、自分が後にならうが、そんな事には頓着しない。不斷から、書かせることは書かせて遣る、息の根丈は留めずに置いて遣る、第二流だと心得て書いてゐろと申し渡されて、書いてゐる位なのだから、感覺が鈍つてゐるので、こんな時には扱ひ好いのである。

髮も髭も白くなつて、車の背に倚つ掛かつて、半分眠つてゐるやうなのは論はない。洋行歸のハイカラアでカイゼル髭を生やしたのもゐるが、ひどく martial な風采の割には、從順極まつてゐる。まさか警察國の空氣に喘いで來たからでもあるまいが、兎に角從順極まつてゐる。中には女もちらほら見える。大分猛烈な思ひ切つた事を書いてゐるのもあると云ふが、その癖見た所は矢つ張普通のお孃さん奧さん

てある。不思議にはにかんて、車の上て小さくなつてゐるのさへある。

人力車の行列はどうやらかうやら出來たが、尻の方は大分ごたつく。それは亡くなつた先生の家の名を書いた、小さい旗を立てた空車が、先へ出よう出ようとするからてある。花子さんの車、椽側の先生方の車、シルクハツトの行列掛の車なんぞは、動もすれば人を載せた車の間へ引き込んで、行列の邪魔をするのてある。幸に近處から驅け附けた巡査が制して、喧嘩をさせないやうにして行くのてある。

それても人數の割に混雜しないのは、馬車や自動車がないからてある。書肆なんとか館の主人は、自動車も持つてゐれば、馬車も持つてゐるが、葬に自動車て行つて好いか惡いかといふので、番頭に使つてゐる、洋行歸の文學士に聞いて見たが、要領を得ない。その位な事が分からないかと云ふと、「成程あなたに洋行はさせて貰つたが、葬式を見て來いとは仰しやらなかつたやうです」と云ふ。主人は何か言ひたいのを、口の內で噬み潰して、馬車の方にしようと決心して、仲働に命を傳へさせると、生憎蹄鐵を打ちに行つて、馬丁も馬もゐないといふ。そこてとう〳〵店のものゝ乘る人力車にして來たので、第二流の先生方の間に挾まれて、なる丈背伸をして、威張つてゐるのてある。第一流の先生の葬を、馬車が一臺も送らないのは、かうした因緣からてある。

併し爰に異采を放つた會葬者が一人ある。自動車にも馬車にも乘つてゐないが、此男は馬に乘つてゐるのてある。カアキイ色の軍服に大きい勳章を附けてゐるのは好いが、人力車の跡に附かうとして、人を載せた車と空車の間に挾まれて、馬はいれる。車夫は小言を言ふ。巡査も此男の處分には困つたが、

ふ役人に文句を言ふわけにも行かないと見えて、默つて見てゐた。とう〳〵騎馬の先生は空車の跡に隨つて附いて行く。「やあい、えらい人の葬に、あんな尻の方に附いて行かあ」と、子供達が囃してゐる。

これて行列は出來た。

行列は凡二三町續いて、表通を練つて行く。電車は留まる。往來は支へる。馬車のない葬には珍らしい盛況てある。

時は維れ明治四十三年五月二十日である。や、忘れた。まだ場所を言はなかつた。場所は無論日本東京の山の手てある。丁度此日に倫敦ては、Edward, King of the United Kingdom of Great Britain and Irland, and Emperor of India を葬り奉るのてある。東京ては第一流の小說家、なんとか主義の創作家、布衣の戴冠者たる此先生を葬るのてある。

恰も好し、天晴れ氣爽かてある。春過ぎて夏はまだ來ない。寒くもなければ、暑くもない。若し雨ても降らうものなら、棺側の御歷々を始め、準第一流の批評家、同新進作家は、ぬかるみに足を踏み込まねばならなかつたのてあらう。若し風ても吹かうものなら、どんなにか埃を浴びたことてあらう。

往來の所々ては彗星が見えるといふので、どんな時ても綽々たる餘裕を示す東京の市民が、のん氣に天を仰いてゐる。それがみんな天の方をよして葬の行列を見る。中に交つてゐる學生が銘旗を讀むと、その連の二三人は棺側の四人をじろ〳〵見て、あれはなんとかだ、なんとかもゐると、指ざしをして囁き合ふのてある。

「矢つ張彗星的人物だね」と、一人の學生が云ふと、連の學生が笑ひ掛けて、慌てゝ口を噤んだ。

行列が紀尾井町に來て、先頭が辨慶橋に掛からうとした時てあつた。それまてにドラナチユウル君は頻に何か花子さんに囁いてゐたが、ハンケチを顔へ當てたり離したりして歩いてゐた花子さんがいつの間にか妙にはしやいて來て、小聲て何やら留めどなく饒舌り出した。もう手にはハンケチを持つてゐないのてある。行列掛をしてゐたシルクハットの先生は、大相氣になる樣子て、耳を欹てゝ聞かうとするが、ぢき側て言つてゐるのがどうも好く聞えない。兎に角日本語には相違ない。花子さんが折々「いやあね」とか、「まさか」とか云ふのが聞える。シルクハットは、はてな、大使館の通譯てもしてゐる人か知らんと思ひながら、一しよう懸命に聞かうとしてゐるので、行列がどこを歩いてゐるか、一切知らずにゐた。

先頭が辨慶橋に掛からうとした時てある。ドラナチユウル君が花子さんの、赤くなつてゐる耳の傍へぴんと尖つた八字髭を持つて行つて、「一寸御免なさいよ」と云ふのが、シルクハットの耳にはつきり聞えた。始てドラナチユウル君の詞がはつきり聞えたのてある。

さう云ふかと思ふと、ドラナチユウル君は棺の右をつと通り拔けて、位牌を持つた書生さんにも、器械刈の坊さんにも構はずに、花の行列を駈け拔けて、白張提灯の行く先頭の處へ行く。それが殆ど空を飛ぶやうなのてある。

花子さんはうつとりとなつたやうな工合て、少し大き過ぎる口の周圍に、夢を見てゐるやうな微笑を

湛へて、noctambuloかなんぞのやうに、ふら〳〵と歩いてゐて、今迄熱心に會話をしてゐた相手の突然ゐなくなつたのに、丸で氣が附かないのである。

シルクハットは怪しい西洋人の駈け出すのを、口を大きく開いて、あつけに取られて見てゐたが、それても花子さんの魅せられたやうな、變な樣子に丈は氣が附いた。併しそんな事を思つたのも一刹那てある。なんと思つたか、花子さんの、少し胡坐をかいた鼻の尖を擦るやうにして、花子さんの跌きさうになるのも構はず、行列の右に廻つて、西洋人の跡を追つて駈け出した。

併しもう西洋人の影も形も見えない。坊さんを載せた車も、書生さんを載せた車も、のろり〳〵と進んて行く。晴れ渡つた空の下を、長い長い花の行列が行く。花の尖がゆら〳〵動く。午前十時半頃になつて、大分暖かいのて、人足は汗を掻いて、眠さうな顔をして歩いてゐる。

此光景は思慮する遑のないシルクハットの目に、只一刹那映じたのてある。シルクハットは花の行列を駈け抜けようとあせつてゐるのてあるが、體は前屈みになつて、看板のシルクハットが脱げさうになつて、氣ばかり揉めて、足は一つ所を踏んてゐるやうな心持がしてゐるのてある。

突然恐ろしい物音がした。まだ號砲が鳴るには早い。今日は三一會堂て英國の大使が法會をするので、弔砲が鳴る筈てはあるが、それにもまだ少し早い。物音も大砲とは違つてゐる。なんだか「halte !」と云つたやうてある。人間の聲てあつたやうだ。いや。人間以上のもの丶聲てあつたやうだ。

不思議にも行列がぴたりと留まつた。花を持つたものは花を持つた儘、片手て汗を拭き掛けてゐたも

のは汗を拭き掛けた儘、棺を擔いでゐるものは棺を擔いだまゝ、棺側を俯向いて歩いてゐる人は俯向いたまゝ、反り返つて歩いてゐる人は反り返つたまゝ、花子さんは口の周圍に微笑を湛へた儘、歩調の揃つた西洋人は揃つたまゝ、歩調のめちや／＼な日本人はめちや／＼なまゝ、車夫は車の梶棒を握つたなゝ、カアキイ服の人の乘つてゐる馬は左の前足を地に着けさうにして、對角になつてゐる右の後足を擧げさうにしたまゝ、何もかも凝り固まつたやうになつて、ぴたりと留まつたのである。

最も可笑しいのはシルクハツトである。體を前屈みにして、帽が脱げさうになつて、飛行機なしに飛んで見ようとでもしてゐるやうな風をして、そのまゝ留まつてゐる。若しこれが彫刻なら、餘程大膽の position である。地震圖には不向きである。

その癖此シルクハツト先生は、精神が至極健かである。「靑天白日にけしからん」、「不自然極まる」、「isme に背いてゐる」、「第二流だ」、「自然の誤譯だ」、「消極的だ」、「形式ばかりだ」、「半無機物主義だ」といふやうな判斷が、不規則不順序にシルクハツトの下で湧き立つてゐる。

どうにかして動いて見ようと、氣を揉んでも、足は磁石力で吸ひ附けられてゐるやうで、體は銅像にでもなつたやうで、ちつとも動かない。こんな天氣の好い日にあり勝の事で、靜まり返つた空氣のま海面に、小さい波動が生じたやうに、どこからか風がさつと吹いて來るかと思ふと、旋風の錐形を見るやうに、丁度シルクハツトの留まつてゐる足元から、二尺ばかりの土埃の柱が立つて、それが傾いて、シルクハツトの着てゐるオイアコオトの裾を捲つて行く。それに上衣の裾は少しも動かないのである。

シルクハットはあせりにあせつた。實は其時間は三分か四分であつたかも知れないが、シルクハットの爲めには、小一時間も立つやうに感じた。辨慶橋からこつちは、いつも靜かな所で、丁度此間人通りはなかつたが、橋向うからは現實の世界の鈍いどよめきが聞える。赤阪見附下で交叉する電車が、びいんと云つて電線を鳴らして行くのも聞えるのである。

どうした機會でか、シルクハットはふいと自分の體の動くのを感じた。花を持つてゐる人足は動かないのに、自分の體丈が動くのである。締めたと思つて、歩き出しさうにすると、平均を失つてあぶなく倒れる所であつた。はつと思つて踏み止まつて、こん度は下腹に力を入れて、そろ〳〵歩き出す。難有い。慥かに歩ける。

歩けるには歩けるが、田の中をでも歩くやうに、足をたがひ違ひに引き拔くやうにしなくては歩けない。縛は半分解けたのである。シルクハットは汗をたら〳〵流して、半縛主義半四主義の歩き方を遣つてゐる。丁度鷺のやうな歩き附である。

不馴な士官が、兩脚規で地圖の距離を測るやうに、シルクハットはやつと長い長い花の行列を通り越して、先頭に來て見ると、怪しい西洋人が橋の袂に、橋を背にして立つてゐる。切の長い目の奥から、今まで氣の附かなかつた異様な光を射出して、さも滿足げに凝り固まつた行列を見渡してゐるのである。

漸く傍まで兩脚規を運んで行つて、こは〳〵西洋人の顏を横から覗いてゐると、「氣樂な葬だなあ、まだ休んでゐやがる」と云ふ聲が耳元にする。振り返つて見ると、辨慶橋の欄干に淺葱色の風爐敷を頸に

巻いて、頤の下で結んだ、いが栗頭の小僧が腰を掛けて、足をぶら〱させながら、さう云つたのであつた。

シルクハットは此小僧を見て、辨慶が七つ道具でも背負つて、尻押に出て來てくれたやうな心持がした。それと同時に吹き消したやうに、體のぎごちないのが直つた。

「Que faites-vous, Monsieur ?」

餘程手強く言ふ積であつたが、遺憾ながら聲が顫へてゐた。西洋人はその異様な目の光を、ちよいと浴びせ掛けて置いて、蛇がおこつた時に出すやうな、しゆつしゆつといふ聲を出す。それが耳を刺すやうで、一つ一つの詞が鋭く響くのである。

「Tais-toi ! -Ne-bouge—pas !」

最後の詞が響き已んだかと思ふと、シルクハットの體は又凝り固まつたやうに、動かなくなつてしまつた。こん度は姿勢がさつきの時より好いので、餘程安全である。

併し安全だからと云つても、氣樂になつてはゐられない。こんな筈はない、有り得べからざる事だと思つて、又あせり出す。そしてあせつても、あせつても、駄目なのである。

此時西洋人は並木の入口に立てた銅像かなんかのやうに、二列に續いた花の前に立つて、行き留まりの坂の降口に近い處に留まつてゐる棺の邊まで、只一目に見渡して、例の鋭い聲で、何やら唱へ出した。獨逸語や、英語や、佛語ではない。伊太利、西班牙、葡萄牙、ずつと飛んでスタアタだのポオランド

たのは、シルクハットの先生に讀めも譯せもしないが、横濱の商館にゐたとき聞き覺えて、おほ方さうだらう位は分かる筈だ。そんなら古い拉甸や希臘かといふに、さうでもないらしい。なんだか丸で見當の附かない語である。Hébraïque どもではあるまいかと、ふいと思つた。

實はシルクハットに此語が分からなくて好かつたのである。なぜといふに、若しそれが分かつたら、こゝへ書くことになるかも知れない。さうすると固有名詞や動植物の名を、羅馬字で書いた位の事ではない。秀英舍にも築地活版所にもないやうなタイプを挾んだ文章を出すといふ、途方もない事の爲めに價を作るといふわけになつたかも知れない。想像するだに身の毛も彌立つ次第ではないか。

西洋人はなんだか分からない事を唱へ已んだと思ふと、行列へくるりと背を向けて、ぐん〳〵橋の方へ歩き出した。シルクハットも自分の體をごつりとこづかれたやうな心持がして、器械的に、否諾なしに、西洋人の右後に引き添つて、橋の方へ歩き出した。「やあ、歩き出しやあがつた」と、さつきの小僧の云ふのを見ようと思つたが、首が少しも曲がらない。分列式をする兵卒のやうに、眞直に前へ向いて歩くのである。背後には行列の附いて來る足音がする。行列が附いて來るなとは思ふが、振り返つて見ることは出來ないのである。

お察しの通りである。行列は附いて來る。花や旗を持つた人足も、棺も棺側も車も馬も眞直に前へ向いて附いて來る。誰一人餘所見をすることは出來ないのである。

そしてその歩く速度が頗る早い。運轉手が慌てゝ止めた電車の間を拔けて、赤坂見附下の廣場を斜に

横切つて、赤坂の通を行列が行く。

一つ木から豐川稻荷前、靑山御所のあたりでは、葬の通るのは珍らしくはないが、こんなに急ぐ葬は見たことがないので、往來のものが皆立ち留まつて、目迎目送をするのである。人力車も留まる。自動車も留まる。町家からは勿論、警察署のお役人迄駈け出して來ては、立ち留まつて見るのである。只電車丈は運轉してゐたが、巡査がなんと思つたかそれも止めてしまつた。皇族の通行の外には例のない事である。

速度は次第に加はつて來る。靑山の通から墓地へ曲がる横町の角へ來た頃には、行列は駈足になつてゐる。

此角には、先へ來て待ち受けてゐた會葬者が大分ある。これは角から棺の跡へ附いて行つて、齋場の受附では、山の手から供をしたと見せ掛けようとする、ずるい連中である。

なんだつてあんなに急いで來るのだらうと、不審に思ひながら待つてゐると、黑い服を着た西洋人が一人先頭に立つてゐる。それが大股にゆつくり步くやうに見えてゐて、不思議に早い。すぐ跡を、道の向側に寄つて附いて來る、シルクハツトの先生は一しよう懸命に駈けて、やつと西洋人と自分との間に同じ距離を保つてゐる。それから跡は提灯も花も皆駈けて來るのである。

そりや來たと、覺えず一足横町の方へ下がるとき、西洋人を先に立てて、行列は角を曲がらずに、靑山の通を眞直に行き過ぎる。丸で突風の吹いて通るやうで、見てゐるのが目まぐるしいのである。

いつも此角に立つてゐる巡査が、道を間違へたのだと思つて、一足前へ踏み出して、「もし／＼」と云ふ頃には、もう花の列が通り過ぎて、棺が駈けて行く。銘旗も四句の偈の旗も、水平に靡いてゐる。棺のすぐ背後を、女が一人附いて駈ける。束髪がほどけて、入毛と一しよに、これも旗と同じやうに、水平に靡いてゐる。圓く太つた太股の中程まで出して駈けるのである。

早いわ早いわ。あれ、車が、空車がと思ふ暇もない。一番跡に附いて行く軍人の乗つた馬は、galopでこそなけれ、trot dur を踏んでゐる。馬の尻尾は、馬場先に据ゑてある楠公の銅像の馬と同じで、これも水平に靡いてゐる。

角に立つてゐた連中は、皆口を大きく開いて、茫然として見送つてゐたが、稍暫くしてから、慌てたやうに、一度に物を言ひ出した。

「どうしたと云ふのだらう。」

「嘘のやうぢやないか。」

「馬鹿げてゐるぢやないか。」

「只事ぢやあございませんぜ。魔がさしたのぢやあございますまいか。」これは明治の初年に小説を書いたことのある爺いさんの、生き殘つてゐるのが云つたのである。

「早く警察へ届けよう。」

「軍隊を出して貰はうか。」

がや〳〵云つてゐる最中に、三一會堂でする儀式の爲めに打つ號砲の音が、微かに聞え始める。一同本當に我に返つて、齋場へ行つて、先發の連中や、茶屋に休んでゐた會葬者と相談して、警察署へ屆けに行くと、それより先に巡査が見たまゝを報告してゐたので、先々の駐屯所へ電話を掛けてゐる所であつた。

電話はそれ〳〵通じたが、駐屯所にゐる一人か二人の巡査には、手の附けやうがなかつた。

行列は其日の暮方に多摩川の岸で止まつた。ドラナチユウルと名告つた西洋人を始として、跡の三人もどこへ行つたか、更に知れない。責めてもの手掛かりと、シルクハツトの先生のポツケツトにあつた名刺を出して見ると、これ丈は慥かに殘つてゐた。併し不思議な事には、ドラナチユウルと書いてあつた筈の、一枚の名刺がなくて、其代りに見覺えのない一枚の名刺がある。その文字は Dr Diabolus としてあつた。警視廳へ名刺が上がつて、どこの印刷所で印刷したかと、色々に取調べられたが、とう〳〵知れずにしまつたさうである。

最も喜ばしいのは、非常な駈足をした大勢が至極達者で、一同めでたく東京へ引き返した事である。

最も最も喜ばしいのは、亡くなつたと思つた先生が棺の中で蘇生して暴れ出されたのを、一同が助け出した事である。

文壇萬歳萬々歳。（完）

和歌

尾上柴舟選

天野謙二郎

○

いづこより出づる言葉ぞわが胸の底のあるものうべなはざるを

柔かき土の匂ひをなつかしみ庭の樹かげに倚るまひるかな

わびしさに堪へず走りて野にいでぬあゝ青麥は眼をつよく射る

眼をあげて六月の野の青きみるわが魂よいづこへゆくや

木も草も女のごとく吐息する夕べの岡の空のしづけさ

悔といふほどにあらねどいたずらにさうどきにける昨日をなげく

ものいはず相見るのみに別れゆく巷の人に今日もまじれり

大地はめぐりゆくなりその上に君とわれとは物を思へる

大腦の底のいたむをやはらかき寐臺にもたすときのさびしさ

六月の野にみつ晝の明るきに走らむとする若き魂

こゝろよき夕べの風にほの白き葉裏をみする梢林かな

やはらかき光りあまねく照りわたる五月の野べの遠樹立かな

そうどける友をはなれてひとりのみさびしうすむもほこらひにして

夕されば空にも地にも木立にも青きなげきのたゞよへるかな

三浦曉村

○

ふくよかに木の芽萠えづるやはらかきにほひたゞよふ春のくれがた

ほのかにも寢息の如くかをりくる春の夕べのにほひかなしき

わが聲のかぎりうたはむ大海の春の夕べの波ひかる前

がらす扉に凭りて眺むる海の面の午後の反射のひかりするどき

ましろなる積浸（かはらひた）して一すぢの水ながれゆく矢田のあけぼの

草に臥すひとみさびしくうるみゆく遠き彌生のうすぐもりかな

菜種咲く中を流るゝ堀割の水に殘れるうす明りかな

漠としてはてなき野邊のさみどりにうつろふ野火のけむりさびしき

○　小澤紫紘

日毎日毎母にはなれてやはらかき君がなさけに生くべくならぬ

別れきてみだれし胸のいやさらにみだるゝおぼゆあれ蛙なく

雨やみぬいとひそやかにとのもよりみどりのかをり流れ入りぬる

かなしみもよろこびもいまけじめなしあやめさく野の有明月夜

むらさきにしたゝる季初夏のあやめの花に君は君す

そことなく水色の霧野にみちぬ悲しう君をまた思ひ出ぬ

いづ方に行かば悲しき心はもまぎらはすべきふとかく思ふ

青う凪ぎし初夏の空こともなく安けきさまに筑波浮べり

もの皆に裏切りされし心地して一日かなしううなだれてゐぬ

○　岩谷莫哀

雲はみな溶けて痕なき大空の底より春の悲みぞ湧く

靜やかに木挽が家のかたへなる茱萸の林をてらす春の日

たゞ一人山に入りては茱萸の實をたうべてかへる吾なりし哉

夜の港帆ばしら白くそびえ立つ空にうるめる星の眼よ

牧場の窓より庭の葉ざくらの梢など見てありと思ひね

筍の日に〳〵のびるよる戀の山し忍ばゆくちなしの花

よきほどの飢ゑよ疲れよ春の日のやゝかたぶける野に横はる

梅の實のやゝふくらみて重ねむき皐月の窓に頰杖をつく

御前竹(ごぜだけ)の垣根の蕗の葉の青み庭しめ〳〵と春は行くなり

○　　小島ます子

夜にして鶯聞くと窓あけず安き眠を樂しむ人よ

何しかもあまた願はむありて世に物倦じすなる性とれよ神

共に泣き共に笑むべくとこしへの隔は神にさゝげしものを

君が爲朝の野に出て桑の葉の柔きをつまむよき春は來ぬ

靑葉若葉心地よき日をよしとして君が衣を裁つ朝かな

水近き石にもたれて眺めやる暮れ行く春の靜なる空

あかず吹く笛の音聞けばいつとなく枕のほしき春の日の午後

悲しみを悲しみとして泣き得るぞ我か大なる幸と知る

○　　下村淳

事もなく一日過ぎたり冷やけき布團の中に來る日を思ふ

何ものも心よすべきものをえずいたく疲れてかへりきたりぬ

櫻見るされどもさびし花やげる人らうらやみ室にかへりぬ

いたくゆるゝ三等室の片隅にひとりしあればものぞかなしむ

たゞ一人心おきなくさまよへる四月の野べのしづかなるかな

○　　本山秀雄

故郷のま白き山の見ゆる間はかすかながらも安きを覺ゆ

常磐木の山路は悲し下駄の音とまればもとの靜けさにして

冬の日は大浪の手あげて大空も打たんとぞする北國の海

月あかき春の巷を行く風にかさこそ動く紙の一片

曇り日や一鳥啼かず崇き木は重き悩みに動かず
ありける

○　大場皎

綻ら吹く初夏風に濃緑のそよぐを見れば心足ら
ひぬ

桃の花紅ら開きぬ笑顔してわが靴を取る娘の姿
見ゆ

細長く倒れしわれの影を見てひそかに心さびし
くなりぬ

春の風鳥の和毛の柔かさなしてのび行く若草の
うへ

○　正木哲夫

草の家の燈火寂し遠山はかたちもわかずほの黒
く見ゆ

若草の大野のはてに山もなし春の日けぶるその
野のはてに

あたゝかき暖かきをとおひ渡るそのさすらひの
鳥をしぞ思ふ

青草の大野と淡き遠山とながめてをれば泪こぼ
れぬ

○　江上魚梁

夏陰の青きがなかにうすぐれて少女の白き顔ば
かり見ゆ

天地の低き微動にひたりつゝ曇れる春の夜をひ
とりぬる

ほしひまゝに野より海よりわが得たるかすかに
低きものゝ響よ

白々と濁れる海の面にひたり輪を畫きつゝ歎き
ゆく鳥

眺めうみ黄なる小塚のいたゞきに行きつかれた
る足なげやりぬ

○　小河原素山

子は笑みぬ世の喜びに笑み初めぬか弱き父の性
も見えなく

すこしづゝものゝへり行く心地して靜に悲し午
后の四時頃

かすかにもいやしき心きざしたるこの夕ぐれを
いかにすべけむ

人々は笑へと云うて吾れに強ゆせむ方なさに少
し笑へり

○　水上おぼろ

山近き牧場に牛の草食ふを乳母につれられ見に

行きし日よ

やゝ強き光の雨は海の面にふりそゝぐなりねむたき眼かな

雨ふる日なにこゝろなく裏窓を開くれば白うからたちの咲く

痛ましう咲かで凋みし花瓶なる花を見てあり四つのまなざし

○　若林星骨

主は天にいまさずなりぬ灰色の雲走り來て氷雨をぞ投ぐ

大空に日月は照り大地に花咲き滿てり泣くは誰が子ぞ

大空のあまたの瞬夜となれば白き涙をたゝへてぞ泣く

○　傍島芳草

ふとなりぬ停車場の名のローマ字を誇りて讀みし頃の心に

曇り日や比良と比叡とわが汽車の間(あひ)を垂れたるみづうみの雲

船べりに凭れてしづに思へらくこのわだつみをいかがうたはん

○　栗田羽衣

別れ來て君の心をさま〳〵に靜に思ふあまゝかなしみ

龍燈の華やぐ春の夜の街あてどころなくさまよひてゆく。

二三日心そはめき落ちつかずその故よしをいぶかしみ見つ

○　水谷紅桂

人戀ひて月のうるみにそぼぬれて今青柳の町を歩めり

あくびして春の日永を佗びてある午後を靜かに海の音する

町を出て野の道を行き青草をふみてやう〳〵胸なごみけり

○　尾崎白申

高ぶりて猶も足らはぬその我をひとりの時はつよくあざける

剝製(はくせい)に綿を詰めたる如くにも刺擊うけざる疲れし胸よ

あゝ鷗海の光にうれひなきごとくもまろき胸して舞ふよ

○ 飛川晶嶺

君が住む南の遠ゆ風ふけばみづみづしくも鳴る梢かな

今日もまた犯せる罪の一つあり君を戀しと思ひたること

野に出てゝ青の大空眺め入るにしばしは安きこの心かな

○ 高橋源左衛門

我が如く悲まんとて來ませしか初夏かげのわかき人々

風はまだやゝ寒けれど取りあへず春をもて來て麥畑におく

○ 大地不破

椿こそおちそめにけり見よ少女靜かに春は暮れてゆくなり

天地にひとり泣かましあめつちに獨り泣くより勝れるはなし

○ 尾崎渡水

こゝろゆくやさしき香ありおぼろ夜の若葉の森に風の渡れる

若葉せる木立に春の雨煙る其の山裾の午後をゆきける

津田汐汀

かなしみをうつし殘せるこの瞳しづかにとぢぬ湯にひたりつゝ

どよめきの外にことなき夕暮の町をあゆみぬ煙草などすひ

○ 柴田成致

ほのかにも涙ぐまるゝ夕ぐれに白花らす沙羅双樹かな

○ 小川水明

草もなき軌道の中に黄色の花のさくありかゝるさびしさ

○ 大地野の人

夜となりぬ小雨は止みぬ薄ぐらき川は微に聲たてゝ泣く

○ 塚田眞

皿にあたるナイフの音の淋しさやテーブル掛の白き夜更けぬ

○ 嘉多紫濤

色硝子續ける町の支那街の二階の窓のサフランの花

○ 大谷桃花

まばらなる松林よりやゝ高き丘にのぼりて海を見る哉

[illegible]歌は東京小石川區[illegible]町百三十三[illegible]

俳句

粽　高田蝶衣選

粽結ふに天氣變りを降る煤や　芹雨
水鷄戀ふる戰ぎの葦を粽かな　同
友遠方よりす恰も粽の日　同
三夫婦の健在に粽百を數ふ　同
神話めく謂れを粽巻く母の　黑佛
溫故會粽の饗に與りぬ　同
斗酒の後十五も食ひし粽かな　同
淺水の桶に浸れり粽笹　同
粽解けば早き蠅來て徂徠せり　如星
君待てば刻々乾くちまきかな　同
粽笹嵯峨の隱者に所望かな　同
粽つりて久し蚊の巣となりけらし　同
針の師に贈らん粽撰り分くる　冬城生
聟迎ふに粽結べり女人講　同
忌籠りの凹み眼や粽食ふ　同

粽蒸す香もす吾待つ母ならむ　不寐庵
笹の葉に酬ひこしけむ粽かな　同
草深き里に草分け粽かな　同
蛞蝓の涎あさまし粽の葉　狠子
粽饐ゆ早さも昨夜の雨むれに　同
慈孫富めど移らぬ翁の粽かな　同
馳走する琅玕の笹粽かな　蔗折
江に點々芦刈る人やちまき時　同
量を呼び粽に棋盤命じけり　同
騎射終ふる殿原に粽まゐらせん　螳郎
草の戶や簾深きに粽蒸す　同
菖蒲熨斗添へてをかしや笹粽　同
ませ口の子を黨叱す粽解く　寒泉
妻とせばあきならぬ人や粽結ふ　同
解き寄せし粽殼に雨の音聞かん　同
他國者の蔭口も粽品評め　風水
元服も御聲かゝりや笹粽　同
輪講の後持寄りの粽かな　同
粽一連石となるまで忘れけり　翠雲
眞似て見ん山の長者が粽振り　同
足垂れば湖につく椽の粽かな　月[illegible]

待ちぼけの粽の笹の干からびぬ　同
武夫の男の兒を愛す粽かな　夕影
笹粽千代田の城に雲かゝる　同
粽食ふ口の廣大相しけり　麻生
そら手禁呪ふ手首の絲や粽結ふ　同
繪紙など粽の殼も吹かれけり　耳山
野嵐の背戸口吹くやちまきの尾　同
俗緣の家に尼ぜや粽卷く　明兮
粽すや邊疆に干戈もなかりけり　同
厩まて及ぶちまきの薫かな　易川
粽懸けんに呼ぶ鶴脛の一僕よ　同
さら〳〵と水に捌きけり粽笹　倨人
粽結うて些事に離婚を悔ゆ婦哉　寛錢子
結び合ふお夏が宿の粽かな　井川
熊笹の憎き粽も食ひけり　而鳩
米袋の笹の香とれぬ木鉢かな　水竹
道聽途說ちまきの笹をほぐしけり　紫明
末節になづみ粽も喰はぬなり　寸江
粽結ふ喋々喃々と　渾滝
ちまき殼水に捨つれば小舟とも　白雀
神前の粽さらはぬ鴉かな　翠雨

此原よちまきの笹に名あるのみ　靜流
馬印を思ふ玉垂る粽かな　不知老文 摩天郎
嫁入荷買ひ得て粽解く心　秀葉
御分家へ老女粽の使かな　卯月
粽一つ石とならんとし今日も有り　唐辛子
前陌の奔馬見る日の粽かな　美川

課題
蠅　六月十日〆切
旱　七月十日〆切

規定
△應募句は淡路國假尾任高田蝶衣宛
△一人三十句以下△用紙は半紙の事

雜詠　蝶衣

醉歌して來るに窓押せば辛夷降る
干蕨食は粗なれど美人鄉
天人の裳に抄ふ雲雀かな
屬強まじなふ僧やなく雲雀
衣更へて投梭の袂搨る也
新法を知らて犯しぬ更衣
蓑曇り雨女又訪ね來し

評論

英皇エドワルド崩御

英國皇帝エドワルド第七世陛下五月六日午後十一時四十五分崩ず、陛下始め佛國に遊び、ビアリッツに停まる數月、其の海岳の風光を觀賞せられしが偶々風邪に罹り、歸來氣管支に病ひを得、俄かに重體と爲られしも、陛下は侍醫の諫止を斥け、死に瀕するまで事務を見玉へりといふ

遺骸は十七日バッキンハム王宮より議院内なるウエストミンスタアホールに移し、玆にて公衆に拜觀せしめ、廿日倫敦を距る二十哩なるウインゾル宮殿内に葬むる、歐洲列國君主の參列せらるゝもの九、皇族其の他は五十有餘、式典實に莊嚴を極む

列國また多く弔祭式を行へるが、我が東京に於ても、廿日マクドナルド大使主となりて遙弔式を擧行し、天皇皇后兩陛下御名代として皇太子、同妃兩殿下の御參拜あり、翌廿一日は本派本願寺築地別院に同じ式を行ひ、我が皇族及びマクドナルド大使、各國使臣、官民等多く參拜し、同盟國民として皆哀意を表せり

エドワルド帝は、其の舊式古典を保守するに嚴なるも、然かも平素平民的にして最も英國民の敬慕を得られしのみならず、列國君主と親みを重ねて平和に貢獻せらるるの多き、竟にピースメーカア（平和の建設者）の尊稱すら得玉へり、實算七十なるも、御在位は僅かに十年に過ぎず、最も哀悼すべき也

同盟國の新皇帝

英國憲法は先帝崩ずる時、直ちに皇太子即位せらるゝを例とす、故にエドワルド皇帝の崩ぜられし翌七日皇太子は樞密院議官及び上下兩院議員の重もなるものを召集し、皇帝としてヂョルヂ第五世と稱することを告げ、先皇の遺業を繼紹し、殊に憲法擁護に盡瘁すべき

ことを宣告し玉へり、帝實算四十六、皇后御壽四十三

我皇室の御慶事

第三皇女富美宮允子内親王殿下と朝香宮鳩彦王殿下と五月六日御婚儀を擧げさせ玉ふ、鳩彦王は久邇宮の御弟にして、允子内親王は御身長五尺二寸七分に上らせ玉ひ、御强健無比なりと申す

竹の園生の彌榮えさせ玉ふて、實に芽出度限りなれ、因に久爾宮妃俔子殿下五月十六日第三皇子を御分娩あらせられ、廿二日邦英王と御命名あらせらる

日英博覽會開會

倫敦に催ふさるゝ日英博覽會は、五月十二日開會式擧行の預定なりしも、エドワルド陛下崩御のため、幾んど延期と爲らんとせしも、先帝が殊に叡慮を用ゐさせ玉へる緣故に由り、新帝チョルヂ陛下より特旨を下され十四日より式典なしに開會し十六日の如きは幾んど五十萬人の來觀者ありき

倫敦の諸新聞紙は筆を揃へて其の成功を祝せり、我が製作品の同盟國人に領解せられ、殊に其の美術的の事物の多大なる感興を惹けるは、吾人の私に悅ばざるを得ざる所とす

日露協商說

露國外務大臣イスヴヲルスキー伯と、我が本野大使との間に、滿州及び蒙古に關する良好なる妥協を爲さんとせしは事實也、而して兩國の親善を忌みて、之を破壞せんとする陰謀の企てられしと亦幾んど蔽ふ可らざるに似たり

清國に於ては、寧ろ進んで日露兩國と親み、以て東亞の平和を維持するに如かずと爲すの說あり、而して獨逸諸新聞紙は、歐洲に於ける幾多の協約と日露協商とを目して獨逸を包圍するものと做し、頗ぶる不平の氣を吐けり、ピースメーカアたる英皇の崩御後、歐洲の覇權或は獨逸皇帝に移らんとす、知らず外交局面の將來如何、獨帝はバッキンハム宮に於ける會食に於て早く平和を提唱して列席の諸國元首皇族大臣等を疑惑せしめしといふ、吾人は少からざる興味を以て、其の成行を注視せんと欲す

文部大臣の責任

政友會の調査委員會は、小學校教科書の不足を以て、文部大臣の責任なりと做し、全會一致を以て之を次期議會の問題と爲すに決定したり

去年の高等商業學校事件は、幸ひにして政治上の問題たらざりしと雖も、文部大臣に取て一個の負傷たりしや疑ふ可らず、今や衆議院に多數を制する政友會にして、此の學制改正案に反對し、且つ教科書不足問題に就て、斯る見解を有する以上、文部大臣不信任案は、必らず次期議會に提出せらるべし、吾人は文部大臣のために之を悲まざらんと欲するも能はざる也

蓋し文部大臣は、現內閣中に於て最も無能なりとすると、黨人間一般の輿論也、一部黨人中より嫉視せらるゝと未だ大浦男、後藤男の如く甚だしからざるも、不人望は乃ち之に過ぐ、而して世を騷がすべき事件の多く文部省方面に續出し、續出する每に攻擊の衝點と爲る、これ大臣及び僚屬の切に反省すべき所ならずや

官府何ぞ緩慢なる

倫敦に於て六月廿一日より三日間商業會議所及び商工業協會の第四回萬國聯合會を開くに付、日本の代表國使へも出席を求むべく、議題に渉つて其の次第をば四月廿九日英國大使館より我が外務省へ通牒したるに、外務省は五月九日始めて農商務省へ移牒し、而して農商務省は五月廿一日に至るも、尙ほ東京商業會議所へすら通告せざりき

外務省は何故即日之を移牒せざりしや而して農商務省亦何故に速かに各團體に通告せざるや、吾人は新聞紙の所謂官廳の繁文褥禮なるものに首肯せざる者なるも、此の事實を視るに及びては、實に啞然たらざるを得ざる也

政府眞に政務の刷新に心あらば、斷じて此の如き風儀を更めざる可らず、先づ當事者緩慢の責任を糺し、兩省の次官若くば局長を懲戒する勇氣なき乎

第三回國債償還

政府は五分利付の整理公債七千萬圓、軍事公債六千萬圓、帝國公債六千萬圓、計一億九千萬圓を償還するに決せり、此の內六千萬圓は外國人買取れるが故に、

直ちに巴里發行の四分利外債より償還し、殘り一億三千萬圓を内地に於て償却せんとす、此の一億三千萬圓中には四分利乘換を求むるもの亦多かるべきを以て、現金償還高は、多くも六七千萬圓を超えざるべし、此の利害に對する卑見は、篇首の論說欄内に之を盡せり

青森市大火

五月三日午後青森市火を失し、火焰猛烈殆んど全市を焦土とす、書類の風に飛ばされて遠く八甲田山を超しもあり、一分間に七戶を燒失せる割合なりしといへば、風力の猛にして火焰の熾んなる、全く財物を搬出するに暇なかりしを知るに足る

東北一般瓦葺にあらずして板葺也、改めざる可らず但だ東京と雖も、瓦葺に改めしは八代將軍吉宗以後なりとす、貧寒なる東北に於て、板葺を瓦葺とすると頗ぶる重き負擔たらずんばあらず

首無し女事件

五月中最も俗情を動かしたるは首なし女の死體の深川の堀より發見されし事なり、去年五月鈴ヶ森に同一の事あり、其の何人たると犯人の誰たると、今に分明せざるに今又同一事件あり、俗人間の好奇心を煽せるも宜なりと謂べし

但し犯人の誰たるよりも、被害者の何人たるの分明せざるに觀れば、被害者が社會の水平以下遙かに卑く且つ暗き所のものたるや疑ふ可らず、良家の子女若くば下婢ならば、其の家族又は雇主より既に知らる可ければ也

被害者既に分明ならず、犯人の容易に檢出されざる亦當然のみ、唯だ被害者が卑く且つ暗き所のものたるがために、内務大臣警視總監の責任論を生ぜざるは幸ひ也（以上ＸＹ生）

英皇の崩御と英國外交の前途

英國皇帝エドワード七世、五月六日午後十一時四十五分、倫敦バッキンガム宮に於て溘焉崩御あらせらる、誰か痛悼の想ひに堪えむ、

帝御齡六十九、加ふるに平素心臟病に罹らせ給ひ、佛國ビヤリツ、墺國マリエンバッドに靜養し給ふこと殆

んと例年の事也、今回の訃報は俄然として至りたるも全然豫想外とも言ふ可からざるか如し、然かも孰れにせよ、是英國に執りての一大打擊也、將た其同盟國たる日本に執りての打擊也、

蓋し現今歐洲否な世界の爭鬪は、或意味に於て英獨兩國の爭鬪、角遂ならすんはあらず、而してそは大なる程度に於てエドワード七世對ウヰリアム二世の競走と見る可きものなりき、孰れが早く目的地に達す可きかは衆人の共に注目しつゝある所なりき、唯それ今日迄の結果に徴せば、英帝こそ月桂冠を戴く可き運命にありたりしが如し、

試みに見よ、獨帝の熱心に企圖せる所は、三國同盟を鞏固にし、英佛接近を妨け、更らに獨露の協力を見んとするに在りき、斯くの如くにして歐洲に於ては英國を孤立せしめ、極東に於ては日英同盟を相手に包圍攻擊を行はんことを欲したりき、他なし、此手段に依りて現勢を變動せしめ、老大的英國をその優越的地位より逐ふにあらずんば、新進の獨逸の如きは殆んど發展の餘地を得るに苦しむ可きを思はしむるものあれは也、然かも此獨帝の希望は年と共に水泡の如く消え行けり、先づ伊國は英國の媒介に依りて佛國と握手し今や却て同盟中の一國墺國を相手に海軍擴張を試みつゝあるにあらざる乎、一九〇四年英佛協商成り、埃及摩洛哥問題の解決と共に二國は半同盟の境遇に入りたるにあらざる乎　而して一九〇七年英露協約愈成り、西藏波斯阿富汗問題定まり、是亦眞成の親和を見るに到りしにはあらざる乎、

斯くの如き英國外交の成効はすべてをエドワード七世の功に歸す可からさらんも、そが多大の貢獻をなしたるに至ては明か也、而して今や此名君長逝す、焉くんぞ英國外交の前途を憂へざるを得ん哉、

日英博覽會開會

アルビヨン島上、星落ちて、萬民憂愁に沈むの時、日英博覽會開かる、恐らくは此處一兩月間、同會も豫定の成効を收むるに苦しまんか、

遮莫、閉會迄一昨年英佛博覽會の觀客數四百八十萬位を占むるは難事にあらざる可し、吾人の憂ふる所は寧ろ他に在り、何ぞや、曰く、我官憲の出品選擇法は果して其聲言しつゝありたる「我國民性の紹介に力め以て日英同盟の根底を固うする一點に寸毫の貢獻だもな

し得可き乎是而已、

佛蘭西と西班牙

五月八日佛國に於ては下院議員選擧終了し、政府黨議員數增加し、西班牙に於ては同一の選擧ありたれとも政府黨の勢力は却て減退したり

同日を以て擧行せられたる兩國下院選擧が全然正反對の現象を呈せしは是確かに奇なる對照也、然かも飜つて思へば是寧ろ自然のみ、

佛國ブリアン內閣も、西班牙カナレヤス內閣も其政敎分離を固守若くは主張するは則ち一也、然れども佛國に於ては政敎分離も已に或程度迄成就し僧侶派の勢力亦頗る微弱なり、西班牙は則ち之に反す、從つてその不利なるものありしや拒む可からず、又佛國の政黨は政綱を重んするも、西班牙の政黨は首領を重んず、從つてモオレット退隱後（然かも現內閣の文相ロマノンス等の排斥に依れり）自由黨の勢力振はざる亦何ぞ怪むに足る可けん哉

然らば則ちブリアン內閣は此處暫らく無事なる可きも、カナレヤス內閣は遂に辭職の外なきを疑はず、而し之が後繼者は蓋し保守黨領袖たる前首相モォラ氏ならん乎、

洪牙利の政爭

今年は總選擧の年なる乎、一月には英國に行はれ四月には濠洲に行はれ、四五月にかけ佛、西兩國に行はれたるが、本月に入りては又々將さに洪牙利に行はれんとす、

洪牙利選擧の爭點は何ぞ、言ふ迄も無く洪牙利自治と墺洪協和との爭鬪也、殊に自治派の勇將ユーストが武者振りこそ勇しけれ、彼れ叫んで曰く、現へデルワリー內閣（今春一月就任）は前きのフエセルワリー內閣よりも更らに非也、是永久にマッヂャ民族を售らんとするもの也と而して彼や今正さに縱橫奮擊、中原の鹿を收めんとしつゝあり、

吾人は今回の政爭が如何に決定するかを豫言し得ざるも唯だ墺洪國の將來、幾多の禍機を包藏するに至つては遺憾ながら之を否認することを得ざるを悲む、

アルバニヤ人叛亂

最近の海外は平和也、之を破るものは僅かに土耳其のアルバニヤ叛亂而已、

アルバニヤ叛亂とは何ぞ、在君府一英人をして試みに之を語らしめよ、彼れ曰く「叛亂の遠因は前帝アブタルハミッド時代にあれど最近の原因は課税に在り、コソヴォ州知事マザル、ベイは郡部のアルバニヤ人に對し新たに一税を課したるが其使途は全く都市裝飾の費用に充てらる可きものなりき、由來同知事は贅澤好きにて先きにウスコブ市長たりし頃にも市立劇場を造り之が爲めに公金四千磅を投ぜることさへありき、從つて知事就任後、市街の裝飾は最も其欲せる所なりき、然れどもアルバニヤ人より見れば、是以ての外也、即ち彼等は其負擔をのみ受けて利益を受けざる可ければ也、是に於て乎彼等は飽く迄、地租、牧畜税、營業税以外の課税に反對せり、而して遂に官兵と彼等との偶然的衝突となり、端なくも大叛亂と變ぜる也と」

　事情斯くの如しとせば、吾人は土政府がかゝる地方官を選定せるを惜むの外又一語を加ふるを得ざる也

露國の芬蘭合併

露國の芬蘭自治剝奪案、五月中旬些細の修正を經て國民議會を通過す、是芬蘭人民の政治的生命を奪ひ、彼等を僻見と人種的迫害とを特色とするスラヴ民族の蹂躪に委せんとするものにあらざる乎、

一八〇九年亞歷山一世が、下せる自由なる憲法、然かも國步艱難の際芬蘭人を誘致して始めて公式に露帝の治下に服せしめたる所以の公約と見る可き同憲法、若し靈あらばそれ正さに號泣す可き也

白人濠州主義

濠州ディキン內閣辭職す、之に代ふるもの固よりフイッシャー氏の勞働黨內閣たらざるを得ず、

聯合黨何ものぞ、勞働黨何ものぞ、內閣の更迭一見我れに關係無きが如くにして然らず、

何ぞ哉、フイシャ氏の勞働黨は白人濠州主義を極端迄實行せんとするものなれば也、換言すれば飽く迄東洋人放逐を希望するものなれば也、

オルドリッチ氏退隱

米國上院の大立物、ネルソン、ウイルマース、オル

ドリッチ氏退隱の報至る、吾人は一葉落ちて天下の秋を知るの感無きを得ず、

オルドリッチ氏は何人ぞ、彼れロードアイランド州會議長を去り、米國下院に入り、次で上院に轉じて議員たること玆に三十年、今や同院の政務殆んど其意の如くならざるは無し、一昨年の幣制改革事業も殆んと彼の案也、將た昨年ペーン關稅法をして飽く迄保護的たらしめたるも亦彼の力也、蓋し上院內の各委員會は皆オルドリッチ派多數を占め、其機關は殆んと彼の支配下に在りたりし也、

然るに彼は今や如何にして退隱せざる可からざる乎、是他なし、米國民は今や漸く極端なる保護政策に飽き爲めに共和黨の內訌交々臻らんとすれば也、思ふに彼れ歲猶五十五、泰西の政治家としては未だ老ひたりと言ふ可からず、而して此擧を見る、恐らくは自ら共和黨內不平派の怨恨を一身に集めたるを悟つて黨の調和の爲めに高踏するものにあらざる無きか、

吁嗟下院に於ては先きに議長キャノン氏排斥事件あり、上院に於てはオ氏退隱の發表あり、米國政界の變動が著しく發展するは必之よりなる可し、

文星落つ

金聲玉振、靡然として一世を風動せる詩才文豪の凋落、一何ぞ頻々たるや、五月を春の盛りとする歐洲は今こそ快樂の候なる可きに、如何なれば獨り文壇のみ西風の響き多き、

曰く米國文豪マーク、ツヱン(四月中旬)曰く、那威詩人ビヨルンソン(四月末)吾人は之を想ふて轉た悵然たり

在米清國革命黨

米大陸は革命黨の隱遁所なる乎、西班牙伊太利の無政府黨は多數合衆國、亞爾然丁等に在り、朝鮮の革命黨に至ては布哇、桑港、デンツー諸地に在り、而して清國革命黨亦米國桑港、沙都に在るもの多しと稱せらる、先月載洵貝勒訪米の際、「殲韃族、復漢族」の檄文を發し米國諸新聞を驚かせるものゝ如きも恐らくは亦此徒輩なる可き也、

片々録

エール大學教授サムナー博士長逝す、博士は社會經濟の學に精通せるの人之を惜むもの獨り吾人のみならむや△ロオズヱルト氏巴里ソルボオン及伯林大學に講演し大に喝采を博す、米紙喜んで云是ロ氏が奈翁以來の人物たるに依ると手前味噌も玆に至て寧ろ愛嬌也△ヴエネジユラ國大統領大に佛國との友交回復成らざるを悲む、其志は憫む可し然かも其愚は笑ふ可し、敢て問ふヴ國は如何に佛國の債權を處分したる乎△英紙大に淸國政府が海關支配權回復に熱して爲めに條約を無視するを嘆く、條約無視は少焉らく措き海關回復を希望するは是れ寧ろ自然の勢のみ。（懷砂隱客）

二葉亭全集と藤村花袋二氏の短篇集

樗陰生

二葉亭全集第一卷は東京朝日新聞社から、藤村氏の短篇集「藤村集」、花袋氏の短篇集「近作十五篇」の二冊は博文館から出版された。近來出版された數多くの小說書の中で、僕は最も此三册の本に興味を感ずる。依て自分の思ふ所を一寸述べて見る氣になつた。敢て批評といふのではない。

長谷川二葉亭といふ人は、僕もチヨイ〳〵逢つた事があるが、何だかよく分らない人だ。非常に磊落な放な人かと見れば、又大變神經質で氣六つかしい人らしくもある。其言ふ所も矛盾に充ちて居た。「文學亡國論」をやりたいといつたり、自分は文學者ではない〳〵といひながら小說を書いて居た。あの人の人柄は他人によく分らなかつたのみならず、恐らく自分にもよく分らなかつたのかも知れない。「拔身の下に身を置いたやうな眞劍な心で小說が書けないて困る」といふ事は始終嘆じて居られたやうだが、實際あの人の小說にはいくらか眞劍になれない不眞面目な點がある。それは一つには德川時代から傳統を引いた舊き文學の戲作者流の態度ひから脫し切らなかつた爲めもある。あの人はよく三馬を推奬して居たし、又文章を書くときは紅葉山人の著書を繙讀したり、連句を味ひたりするといつて居られたが、どつか舊くさい、輕過ぎる、わざとらしい字句がヒヨイ〳〵と出て來る。然し字句のみならず全體の調子にも、どうも浮腰の處があつて、動かすべからざる權威？に乏しきの憾みあるのは、惟ふに「眞劍な心で小說が書けない」爲めであらう。人物としての面白味はなかつたに相違ないが、小說家としての價値を甚だしく高からしめなかつたのは、氏が小說家として世に立つといふ覺悟の極らなかつた爲めと思ふ。

然しながら氏の小說のよい方をいへば、素より他人の及ばぬ妙所はいくらもある。第一は字句の洗錬、文章の老熟、それから觀察の細緻、描寫の巧妙。此等の點に於ては駈出しの青年作家などは素より、今日の如何なる作家をも感服せしむるに足るものがある。弱點は寧ろ旨過ぎる所巧み過ぎる所にあるといひたい位だ。

第一卷に收めてあるのは「浮雲」「其面影」「平凡」の三長篇であるが、今日から見て「浮雲」の幼稚なることはいふ迄もない。然し明治の新興文字の先驅として、又言文一致體の文章の最初の最良なる文例として、歷史的の意義あること此篇の如きは蓋し他に比肩すべきものがないであらう。若し明治文學史を編纂するならば「其面影」や「平凡」を略しても此篇は必らず擧げなくてはならぬ。然し若し純文藝上の立場からいへば他の二篇の價値が迥かに「浮雲」の上にあることは何人も之を疑けない。全體としての作の力の乏しいことは前に述べた通りであるが、部分的に見れば實によく出來て、感嘆を禁じ得ない處が少くない。明治文壇の名珠の中に數へて決して差支からうと思ふ。製本は極めて品がよく立派に出來て裝飾用としても役立つ。此實上高の利益は全部氏の遺族に贈るさうであるから僕は一册も多く此の本の賣れんことを祈る。因にいふが全集は全部四卷で、二卷三卷は露國文豪の飜譯四卷は小品文書簡等であるといふ。第二卷第三卷の飜譯の部は最も文壇に貢献する所多からうと思ふから一日も早く其出版の運びに至らんことを希望する。定價は一冊貳圓三十錢。

「藤村集」と「近作十五篇」。此二册の本は最も精細に嚴密に批評すべき充分の價値がある。人によつて說は違ふだらうが、藤村氏と花袋氏は少くとも今日の文壇に於ける二つの大立物(グレートフエギユーア)であつて、而かも殆んど總ての點に於てコントラストをなして居ることは何人も認めざるを得まい。此二冊の本は此二氏の最近の短篇を集めたもので、二氏の特徵は遺憾なくあらはれて居るから、二氏を研究するには絕好の書である。のみならず純文學に志ある人は熟讀玩味せば二氏から啓發せらるゝこと極めて多からうと思ふ。

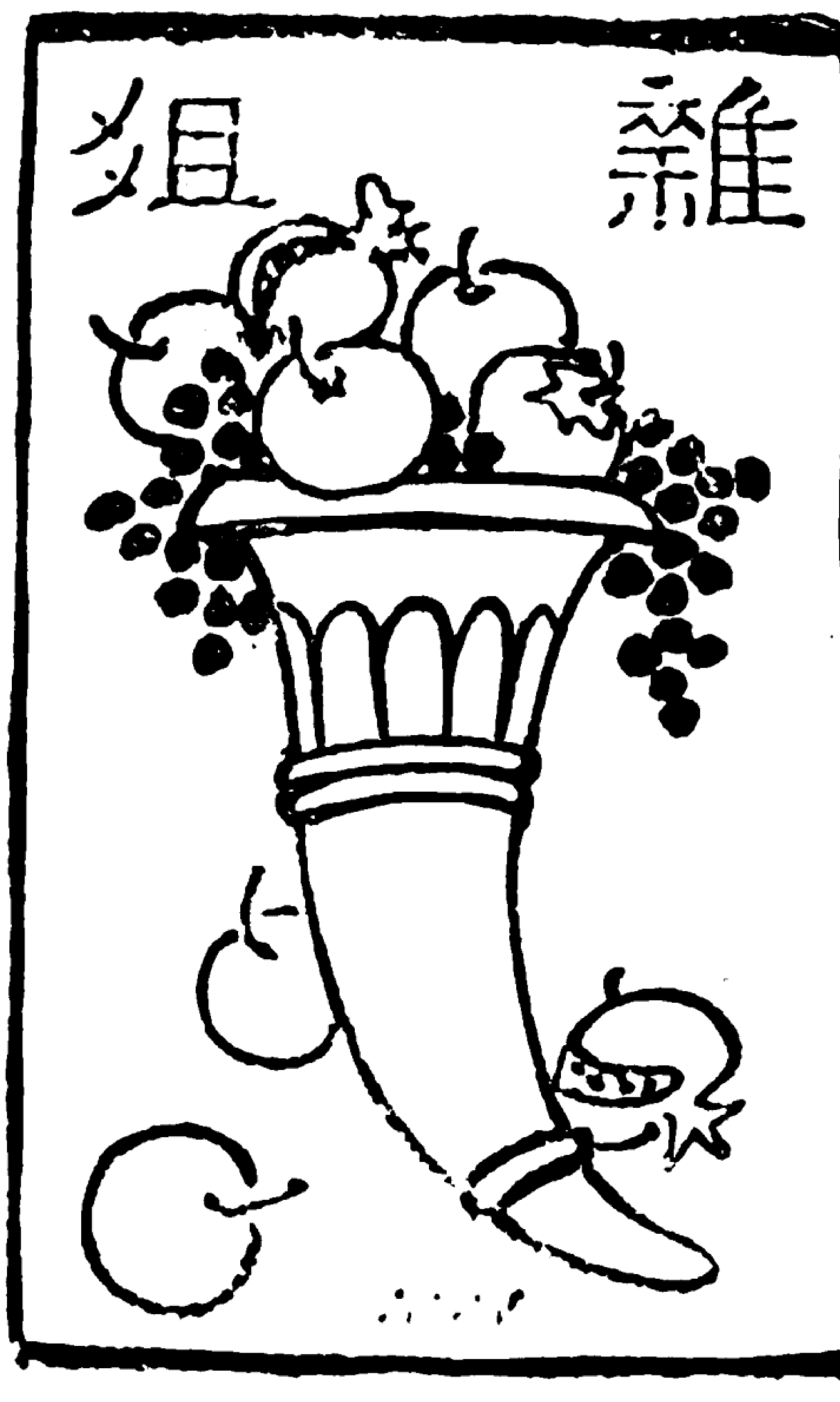
例を引き、證を擧げて、[illegible]比較論評することは僕の目的でないこ

又限られたる頁數では書けぬ。依て只大まかな直覺的感想のみを述べる。

藤村氏の小說は紙を落付けてゆつくり味ひながら讀むべき小說である。一度よりは二度、二度よりは三度讀む方が面白い。極めて滋味に富んで嚙めば嚙む程旨い。細心の注意、念入りの技巧、言を短かうして意を長からしめんとする苦心、殆んど一字一句の間にも現はれる。藤村一流のクセはチョイ〳〵見えぬこともないが、ソッといふべき程のソッはない。花袋氏になるとさうは行かぬ。疵は隨分多い。字句なり描寫なりに、投げ出して捨身になつて居る箇所が少くない。捨身の面白味はない事はないが先づ疵といつた方が當るやうな處が少くない。若し漢學者流の言葉でいへば藤村氏は醇乎として醇なるもので、花袋氏は大醇にして大疵あるものとでもいふべきだらう。花袋氏は何時も動く、移る。彼の美は動の美、活動の美である。藤村氏は何時も沈着いて居る。考へて居る。彼の美は沈靜の美、瞑想の美である。花袋氏はショックを與へて人の眼を覺まし、藤村氏はザッセッションを與へて人をして考へしめる。花袋氏は躍上つて、思ひ切つて大膽に思ふ所を遣つける。爲めに失敗もするし、又非常の成功もする。藤村氏は考へて〳〵考へ拔いてから、靜かに一步〳〵進んで行く。痛快といふ分子が少い代りに堅實にして奧床しい感を起さす。花袋氏の小說は饒舌過ぎる。藤村氏の小說は沈默過ぎる。一は時として露骨になり、淺薄になり、誇張になる。他は時として不徹底になり、獨り合點になり、影が薄くなる。花袋氏の「死」といふ小說の中に「降る、降る、實によく降る。鳴る、鳴る、實によく鳴る。今まで聞えて居た[illegible]ももう何處かに行つて了つて、天地は唯ザアと降る音、轟と鳴る音。」といふ文句があり、「[illegible]」の中には「五十年……百年……千年……萬年……萬々億々年……[illegible]」といふ文句があるが[illegible]

涯を敍した處の如き痛切な箇所は又「藤村集」に見當らない。花袋氏の小說には覇氣も見え、野性も見えるが、藤村氏のゝには磨いた技巧の中に、靜かに世相を味つて居る詩人の面影が見える。今日の所では、藝術家としては藤村氏の方が遙かに花袋氏の上にあらう。然し花袋氏は動いたり、移つたりする中に飛躍的進步をなす人であるから、サキが分らぬ人である。藤村氏は將來「戲曲」にも手を延ばす人であらうが、あの人の行くべき道は略ぼ見えて居るやうな氣もする。此點からいへば藤村氏は既成品で花袋氏は未製品の憾がないでもない。

若し作物の個々についていへば「藤村集」にあつては「奉公人」「旅」「雜貨店」「河岸の家」「芽生」「一夜」「弟子」等は佳作といふべく、「近作十五篇」中にあつては「幼兒」「町より山へ」「拳銃」「丘の家」等が佳作で、「罠」は多くの缺點あるに拘らず、氏の最も力ある作といはればならぬ。



噂の種

醉美生

●「寄生木」は德富健次郎著とあるが、中の序文を見ると、德富氏がチョイ〳〵筆を入れたに過ぎぬやうだといふこつちやないか。それを著といふのはちと可笑しいやうだね。殊にあの人の主義からいつたらどういふものだらう。そして大變賣れるさうぢやから、なか〳〵金の入ることだらうが、一體その金を誰が取るのかい。自分の著書でもないものから金を取るといふのは妙な話だ。救民救助とか、青森大火の義捐金にでもするのかね」と或文壇の大家が冷やかして居た。

○「僕は人道に谷だし、君は人道に山だから吾輩とはよく話が合はない」と山路愛山氏が蘆花氏にいつた事があるといふ。

○國民新聞社員が內山愚童氏の處へ青森大火の義捐金を募るに行つた

ら、管廼氏はどうしても應じない。已に公衆が眼を附け初めた慈善事業には我々の如き貧乏文士が苦しい思をして金を出す必要がない。世間には金持が澤山あるから、さういふ人からドシ〳〵出させるがよい。然し我々の痩せた藻口から出る僅か一圓か二圓の金で、時としては生命を取留めると、いふやうなものがある、さういふ世間でまだ眼を附けない慈善は我々もせなければならぬが、世間で眼をつけて新聞に廣告するやうになつた慈善事業には、もう貧乏文士を窘める必要がない』と頑張るあたりはどこまでも管廼式だ。

○「岩倉公實傳」上下二卷は、勅選で出來たものだが、大部のものを僅か百五十部しか印刷せないから一部二百五十圓位かゝつた相だ。そして中はなか〳〵正直に書いてあるから、誰にも彼にも見せる譯に行かぬので、上野の圖書館にも、大學の圖書館にもないといふ話だ。

○『夏目漱石氏の本の印税は一割五分から初まつて版が重なり次第二割、二割五分位まで上るので、文學者で最も高い印税とせられてゐたが、德富蘆花氏の「寄生木」は初めから二割五分であつた。そして半年も經たぬ中に二十何版かになつたから、其收入は大したものだらう』と或本屋が話して居た。

○「東京朝日」に「何處が面白い」といふ標題で今の小説を惡罵したべらんめえといふ男は桐生悠々氏だ相だ。

○「三田文學」の初號にはべらんめえ先生から攻擊されるやうな個所が少くなかつたので、直ちに學校の干渉が出て來た、二號には生田葵山氏の小説や、長田秀雄氏の脚本が載せられない事になつた相だ。

新刊批評

▲南國記

竹越與三郎著
二酉社發行

著者昨年志す所あつて蘭領印度、佛領印度等に遊び更らに一步深く雲南に入つて、所謂南國の政治、社會、風土、文物等を視察し、其珍奇怪異なる見聞を叙述紹介する外、著者の持論たる南進論を熱心に主張したるものにして、流麗の文、莊重の調。近來或は著者の文章の荒みたるなきかを疑ひ居れる邪をしても其判斷の誤なりしを愧ぜしむるに足れり。殊に序文の如きは三唱尙感嘆に値するの名文也。我邦が大陸に伸ぶべきか將た太洋に延ぶべきは實に現下の大問題にして國家の前途に關して心を勞する人は何人も等閑に附する能はざる所なり。或は著者の如く北守南進論を唱ふる人あり、又北守南進を卧じ詰れば北を失へ而して南を得る能はざるの破目に陷るべしと論ずる人あり、議論紛々として決する所あらず。兎に角近來稀に見る面白くして且つ意味多き著書として江湖に推奬するを憚らず。(定價二圓三十錢)

▲牧師の家

中村吉藏著
新潮社發行

新社會劇と銘を打て、「東京朝日」に連載せられ、次て東京座にて實演せられたる脚本にして、問題の演劇を研究して解明せる中村春雨氏の最初の創作也。全篇殆んどイプセン張りにして、或二三の箇所の如きは [illegible]

い所もあれども、又特に[illegible]に極めて[illegible]にして、藝術としての書き方の足らざるの缺點はあれども、一種の力と一種の新味とは全編に漲りて、人をして感動せしむる所も亦少からず。要するに甚き無意味なる脚本に比しては優れること萬々なるも、今少し藝術的の臭ひの豐かならんことを望むの情に堪えず。序文は氏の在來の日本劇に對する不平を述べて氣焔頗る高し。(定價金一圓)

▲兒童を謳へる文學　高島平三郎編　歩二畫　洛陽堂發行

兒童に關するいろ〳〵の文學を集めたるものにして、夢二氏の挿畫は例によつて氣が利いて面白し。(定價金一圓)

▲現代人物管見　横山健堂著　易風社發行

一種奇拔なる文體を以て、奇拔なる人物論をやる「黑頭巾」は横山健堂氏の別號なることは最早や世に隱れなき事實也。本書は黑頭巾氏の雜誌に出せる人物評を集めたるものにして、其殆んど三分の二以上は實に本誌上にあらはれたるもの也。收むる所の題目は大隈伯、平田東助、大石正巳、大浦兼武、後藤新平、山本伯と寺内子、憲政黨と政友會、秋元興朝、犬養毅、堀田正養、包圍されたる伊藤公、伊藤公の精神の十二にして何れも取り〳〵に面白し。(定價七十五錢)

▲人尊主義　黑岩周六著　新橋堂服部書店發行

今の世界が動もすれば物尊人卑にならんとするを慨し、人尊物卑主義を鼓吹せんとするが著者の目的なるが如し。而して書中の最も多くは文學美術等に關しての論文なるが著者には今の時代の文學がよく了解出來ぬやうに思はる。(定價五十五錢)

▲元祿快擧別錄　三田村玄龍著　啓成社發行

福本日南氏の元祿快擧錄が淺野家及び其家臣の義士を詳述せるに對し、之には吉良家及び其家臣の事を委しく考證したるものにして歴史家の參考となること多し。(定價金一圓)

▲名將言行錄　岡谷繁實輯　文成社發行

北條長氏、太田資長尼子經久、毛利元就、吉川元春、小早川隆景等の言行を錄したるもの他。(定價六十錢)

▲レッシングの詩　岡島狂花譯　讀賣新聞社發行

レッシングの詩極めて短少なるもののみを譯したるものにして、尚レッシングの不傳を附せり。(定價三十錢)

▲夢二畫集(夏の卷)　竹久夢二著　洛陽堂發行

夢二氏の漫畫は氣が利いて、詩趣があつて、若い人に喜ばれさうに出來て居る。此篇なども大抵涼しさうな繪ばかりて綠蔭の下に寢ころんて見るによい。畫の傍に並べた俳句なども畫と相待つて面白い。(定價五十錢)

▲新模式文範　情愛の書簡　水野葉舟著　春秋社發行

「情愛を中心としたる書簡の作法、作例、文範」ともいふべきもので、親子、兄弟、夫婦、朋友、情人等、總て純實用の目的にあらずして、情愛を中心とせる人々の間に取交はすべき手紙に對する著者の感想より説きだし、文範として著者並びに現代文士の著書中より、すぐれたる數十種の書簡を拔載せるものにして、讀み物としても面白く、青年子弟を啓發することは尠少ならざるべし。(定價六十錢)

▲實習新作文

五十嵐力著
博文館發行

「本書は新文章講話の姉妹篇である」と著者自序にある通り、文章の修辭法やら構成法やらは一切前著「新文章講話」に讓つて仕舞ひ、之には只それに應ずる實地應用の方が試みられて在る、平爻流麗の文章で手を把つて敎える樣に書いてあるから、何人も之に由つて容易く道に入るを得べく文例を擧ぐるにも、在來の者の如くに古今人の名篇傑作のみを狙ふ事なく、上中下の三品位に分けて列擧し、作文の道に幾種の段階あるを示し、易より難に、卑より高に、野より雅に進ましめんとする用意を潜むる邊りは其創意を見るべきであらう、尙ほ少からぬ知名の作家の作品に對し一々其修辭の如何、氣品の如何の說明のあるのは、更に本書を名けて諸名家文評といつても宜い程で、作文の好指南たる外に更に別種の興趣をも覺えしめる、新文章講話と併讀する最も善く、併讀せざる亦妨げざる値を有して居る。(正價金壹圓七拾錢)

▲七番日記

一茶同好會編輯に發行

一茶が柏原に退栖時代即ち文化元年より文化十五年十二月に至る間の日記で、前後九年間の彼が日常の動靜、周圍の狀況、及び其句作の全部が含まれて居る、終りに「斷篇」の名の下に收められた幾篇かが敍つて居る、其中の老婆の三十三回忌の事を記せる條に「菩の婆婆をつく〳〵法師〳〵哉」とあるのを見て、其地の文と映發して今更に感を新にした如く一茶の句には形に不檢束のもの語に破天荒のものが有るに拘らず、中に悲痛の溢れる眞情の橫溢を見るので常に矣て驚き興趣を覺ゆる、此俳聖一茶の此如き遺著が特志なる一茶同好會の人々によつていや次々に出版されたのは甚だ喜ばしき事に思ふ。卷頭に一茶の肖像一茶の居、一茶の碑續いて幾葉の筆蹟の鮮明なる寫眞版のあるのは更に愛玩を値する(非賣品、只甲乙兩種の會員に配付するもの、甲種會費貳圓五十錢、乙種會費八圓)

▲イプセン全集　卷の一

柳川春葉、佐藤紅綠譯著
杉本梁江堂發行

イプセンの「蘇生の日」と「ヨヨン、ガブリエル、ボークマン」と二篇を收めたもの、譯文暢達讀み味ふべき値がある。(定價金壹圓參拾錢)

▲彗星的人物

伊藤銀月著
千代田書房發兌

ハレー彗星の地球に接近する市井に喧傳せらるゝの時に當つて本書出づ、何となく緣日商人、際物師といつた樣な感じもしたが、開卷第一章に先づ「彗星と世の治亂との關係に就ての新解釋」と題して一寸一理窟を捏ねてある處は一寸用心深い、彗星などはそつち除けてよいが、彗星的人物として擧げた人物評の筆の頗る輕快なるを愛する。(定價金六十錢)

▲讀書法

加藤咄堂著
東亞書房發兌

書籍の多きこと、最早や汗牛充棟の熟字位ては形容の重荷が背負ひ切れぬ現代に於て、讀書子には何とか工夫なかるべからず、此求めに應ずるに讀書法なるものが必然に必要になる此內讀書に關する諸般の注意が網羅されて居るから一讀過の値はある、附錄の社會敎育史の瞥見、何等の卓拔の意見あるてもないが、大體の樣子を知るには一助となるであらう。(正價九十五錢)

關東大賣捌所

東京神田表神保町	東京堂
仝 神田裏神保町	上田屋
仝 京橋尾張町	東海堂
仝 京橋元數寄屋町	北隆館
仝 本郷本富士町	盛春堂
仝 京橋西紺屋町	艮明堂
仝 日本橋本石町	至誠堂

關西大賣捌所

大阪東梅田町	盛文館
仝 京町堀	太華堂
京都佛光寺	東枝書肆

中央公論廣告料

一行（五號文字二十四字詰）	一回	金參拾錢
半頁	一回	金八圓
一頁	一回	金拾五圓
表紙の二、三、一頁	一回	金貳拾圓
表紙の四	一回	金貳拾五圓

廣告一手取扱 神田三河町二丁目 博報堂

○壹冊定價 金[illegible]拾錢外ニ郵税金壹錢五厘（[illegible]
郵税拾錢但清、韓兩國を除く）

冊數＼國別	內國	外國
六冊	金壹圓貳拾錢	金壹圓七拾貳錢
十二冊	金貳圓參拾錢	金參圓參拾四錢
	以上郵税共	

▲但し特價號は規定以外に代金を申受くべし▼

送金注意

一郵便爲替にて御送金の場合は本郷西片町十番地反省社と指定し拂渡局を東京東片町局と指定せられなば途中盜取せらるゝの虞なし

一弊社振替貯金口座は東京三十四番なりこれにより御送金の方は登記料壹錢を加へらるべし然らざれば御送金の內より差引くにより端金となりて却て御面倒となるべし

一郵券代用は必ず壹割增に送らるべし

一前金切の節は帶封に朱書いたすべし次の前金を送られざれば其號限にて發送を止むべし

一領收證を出さず望まるゝ向は返信料を添へらるべし

明治四十三年五月廿六日印刷
明治四十三年六月一日發行
（禁轉載）

發行兼編輯人 麻田駒之助
印刷人 天野耕一

發行所 東京市本郷區駒込西片町十番地 反省社
振替口座東京三十四番 電話下谷九一九 電信略號ハンセイ

印刷所 東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地 秀英舍第一工場

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

